

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第697集

南鹿糠Ⅰ遺跡発掘調査報告書

2019

(国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所  
（公財）岩手県文化振興事業団

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第697集

みなみかぬか

# 南鹿糠Ⅰ遺跡発掘調査報告書

三陸沿岸道路関連遺跡発掘調査

2019

国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所

(公財)岩手県文化振興事業団

# 南鹿糠 I 遺跡発掘調査報告書

三陸沿岸道路関連遺跡発掘調査



## 序

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を越す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史を生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは、県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、三陸沿岸道路整備事業に関連して、平成26・27・29年度に発掘調査された南鹿糠Ⅰ遺跡の発掘調査成果をまとめたものであります。今回の調査により、縄文時代は竪穴住居や陥し穴が見つかったことから、集落・狩猟場として、また、古墳時代末期の竪穴住居も1棟確認されたことから、当時の集落が周辺に形成されていた可能性があり、遺跡の内容やこの地域を理解する上でも大きな成果を得ることができたと言えます。

本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所、洋野町教育委員会をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成31年1月

公益財団法人 岩手県文化振興事業団  
理事長 菅野洋樹

## 例 言

- 1 本報告書は、岩手県九戸郡洋野町種市第16・17地割に所在する南鹿糠Ⅰ遺跡の発掘調査成果を収録したものである。
- 2 本遺跡の調査は、三陸沿岸道路建設事業に伴う事前の緊急発掘調査である。国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所と岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課との協議を経て、国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所の委託を受け、平成26年度は岩手県教育委員会生涯学習文化課、平成27・29年度は公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した。
- 3 岩手県遺跡台帳における遺跡番号と今回の調査における遺跡略号は以下のとおりである。  
遺跡番号… I F 58-1333 遺跡略号…MK I -14・15・17
- 4 発掘調査期間・面積・担当者は以下のとおりである。  
平成26年度－調査期間：平成26年11月4日～12月26日 面積：875㎡  
担 当 者：丸杉俊一郎・上垣幸徳・加藤竜・関真一・中澤寛将  
平成27年度－調査期間：平成27年4月17日～6月12日、9月14日～9月25日 面積：4,420㎡  
担 当 者：久保賢治・高橋義介・古舘貞身・久保友咲  
平成29年度－調査期間：平成29年4月7日～5月22日 面積：2,100㎡  
担 当 者：高木晃・小林弘卓・佐藤奈津季・中島康佑
- 5 室内整理期間は以下のとおりである。  
平成26年度：平成26年1月1日～平成27年3月31日  
平成27年度：平成27年11月1日～平成28年1月31日  
平成29年度：平成30年1月1日～2月28日
- 6 報告書の執筆は、第Ⅰ章を国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所、第Ⅱ章を久保(賢)・小林、第Ⅲ・Ⅴ章を丸杉・久保(賢)・小林、第Ⅵ章を株式会社加速器分析研究所、第Ⅶ章を小林が執筆した。なお、第Ⅳ章は、1・2節を小林、3節を丸杉(各遺構記載内<考察>部分については、編集者が記載)、4節を久保(賢)が担当したが、5節は調査遺構担当者(小林・佐藤・中島)による分担執筆とし、文末に名前を付した。本書の最終的な構成・編集は小林が行った。
- 7 野外調査における委託業務は以下のとおりである。  
基準点測量(平成27・29年度)：有限会社ダイヤ測量設計  
航空写真撮影(平成29年度)：東邦航空株式会社
- 8 試料の分析・鑑定は次の機関に依頼した。  
放射性炭素年代測定(平成27・29年度)：株式会社加速器分析研究所  
炭化材樹種同定(平成29年度)：(前)木炭協会 阿部利吉氏  
石質鑑定(平成29年度)：花崗岩研究会
- 9 石器の一部は、株式会社ラングに実測図化委託をした。(平成29年度)
- 10 野外調査においては、千田政博氏(洋野町教育委員会)にご協力、ご指導いただいた。
- 11 今回の発掘調査で出土した遺物・諸記録の一切は、全て岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。
- 12 本遺跡の調査成果は、既に当センターのホームページ、調査概報等で公表しているが、記載が異なる場合は本書の報告内容がすべてにおいて優先する。

## 凡 例

- 1 遺構実測図の縮尺は以下のとおりである。各図にスケールと縮尺を付した。
  - 竪穴住居跡…1/50
  - 竪穴住居跡の炉・カマド、焼土遺構…1/25、1/30
  - 土坑・陥し穴…1/40
  - 溝跡…1/300(平面)、1/100(断面)
- 2 層位は、基本層序にはローマ数字を、遺構の埋土にはアラビア数字を用いた。
- 3 遺構図版中の土器は「R P」、石器および礫は「S」と表記した。なお、土層断面図内の「K」は攪乱を表す。
- 4 各遺物実測図の縮尺は原則以下のとおりである。写真図版中の遺物についてもこれに準じた。
  - 土器・土製品・礫石器…1/3
  - 剥片石器…1/2
  - 銭貨…1/1
- 5 遺物観察表の計測値の破損のあるものについては、残存値は( )、推定値は< >で表した。
- 6 遺構図版および遺物図版中に網掛け・塗りをしている範囲については、個々に凡例を付している。
- 7 土層の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」に基づいている。
- 8 国土地理院発行の地形図を掲載したものには、図中に図幅名と縮尺を付した。

## 目 次

I	調査に至る経過	1
II	立地と環境	
1	遺跡の位置	1
2	周辺の地形	1
3	周辺の遺跡	4
III	調査・整理の方法と経過	
1	平成26年度調査	
(1)	調査経過	6
(2)	調査区の設定	6
(3)	表土除去・遺構検出と精査	6
(4)	記録作成	7
(5)	室内整理	7
2	平成27年度調査	
(1)	調査経過	7
(2)	室内整理	8
3	平成29年度調査	
(1)	調査経過	8
(2)	調査区の設定と遺構の命名	8
(3)	調査の方法	9
(4)	整理の方法	9
IV	検出された遺構	
1	調査の概要	12
2	基本層序	12
3	平成26年度調査	14
(1)	竪穴住居跡	14
(2)	土坑	18
(3)	陥し穴	23
(4)	溝状遺構	24
4	平成27年度調査	34
(1)	竪穴住居跡	34
(2)	土坑	35
(3)	陥し穴	36
(4)	焼土遺構	37
5	平成29年度調査	44
(1)	竪穴住居跡	44
(2)	土坑	45
(3)	陥し穴	47

V	出土遺物	
1	土器	56
(1)	縄文土器	56
(2)	弥生土器	57
(3)	土師器	57
2	土製品	58
3	石器・石製品	58
4	銭貨	59
VI	自然科学分析	
	放射性炭素年代(AMS測定)	77
VII	総括	81
	報告書抄録	111

## 図版目次

第1図	遺跡位置図	2	第22図	遺構配置図(平成29年度調査区)	49
第2図	標高区分図	3	第23図	S I 12 竪穴住居跡	50
第3図	周辺の遺跡図	5	第24図	S I 13 竪穴住居跡(1)	51
第4図	調査範囲図	10	第25図	S I 13 竪穴住居跡(2)、S K 36・37 土坑	52
第5図	基本土層柱状図	12	第26図	S K 38・39・42 土坑、S K T 10 陥し穴	53
第6図	遺構配置図(全体)	13	第27図	S K T 11・12 陥し穴	54
第7図	遺構配置図(平成26年度調査区)	25	第28図	S K T 13~15 陥し穴	55
第8図	S I 01~03 竪穴住居跡	26	第29図	土器1(S I 07・10・11)	60
第9図	S I 04・05 竪穴住居跡	27	第30図	土器2(S I 12)	61
第10図	S I 06~08 竪穴住居跡	28	第31図	土器3(S I 12・13)	62
第11図	S I 09 竪穴住居跡、S K 01~04 土坑	29	第32図	土器4(S K 12・21・27、S D 01、遺構外)	63
第12図	S K 05~11 土坑	30	第33図	土器5(遺構外)	64
第13図	S K 12~22 土坑	31	第34図	土製品(S I 12)、 石器・石製品1(S I 02・04・07)	65
第14図	S K T 01~04 陥し穴	32	第35図	石器・石製品2(S I 10・11)	66
第15図	S D 01 溝状遺構	33	第36図	石器・石製品3(S I 11・12)	67
第16図	遺構配置図(平成27年度調査区)	38	第37図	石器・石製品4(S I 12・13)	68
第17図	S I 10 竪穴住居跡	39	第38図	石器・石製品5(S K 27・30・36・37・39、 S K T 07、S D 01)	69
第18図	S I 11 竪穴住居跡	40	第39図	石器・石製品6(S D 01、遺構外)	70
第19図	S K 27・29・30 土坑、S K T 05 陥し穴	41	第40図	石器・石製品7(遺構外)	71
第20図	S K T 06・07 陥し穴	42	第41図	石器・石製品8(遺構外)、銭貨(S D 01)	72
第21図	S K T 08・09 陥し穴、 S N 01~04 焼土遺構	43			

## 表目次

第1表	周辺遺跡一覧表	4	第5表	石器・石製品観察表	74
第2表	遺構変更名一覧表	11	第6表	銭貨観察表	76
第3表	土器観察表	73	第7表	遺構一覧表	82
第4表	土製品観察表	74			

## 写真図版目次

写真図版1	S I 01~08	84	写真図版17	S K T13~15、 基本土層、作業風景	100
写真図版2	S I 07・09、S K 07~09・19	85	写真図版18	土器1 (S I 07・10)	101
写真図版3	S K 21、S D01、 S K T01・02・04	86	写真図版19	土器2 (S I 10~12)	102
写真図版4	S I 10	87	写真図版20	土器3 (S I 12・13)	103
写真図版5	S I 11	88	写真図版21	土器4 (S K 12・21・27、 S D01、遺構外)	104
写真図版6	S K 27・29・30、S K T05	89	写真図版22	土器5 (遺構外)	105
写真図版7	S K T06~09	90	写真図版23	土器6 (遺構外)、土製品 (S I 12)、 石器・石製品1 (S I 02・04・07・10)	106
写真図版8	S N01~04	91	写真図版24	石器・石製品2 (S I 10~12)	107
写真図版9	調査前風景、基本土層、検出状況、 作業風景	92	写真図版25	石器・石製品3 (S I 13、 S K 27・30・36・37・39、 S K T07、S D01)	108
写真図版10	航空写真	93	写真図版26	石器・石製品4 (S D01、遺構外)	109
写真図版11	S I 12(1)	94	写真図版27	石器・石製品5 (遺構外)、 銭貨 (遺構外)	110
写真図版12	S I 12(2)	95			
写真図版13	S I 12(3)	96			
写真図版14	S I 13	97			
写真図版15	S K 36~39	98			
写真図版16	S K 42、S K T10~12	99			

## I 調査に至る経過

南鹿糠 I 遺跡は、一般国道45号三陸沿岸道路事業(侍浜～階上)の事業区域内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

三陸沿岸道路は、宮城、岩手、青森の各県の太平洋沿岸を結ぶ延長359kmの自動車専用道路で、東日本大震災からの早期復興に向けたリーディングプロジェクトとして、平成23年度にこれまで事業化されていた区間も含め、全線事業化された復興道路である。

当該遺跡に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、平成26年度に道路本線用地に先立ち工事用道路用地875㎡を対象とした本調査が岩手県教育委員会により行われた。この本調査に係る経緯については本書第Ⅲ章 1 節(1)に記載されている。

道路本線分の取り扱いについては、平成27年 1 月12日付け国東整陸一調第47-2号により、三陸国道事務所長から岩手県教育委員会生涯学習文化課総括課長あてに試掘調査を依頼し、平成27年 2 月 4 日～5日に試掘調査を行った結果、及び平成26年度に実施された工事用道路用地の本調査結果を受けて、平成27年 3 月12日付け教生第1732号により、工事に先立って発掘調査が必要と回答がなされた。

これらの結果を踏まえて、岩手県教育委員会と協議を行い、平成27年 4 月10日付けで公益財団法人岩手県文化振興事業団と委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

(国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所)

## II 立地と環境

### 1 遺跡の位置

南鹿糠 I 遺跡の所在する洋野町は、岩手県の北東部に位置し、北は青森県三戸郡階上町、西は九戸郡軽米町、南は久慈市に接し、東は太平洋に面している。平成18年に九戸郡種市町と同郡大野村が合併し洋野町となり、総面積は303.2km<sup>2</sup>を有する。

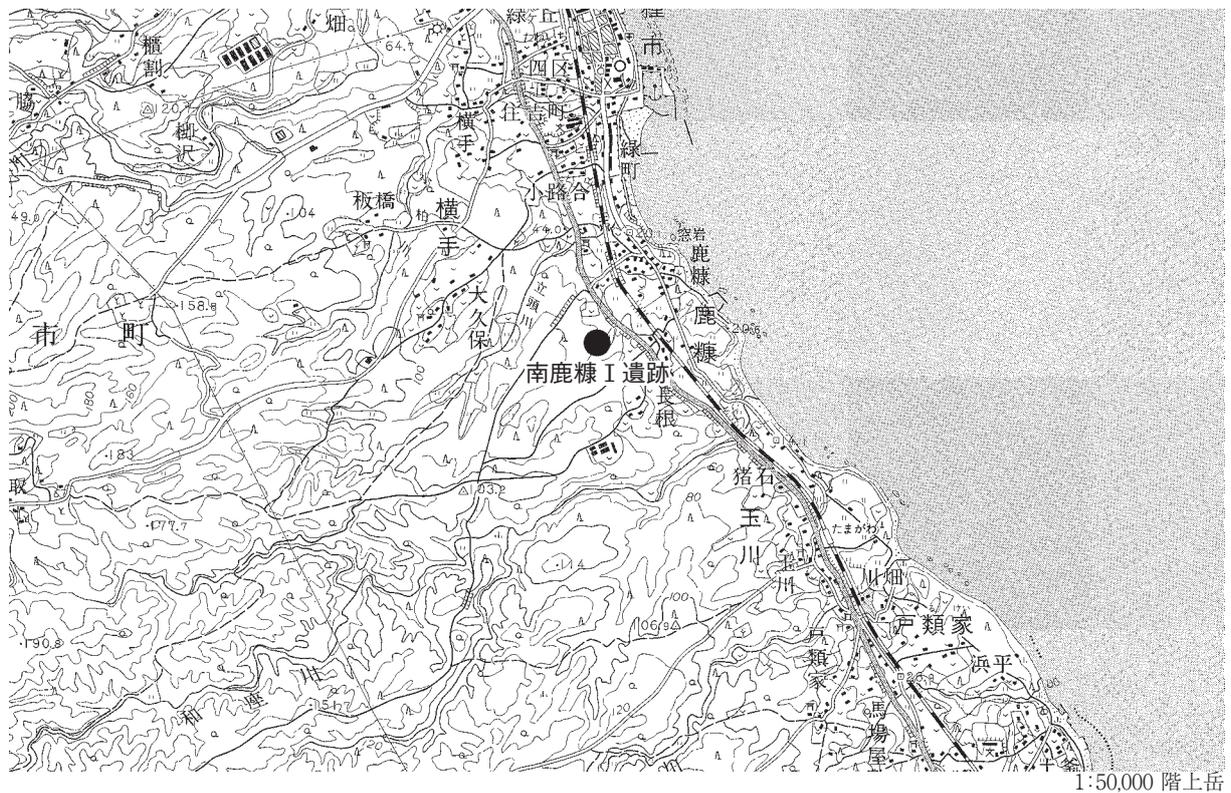
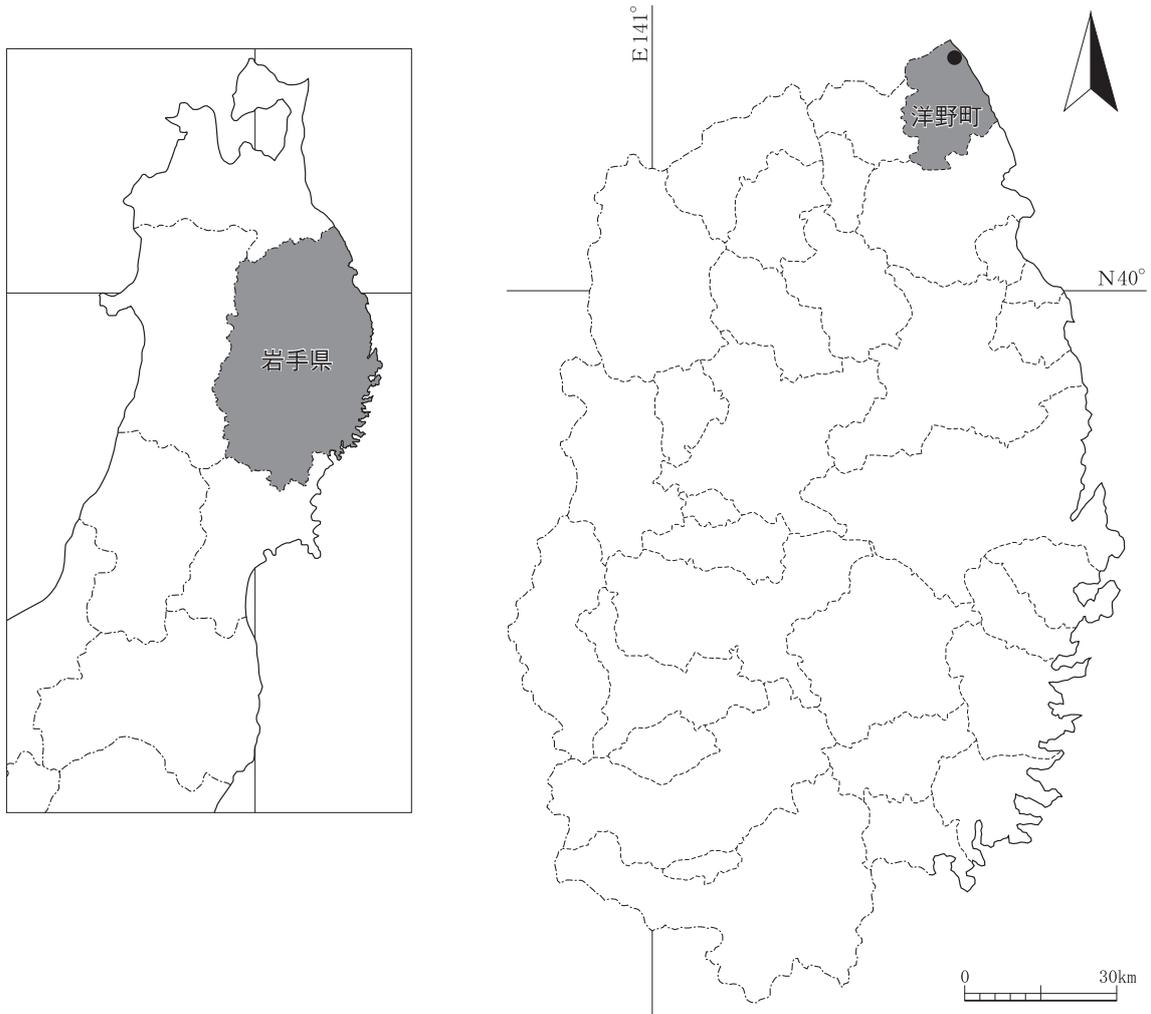
本遺跡の所在する種市地区は、洋野町の北側の中心市街区にあたり、遺跡は洋野町役場から南西方向に約1.8kmの地点、種市第16・17地割内に位置する。標高約60～75mの海岸段丘上に立地し、現況は山林である。地形図上では、国土地理院発行の5万分の1地形図「階上岳」、2万5千分の1地形図「種市」の図幅に含まれ、北緯40度23分35秒、東経141度43分00秒付近にある。

### 2 周辺の地形

洋野町種市周辺は海岸段丘が発達しており、標高約20m～50mは種市段丘、約50m～100mは白前段丘、約100m以上は九戸段丘におおよそ分類されている。標高100m以上の九戸段丘には河川による開析(浸食)が進み、谷地形が発達していることが看取できる。一方、標高20m以下の最も新しい沖積段丘面上を国道45号線が南北に縦断しており、現在の種市市街地の大半が含まれていることが分かる。

本遺跡は周辺地域で発達している海岸段丘の段丘面と段丘斜面に立地している。この海岸段丘は白前段丘にあたり、河川による開析(浸食)が進んでおり、段丘面の末端部は尾根状の地形を成している。

今回の発掘調査により、平坦な段丘面と緩やかな開析が進む段丘斜面に集落や狩猟場が形成されていることが確認された。段丘斜面の下位には現在、冬季でも一定の水量がある涸れない沢が流れてお



第1図 遺跡位置図



1:25,000 種市

第2図 標高区分図

り、古代においても水が得やすい環境であったことが容易に想像できる。また、太平洋に直接流れ込んでいる沢であるため魚影が濃く、立地的にも海と山の双方からの恵みを楽しむ地であったものと推測される。

### 3 周辺の遺跡

洋野町内に所在する遺跡は、平成29年3月末現在、210遺跡が岩手県遺跡台帳に登録されている。三陸沿岸道路建設事業に伴い、洋野町においても平成26年度から多数の遺跡が調査されている。第3図幅中においても、南川尻遺跡(2)・サンニヤⅠ遺跡(4)・サンニヤⅡ遺跡(5)・サンニヤⅢ遺跡(6)・北鹿糠遺跡(11)・鹿糠浜Ⅰ遺跡(14)・鹿糠浜Ⅱ遺跡(13)が該当する。縄文時代を主体とする遺跡が多いが、古代の遺構・遺物が部分的に確認されている遺跡もある。また、これ以外には平成8・12年度にゴッソー遺跡(9)の調査が行われており、縄文時代中期～後期の竪穴住居跡や前期の土器が多量出土している。なお、全域の町内遺跡については、洋野町教育委員会刊行の洋野町埋蔵文化財調査報告書第1集「平内Ⅱ遺跡発掘調査報告書」に詳しい。

第1表 周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	種別	時代	主な遺構・遺物	調査歴・その他
1	南鹿糠Ⅰ	縄文	集落跡	竪穴住居跡、陥し穴、縄文土器(早・前期)、土師器、石器ほか	報告遺跡
2	南川尻	縄文	散布地	縄文土器、石器	平成26年度調査 岩埋文第647集所収
3	南館	中世	城館跡	堀跡(破壊)	
4	サンニヤⅠ	縄文	散布地	縄文土器	平成28年度調査
5	サンニヤⅡ	古代	集落跡	竪穴住居跡、土坑、縄文土器、土師器	平成26年度調査(県教委) 県調査報告書第146集所収
6	サンニヤⅢ	縄文	狩猟場	陥し穴、縄文土器	平成28・29年度調査
7	横手	縄文・古代	散布地	縄文土器(晩期)、土師器	
8	トチの木	縄文	散布地	縄文土器(後・晩期)	
9	ゴッソー	縄文	集落跡	縄文土器(早～晩期)、製塩土器、弥生土器、竪穴住居跡、土坑ほか	平成8・12年調査 岩埋文第238・357集
10	板橋館	中世	城館跡	単郭、堀跡	
11	北鹿糠	縄文	散布地	縄文土器、石器	平成28年度調査
12	大久保	縄文・古代	散布地	縄文土器(前・後・晩期)、石斧、土師器	
13	鹿糠浜Ⅱ	縄文	集落跡	縄文土器(後期)、石器	平成29年度調査
14	鹿糠浜Ⅰ	縄文	散布地	縄文土器、石器	平成29年度調査
15	玉川Ⅱ	縄文	散布地	縄文土器(前期)	
16	玉川Ⅰ	縄文	散布地	縄文土器(早期)	
17	戸類家	縄文	散布地	縄文土器(晩期)、土偶	



第3図 周辺の遺跡図

### Ⅲ 調査・整理の方法と経過

#### 1 平成26年度調査

##### (1) 調査経過

道路本線の工事に伴い、これにアクセスする工事用道路の設定が急務となった。そのため、平成26年10月7日に対象範囲にトレンチを10箇所設定し、試掘調査を行った。その結果、中央～南部の丘陵斜面から平坦部にかけてのトレンチで、溝状の遺構や土坑、縄文土器が確認された。これにより、遺構・遺物が確認された範囲が本調査の対象範囲となった。

密生している樹木の伐採終了後の11月4日より調査を開始した。当初830㎡を対象範囲としていたが、南側を調査するに従い、竪穴住居跡・土坑等が濃密に分布する様相が看取できた。そのため、11月20日に委託者と協議し、調査区を本線部分との境界付近まで拡張したが、その結果、拡張範囲では遺構密度が極めて高い状況が確認された。したがって、本線部分においても埋蔵文化財が存在することは確実となり、工事に先立って発掘調査を実施する必要に迫られた。このような状況の中、発掘調査期間と工事施工工程、遺跡の重要性などを鑑みて、①今回の調査範囲は当初計画範囲に遺構が存在しない拡張部東側を加えること、②12月末日に発掘調査を完了させること、③遺構が密集する拡張部西側は次年度に調査を実施すること、④本線部分は再度試掘調査を行い調査範囲を確定して次年度に本調査を実施すること、が12月18日に三陸国道事務所との現地協議において方針として取りまとめられた。そして、12月26日に上記①の範囲875㎡の調査が完了した。

##### (2) 調査区の設定

調査区の東西には道路施工工事の幅杭がおよそ10m間隔で打設されていたため、これを利用し区域の設定を行い、北側からA区・B区…～F区とした(第5図)。遺構外出土遺物はこれを使用し、層位ごとに取り上げを行った。

##### (3) 表土除去・遺構検出と精査

調査対象地域の表土は、重機(バックホー)を用いて掘削した。バックホーのバケットには平爪を装着して掘削を行った。樹木が密生していたためキャタピラーの脱輪が数多く発生するなど、作業の進捗は良いとはいえない状況であった。掘削時の排出土はクローラーダンプを使用して調査区外へと搬出した。表土除去の後、調査進行の際に支障となる多数の樹木の伐根作業を人力により実施した。

遺構検出面までの掘り下げには、主にスコップ・鋤簾を用いた。遺物が多く包蔵されているため、土を細かく割りながら進めた。排土は人力及びクローラーダンプを使用して調査区外へと搬出した。遺構検出は鋤簾・両刃鎌・移植ごてを使用した。検出した遺構は、両刃鎌・移植ごて・手鋤等を使って掘り下げを行った。遺構内の調査の際には、小規模な遺構であれば2分割、竪穴住居跡のような比較的規模の大きな遺構ではセクションベルト等を設定し、平面と断面により観察しながら慎重に掘削して埋土の堆積状況の把握に努めた。

遺物は発見時に出土位置・層位などの状況を確認し、遺構に伴うものは出土状況を写真や図面に記録して取り上げた。その他の遺物は、出土場所と層位を記載して取り上げた。

#### (4) 記録作成

平面図はトータルステーションと(株)キュービック社の遺構実測支援システム「遺構くん」を用いた。埋土が特徴的な遺構については、土層断面図を作成した。

写真撮影は、記録保存用としてデジタル一眼レフカメラを用い、必要に応じてコンパクトデジタルカメラでも撮影した。しかし、12月は厳寒による低温の影響でデジタル一眼レフカメラに不具合が頻発し、コンパクトデジタルカメラを主体に撮影せざるを得なかった。

#### (5) 室内整理

資料整理は平成27年1月～3月に実施した。次年度へ効率良く引き継ぎができるよう、調査記録・出土遺物等の基礎整理を進めた。発掘調査によって作成された図面・写真等は番号等を付記した上で分類し、台帳を作成した。出土した遺物は水洗・分類し、仮収納をした。

遺構図面はデジタルにて実施し、その整理・編集にはAdobe社「Illustrator」や(株)キュービック社「トレースくん」を用いた。検出遺構については事実記載を行い、次年度へ引き継いだ。

## 2 平成27年度調査

### (1) 調査経過

前年度に行われた試掘調査の結果に基づき、委託者との協議を経て調査区が設定されている。

平成27年4月17日より調査を開始した。調査対象面積は4,200㎡である。調査員3名、野外作業員28名体制でのスタートとなった。

調査区にはグリッドを設定した。グリッドは平面直角座標第X系(世界測地系)に合わせ、まず100×100mの大区画を設定し、これを4×4mの小区画に細分した。北西隅を基点(X=43992、Y=74996)とし、大グリッドは西から東にⅠ・Ⅱ…とローマ数字を、北から南にA・B…とアルファベット大文字を、小グリッドは西から東に1・2…とアラビア数字を、北から南にa・b…とアルファベット小文字を当て、これらの組み合わせでⅠA2bというように呼称した。

本調査は表土除去から始めている。重機(バックホー0.45㎡、キャリアダンプ6t)を用い、その後、人力による遺構検出作業を行った。検出した遺構は規模や性格により、適宜に4分法と2分法を選択し精査を進めた。

各遺構については平面と断面、また必要に応じ遺物出土状況の実測および、写真撮影を行った。実測方法については、(株)キュービック社の遺構実測支援システム「遺構くん」を用いて、トータルステーションによる測量を行った。

写真撮影は主にデジタルカメラ1台(Canon EOS5D)と35mm一眼レフカメラ(モノクロームフィルム)を使用し、同アングルをデジタル写真・銀塩写真の両方で撮影している。

6月4日に調査を行った4,200㎡についての終了確認を受け、6月12日に現場から資材等を撤収し、調査終了となった。

その後、事業用地の追加買収により、9月14日から9月25日までの期間、今年度2回目となる野外調査を実施した。調査対象面積は220㎡である。調査員2名、野外作業員8名体制で行った。調査方法および使用した機材等の一切は上記と同様である。

## (2)室内整理

平成27年11月1日から平成28年1月31日の期間に室内整理員2名体制で行った。

平成26年度の出土遺物についても、上記の期間・体制のもと併せて整理作業を実施した。

遺物は水洗から始め、以降の工程(仕分け・注記、接合復元、実測、トレース、図版作成)を整理員が分担した。調査員は遺物の分類、原稿の執筆、遺物観察表の作成、実測図や図版のチェックを行った。

遺物の写真撮影は当センターの写場において写真技師が行った。撮影にはデジタル一眼レフカメラを用いている。

遺構図面の整理は、野外調査時に作成した平面図・断面図から、第2原図作成および遺構図版作成を行った。遺構・遺物図版の作成には(株)キュービック社「遺構くん」または「トレースくん」、Adobe社「Illustrator」を使用し、デジタルにて図版を作成した。

## 3 平成29年度調査

### (1)調査経過

平成29年度調査区は平成27年度調査区から続く北側部分に当たり、調査対象面積は2,100㎡である。

平成29年4月7日に資材を搬入し、調査を開始した。まず、全体の基本層序や遺構の有無を確認するため、試掘を行い、この結果をもとに重機による表土除去に取り掛かった。4月11日より重機稼働。4月13日から重機の粗掘りが終了した部分から遺構検出を開始。4月20日より、遺構検出と並行して一部遺構精査にも着手した。重機の作業に終了の目途が立ったため、4月24・25日に(有)ダイヤ測量設計に委託し、基準点測量を行った。遺構検出を終えて、遺構の密度的にはあまり高くないことが判明したが、土坑状のプランが多く、遺物もわずかながら出土することから、これらについても精査対象とし、トレンチ掘削または半裁により詳細を確認することとした。精査は概ね順調に経過し、5月10日に委託者・岩手県教育委員会生涯学習文化課立ち会いのもと終了確認を行い、5月22日を以って、資材を搬出し、本遺跡の調査を終了した。

### (2)調査区の設定と遺構の命名

前述したように今回の調査区は、平成27年度調査区から北側に続く部分にあたる。そのため、当初は前回に倣いグリッド設定を行うつもりであったが、前回のグリッド設定が前回調査区のみをカバーするだけのものであったことや新規に設定することで今後に混乱が生じる可能性(2種類のグリッドが混在)があること、また試掘の結果から見ても大量の遺物が出土する状況ではないことなどから、グリッド設定は行わないこととした。各遺構図には平面直角座標第X系の座標値を記した。

検出された遺構の名称は、前々回、前回から引き継ぐ予定であったが、両者とも遺構種別が区々であったり、同一名が使用されていたりと瑕疵があった。そのため、今後の調査に混乱が生じないように統一を図ることとし、初年度調査の平成26年度時に命名したものをベースに、遺構の種類に応じてアルファベットで略号化し、それぞれに番号を付した。本遺跡の3箇年の調査で使用した遺構種と略号は以下のとおりである。

竪穴住居跡…S I、土坑…S K、陥し穴…S K T、焼土遺構…S N、溝状遺構…S D

遺構ではないと判断したものや遺構の種類を変更した番号については、混乱を避けるため欠番扱いとした。なお、調査時と本報告において生じた遺構名の変遷については、第2表にまとめて記した。

### (3) 調査の方法

調査の開始とともに、樹木の伐採後に残った雑物の撤去、試掘を行った。試掘は地形に合わせ、約2m幅のトレンチを8本設定し、遺構検出面までの層位状況や遺物包含層の有無などを確認しながら人力で掘り下げた。遺構検出面までの深さは、尾根頂部で約50cm、斜面部では約80cmである。上位層に遺物の混在が少ないことから、重機により上層の掘削を行った。

重機による粗掘り終了後には、人力で遺構検出を行った。この際、遺構外出土遺物においては、調査区内の平面的な位置(北部・中央部など)と層位を記載し取り上げた。

検出した遺構は、竪穴住居跡は4分法または6分法、その他の遺構については2分法または4分法で精査を行い、各段階に応じて図面の作成や写真撮影を行った。遺構内出土遺物は可能な限り分層した埋土層位を記入して取り上げ、底面からの出土や残存状態の良い遺物については、写真撮影や図面を作成した。

現場での記録作成は、上記の図面・写真以外にフィールドカードを使用して、調査経過や遺構の詳細な状況を記録した。

平面実測には、前々回・前回調査と同様に、電子平板((株)キュービック社「遺構くん」)を用い、デジタルデータで記録した。断面実測については、標高値を基に設定した水糸を基準として計測を行い、縮尺20分の1または10分の1の手書き図を作成した。

写真撮影は、6×4.5cm判(モノクロームフィルム)の一眼レフカメラ(MAMIYA 645DF+)1台とフルサイズのデジタル一眼レフカメラ(Canon EOS5D-Mark II)1台を使用した。撮影に際しては、整理時の混乱を防止するために撮影カードを使用した。各遺構の埋土堆積状況や完掘時、遺物の出土状況などに加え、適宜記録を必要とした場合に撮影を行った。調査終了段階には、セスナ機による空中写真撮影を東邦航空(株)に委託している。

### (4) 整理の方法

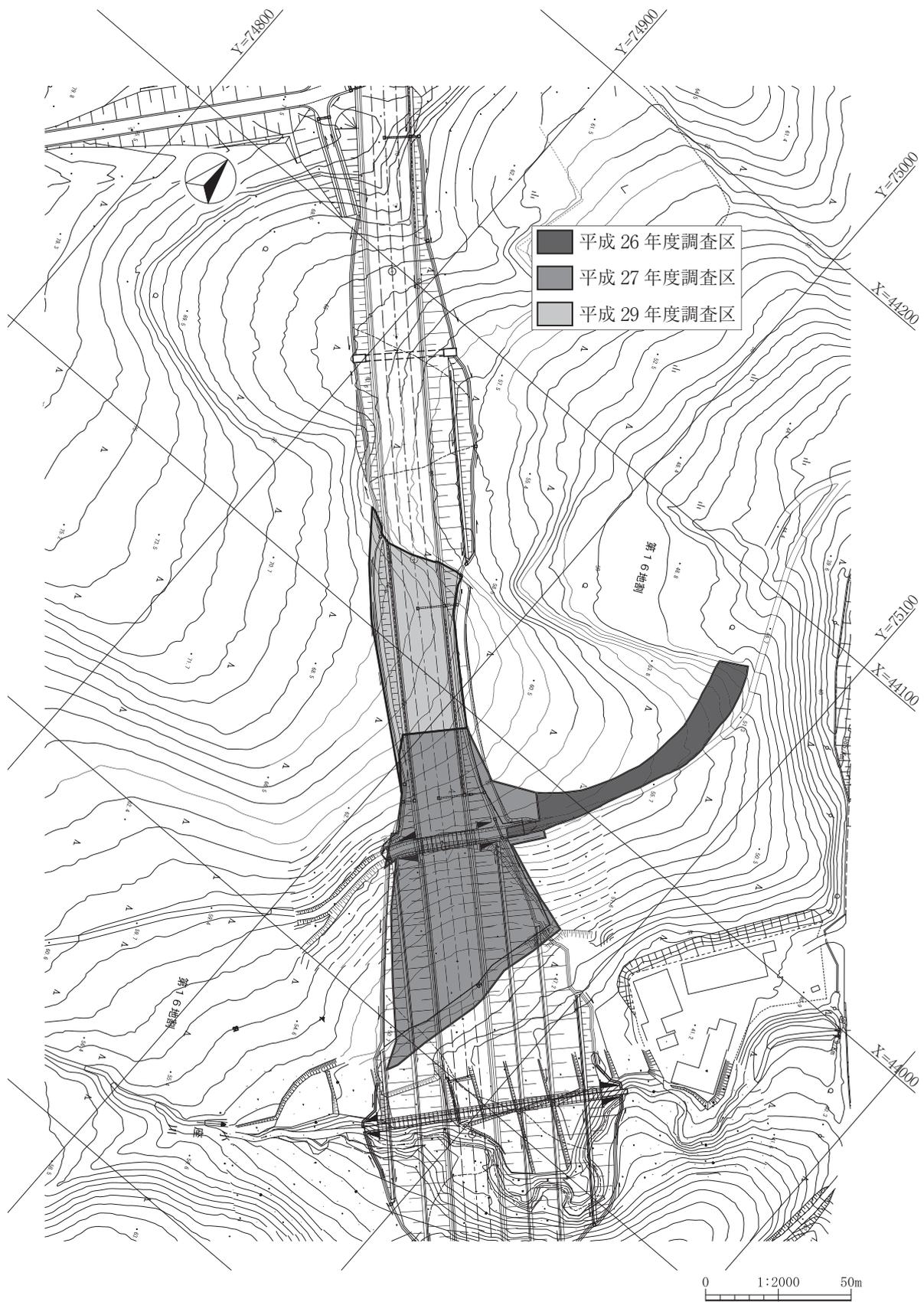
室内整理は平成29年7月1日～9月30日、平成30年1月1日～2月28日の期間で行った。

出土した遺物は、まず種類別(土器・土製品・石器・石製品)に分類し、取り上げた収納袋ごとに番号を付記し台帳を作成後、重量を計測した。その後、遺物別に出土地点等を注記し、接合・復元作業(主に土器のみ)を経て、本報告書掲載分と不掲載分に選別した。本書への掲載にあたっては、遺構内出土の遺物を優先して選び、表土層や攪乱部分からのものは基本的に不掲載としたが、特徴的な遺物についてはこの限りではない。

掲載分は種類ごとに仮番号を付し、登録作業を行った。これらは拓本(土器のみ)・実測図を作成後、点検・修正を経て、スキャナーで取り込み、Adobe社「Illustrator」でデジタルトレースを行い、デジタルデータとして編集・整理した。なお、一部の剥片石器類に関しては、(株)ラングに実測図作成を委託した。最終的には本書掲載に際し、遺構順に並び替え、登録番号から掲載番号へと付け替えている。

野外調査時の遺構写真等は、6×4.5cm判モノクローム写真は、ネガと共にアルバムに整理・収納し、デジタルカメラのデータは、各遺構ごとにフォルダを作成し、原則RAWデータを保管している。

遺物の写真は、当センター写真室で専任技師がフルサイズデジタル一眼レフカメラ(Canon EOS6D)で撮影・調整後、室内整理員が掲載に則して加工を行っている。



第4図 調査範囲図

第2表 遺構名変更一覧表

遺構名	調査年度 (平成)	旧遺構名	備 考
S I 01	26	竪穴住居 1	
S I 02	26	竪穴住居 2	
S I 03	26	竪穴住居 3	
S I 04	26	竪穴住居 4	
S I 05	26	竪穴住居 5	
S I 06	26	竪穴住居 6	
S I 07	26	竪穴住居 7	
S I 08	26	竪穴住居 8	
S I 09	26	竪穴住居 9	
S I 10	27	1号住居	
S I 11	27	2号住居	
S I 12	29		
S I 13	29		
S K 01	26	土坑 1	
S K 02	26	土坑 2	
S K 03	26	土坑 3	
S K 04	26	土坑 4	
S K 05	26	土坑 5	
S K 06	26	土坑 6	
S K 07	26	土坑 7	
S K 08	26	土坑 8	
S K 09	26	土坑 9	
S K 10	26	土坑10	
S K 11	26	土坑11	
S K 12	26	土坑12	
S K 13	26	土坑13	
S K 14	26	土坑14	
S K 15	26	土坑15	
S K 16	26	土坑16	
S K 17	26	土坑17	
S K 18	26	土坑18	
S K 19	26	土坑19	
S K 20	26	土坑20	
S K 21	26	土坑21	
S K 22	26	土坑22	
S K 23	27	1号土坑	S K T 05に変更→欠番
S K 24	27	2号土坑	S K T 06に変更→欠番
S K 25	27	3号土坑	S K T 07に変更→欠番
S K 26	27	4号土坑	S K T 08に変更→欠番
S K 27	27	5号土坑	
S K 28	27	6号土坑	S K T 09に変更→欠番
S K 29	27	7号土坑	
S K 30	27	8号土坑	
S K 31	29		欠番
S K 32	29		S K T 10に変更→欠番
S K 33	29		S K T 11に変更→欠番
S K 34	29		S K T 12に変更→欠番
S K 35	29		遺構ではないと判断→欠番
S K 36	29		
S K 37	29		
S K 38	29		
S K 39	29		
S K 40	29		S K T 13に変更→欠番
S K 41	29		S K T 14に変更→欠番
S K 42	29		
S K 43	29		S K T 15に変更→欠番
S K T 01	26	陥し穴 1	
S K T 02	26	陥し穴 2	
S K T 03	26	陥し穴 3	
S K T 04	26	陥し穴 4	
S K T 05	27	1号土坑	
S K T 06	27	2号土坑	
S K T 07	27	3号土坑	
S K T 08	27	4号土坑	
S K T 09	27	6号土坑	
S K T 10	29	S K 32	
S K T 11	29	S K 33	
S K T 12	29	S K 34	
S K T 13	29	S K 40	
S K T 14	29	S K 41	
S K T 15	29	S K 43	
S N 01	27	1号焼土	
S N 02	27	2号焼土	
S N 03	27	3号焼土	
S N 04	27	4号焼土	
S D 01	26	溝 1	

## IV 検出された遺構

### 1 調査の概要

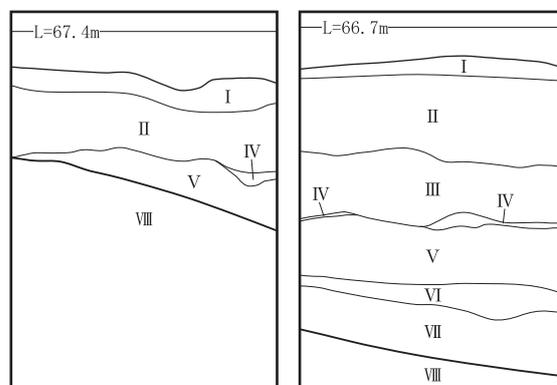
3箇年の調査で検出された遺構は、竪穴住居跡(S I)13棟、土坑(S K)30基、陥し穴(S K T)15基、焼土遺構(S N)4基、溝状遺構(S D)1条である。時代としては、主に縄文時代早期末葉、古墳時代(7世紀)、近世以降の3時代が見られる。

調査区は大半が尾根上の平坦部や緩斜面部にあたるが、平成26年度調査区のみ、東側に張り出した斜面の裾部分に掛かる。竪穴住居跡は調査区の東側で多く見つかっており、土坑や陥し穴は調査区内全域に散在している。遺構の密度としては、平成26年度調査区が最も高く、今回確認された遺構の半数以上がこの区域で検出されている。これらの大半は縄文時代早期末葉のものと考えられるが、一部で後期前葉や弥生時代の遺物も確認されている。また、北側の平成29年度調査区では7世紀の竪穴住居跡、東側の平成26年度調査区では近世以降と推定される溝状遺構も見ついている。なお、第3節以降の各遺構の事実記載に関しては、調査年度ごとに調査方法や記載項目も異なることから、それぞれ区分して報告することとする。

### 2 基本層序

平成29年度調査区の北側の調査区境において観察したものを記載・基準とした。堆積の薄い尾根上と厚い斜面部では若干様相が異なる。第5図に柱状図を示した。

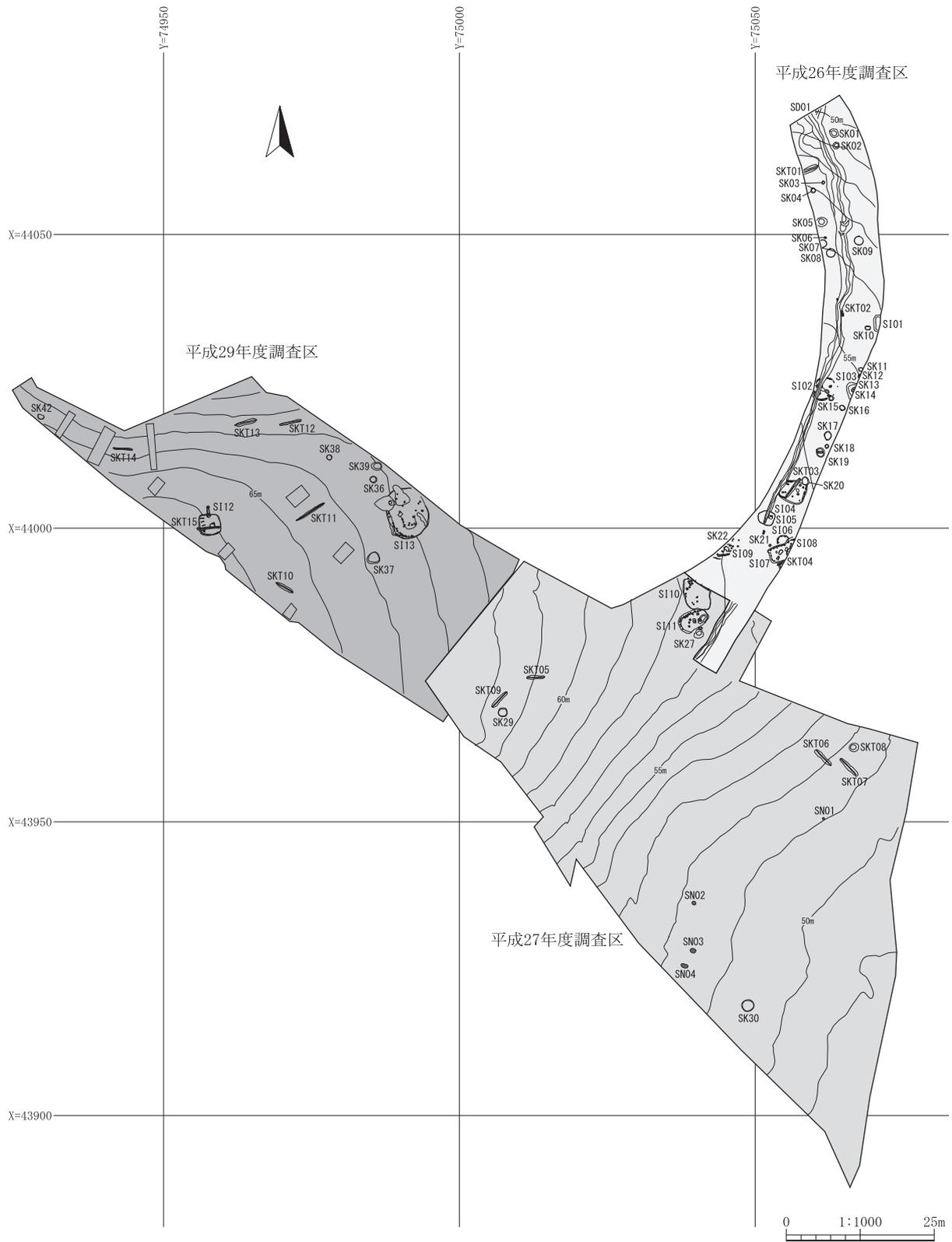
- I層…黒色土、現表土。
- II層…黒ボク土、下位にゴロタ細粒含む
- III層…黒ボク土、ゴロタ細粒を全体に含む、陥し穴の一部はこれより掘り込み
- IV層…明黄褐色(ゴロタ)ブロック、斜面でのみ確認、層状にはあまり見られない
- V層…暗褐～褐色土、ゴロタ細粒を少量含む、遺構検出面
- VI層…暗褐色砂質土
- VII層…黒褐色砂質土
- VIII層…八戸火山灰、地山、遺構検出面、層厚不明



第5図 基本土層柱状図

IV層は十和田南部浮石(ゴロタ)の火山灰ブロックだが、部分的にしか存在せず、層状には確認できないことから二次堆積の可能性がある。VI～VII層は、尾根上の平坦部ではあまり確認されず、斜面部にのみ存在する。下方に行くに従い層厚が厚くなるが、遺構・遺物とも確認はされていない。よって堆積の薄い平坦部の層序は、I - II - VIII層となる部分も多い。

今回の調査で遺構検出面となるのは、V・VIII層面である。V層は平坦部では薄く、存在しない場所も多いが、斜面では厚く堆積する。斜面部にある一部の遺構はこの上面での検出となった。VIII層は八戸火山灰で、基盤層となる。尾根平坦部はこの層の上面での検出しており、大半の遺構がこれに該当する。



第6図 遺構配置図(全体)

### 3 平成26年度調査

平成26年度の調査では、縄文時代早期末葉を中心としたものと、近世以降の遺構が確認された。検出された遺構は、竪穴住居跡9棟、土坑22基、陥し穴4基、溝状遺構1条である。なお、本報告に先立ち、岩手県教育委員会発刊の「岩手県文化財調査報告書第146集 岩手県内遺跡発掘調査報告書(平成26年度復興関係)」があるが、以下報告内容については本書の記載がすべてにおいて優先する。

竪穴住居跡・土坑・陥し穴はいずれも縄文時代の遺構と考えられる。竪穴住居跡は9棟検出され、北東方向に伸びる丘陵尾根上に立地する。土坑は22基が検出されたが、出土遺物が極めて少ないため詳細な時期は判然としないものの、多くは縄文時代に帰属すると推測される。土坑の中には、断面形状がフラスコ状を呈するものが3基認められる。平坦面から斜面に差し掛かる地形変換点周辺では、陥し穴が4基確認された。調査区の形状に沿うように溝状遺構1条が検出されたが、近世以降の林道跡の可能性が高い。以下、遺構種別ごとに詳細を記す。

※平成26年度調査時には、電子平板と「遺構くん」ソフトにより実測・記録管理を行っているが、この原データが本書編集時には喪失しており、部分的に作成されていた二次編集図が残るのみであった。これにより、一部遺構の断面図や床面施設名(住居内柱穴など)が不明となっている。八方手を尽くしたが、復元は困難なため、遺憾ではあるが二次編集図作成時のものをそのまま記載することとした。不備があるものについては、〈備考〉にその旨を記した。

#### (1) 竪穴住居跡

##### S I 01 竪穴住居跡(第8図、写真図版1)

〈位置〉調査区中央部北端付近で調査区東壁直下に位置する。

〈規模形状〉西辺のみ完全に確認でき、そこにはほぼ直行する南・北壁の一部も確認した。大部分が調査区外となるため不確実ではあるが、平面は方形を呈すると思われる。西辺の規模は2.5mとなる。

〈残存深度〉確認面から床面まで0.5m残存。

〈重複遺構〉他の遺構との重複は認められない。

〈覆土〉埋土としては基盤層となる明黄褐色(10YR6/8)土が混じった黄灰色(2.5Y4/1)土のみ認めた。

〈床面状況〉検出した床面部分はほぼ平面だが、大部分が調査区外にあり全体は詳らかでない。

〈柱穴〉確認できなかった。

〈壁溝〉確認できなかった。

〈遺物〉土器片・石器剥片が出土している。

〈考察〉遺物の出土も少なく、調査区外に掛かることから、時期等詳細は不明。

〈備考〉断面図を欠く。

##### S I 02 竪穴住居跡(第8図、写真図版1／遺物：第34図、写真図版23)

〈位置〉調査区中央部中央付近西側で調査区西壁直下に位置する。

〈規模形状〉平面は楕円形を呈する。ただし、西側の一部は調査区外となる。規模については、長径を4.4mと確認したが、短径については下記の通り壁面の立ち上りが認められないため、遺構の残存状況から3.5mと推測した。

〈残存深度〉確認面でほぼ床面と思われるため、最大で10cm程度しか残存しておらず、東辺付近で

は壁面の立ち上りは認められない。

＜重複遺構＞SK15・SD01に切られる。

＜覆土＞埋土としては基盤層となる明黄褐色(10YR6/8)土が混じった灰色(5Y4/1)土のみ認められた。ただし、中央部分に明黄褐色土はほとんど混入しない。

＜床面状況＞ほぼ平面で、東に向かって緩やかに傾く。床面全体が硬化しているようであるが、貼床等は認められない。

＜柱穴＞13基を確認。最大の19(70×58 cm)を除くと直径24～50cm、深さ9～19cm程度。柱穴間で重複が認められるものがあり、10・27、11～15、17・18、20・21の4グループに集約される。ただし、16・19は重複がなく単独で存在している。10・20・27には柱当りの痕跡と思われる直径15cm前後のごく浅い窪みを認めた。

＜壁溝＞北辺および南辺において確認。それぞれ幅約10～15cmで、深さは数cm程度残存するに過ぎなかった。壁溝上および周辺に直径10～15cm程度の小規模なピットが散在する。小規模なピットは壁溝が確認できなかった東辺にも存在するため、本来はこの部分にも壁溝が存在した可能性がある。

＜炉＞床面中央および西北端の2箇所焼土を確認した。中央のもの(炉1)は平面が楕円形で、長径0.9×短径0.5m程度の規模で暗赤褐色を呈している。西北端のもの(炉2)も平面は長径0.6m程度の楕円形と見られるが、調査区西壁直下で検出し一部は調査区外にあるため、詳らかでない。中央部の焼土同様、暗赤褐色を呈している。いずれも地床炉と判断される。

＜遺物＞土器片・石器剥片が出土している。全て柱穴出土である。

＜考察＞出土遺物が少量のため詳細な時期は不明。

＜備考＞断面図、柱穴名不明。

### SI03 竪穴住居跡(第8図、写真図版1)

＜位置＞調査区中央部中央付近西側で調査区東壁直下に位置する。

＜規模形状＞大部分が調査区外となるため不確かさは残るが、方形を呈すると思われる。北西隅のみ確認でき、検出した規模は1.6×2.8mとなる。

＜残存深度＞確認面から床面まで0.4m残存。

＜重複遺構＞SK14に切られる。SK14に切られるSK13については、埋土が同質のため重複関係が判然としない。

＜覆土＞基盤層となる明黄褐色(10YR6/8)土が混じった灰色(5Y4/1)土のみ認められた。

＜床面状況＞検出した部分はほぼ平面で、東に向かって傾く。ただし、大部分が調査区外にあり全体は詳らかでない。

＜柱穴＞明確なものは認められない。ただし、SK13は当該住居の柱穴である可能性はある。

＜壁溝＞確認できなかった。

＜遺物＞遺物は出土しなかった。

＜考察＞時期は不明。大部分が調査区外へ延びることから全容は判然としない。重複遺構としたSK13については、埋土が同質なことから床面施設の可能性も考えられるか。

＜備考＞断面図を欠く。

### SI04 竪穴住居跡(第9図、写真図版1／遺物：第34図、写真図版23)

＜位置＞調査区南部に位置する。

＜規模形状＞削平が顕著なため正確な規模・形状は判然としないが、長軸約4.9m×短軸約3.5m、やや不整形な隅丸長方形を呈する。

＜残存深度＞削平を受けているため床面まで約0.5mである。

＜重複遺構＞S K 20・S K T 03・S D 01に切られる。1回の建て替えが認められる。

＜覆土＞上層は灰黄褐色土、下層は淡茶褐色土である。

＜床面状況＞西側は建て替え前・後でも明黄褐色土の基盤層を床面としている。東側は古段階では緩やかに東側へ下り傾斜となる基盤層を床面としている。新段階では基盤層に暗茶褐色土を貼り、西側床面とほぼ同じ高さとなるよう施されているが、硬く締められてはいない。

＜柱穴＞床面・壁溝内合わせて45個を確認した。そのうち主柱穴になると推定されるのが10個と思われるが、配列状況・帰属段階は判然としない。

＜壁溝＞西側半周及び東側で確認でき、多数の柱穴が検出された。北西隅では切り合い関係がみられ、建て替えの際に規模をやや縮小させたものと考えられる。

＜炉＞古段階では床面中央やや東側で地床炉を検出した。また、S I 03の壁面に赤変部分があるため、住居長軸方向に炉が設置されていたものと思われる。

＜考察＞遺物がないため時期については不明である。壁溝の重複から1回の建て替えを推測し、縮小の可能性を示唆している。

#### S I 05 竪穴住居跡(第9図、写真図版1)

＜位置＞調査区南部に位置する。

＜規模形状＞長軸約2.8m×短軸約2.4m、やや不整形な隅丸長方形を呈する。

＜残存深度＞削平を受けているため床面まで約0.3mである。

＜重複遺構＞S D 01に切られる。

＜覆土＞暗灰黄色土を主体とする。

＜床面状況＞床面は凹凸があるが、貼床の痕跡は確認できない。

＜炉＞床面中央北西側に被熱による赤変部分があるため、地床炉の痕跡と判断できる。

＜考察＞遺物がないため時期の特定はできない。

#### S I 06 竪穴住居跡(第10図、写真図版1)

＜位置＞調査区南部中央に位置し、東側は一部調査区外へと延びる。

＜規模形状＞残存状況から楕円形と推定され、長軸は3.8m以上、短軸は2.1mを測る。

＜残存深度＞床面まで深さ約0.4mである。

＜重複遺構＞S I 07・08を切り、S K T 04に切られる。

＜覆土＞上位が混入物の少ない黒色土を主体とし、下位が基盤層由来のスコリアを含む黄褐色土を主体とする。前者は窪地への自然流入、後者は埋め戻しによる堆積と考える。

＜床面状況＞床面はほぼ平坦で、壁は開口部に向かって緩やかに外傾する。

＜床面施設＞中央と推定される部分に、近接する2つの焼土を検出しており、地床炉と考える。北側では壁際に沿って5基の柱穴がほぼ等間隔で巡る。これらは直径10cm程度と小規模であり、底部に向かって先細りとなる。

＜考察＞出土遺物がないため時期等詳細は不明だが、後述のS I 07を切ることから、縄文早期末葉より下るものと考えられる。

**S I 07 竪穴住居跡(第10図、写真図版1・2 / 遺物：第29・34図、写真図版18・23)**

<位置>調査区南部中央に位置し、東側は一部調査区外へと延びる。

<規模形状>長方形で、長軸は推定3.6m、短軸2.8mを測る。

<残存深度>約0.5mである。

<重複遺構>S I 06・S K T 04に切られ、S I 08を切る。

<覆土>上位が混入物の少ない黒色土を主体とし、中～下位は基盤層由来土を含む黒褐色土を主体とする。特に西壁寄りの床面直上の堆積土には炭化物を多く含んでいる。前者は窪地への自然流入、後者は埋め戻しによる堆積と考える。

<床面状況>床面はほぼ平坦で、中央部には硬化が認められる。壁は長短軸とも開口部に向かって緩やかに外傾するが、北西隅部はオーバーハングし、袋状をなしている。この部分については重複する別の遺構の可能性を念頭において精査を進めたが、竪穴の床面と袋状部分の底面は段差無く連続しており、土層断面に切り合いも認められなかったことから、本竪穴に付属する施設と判断した。

<床面施設>床面中央部では楕円形平面の土坑を検出しており、長軸は0.9m、短軸は0.6m、深さ約0.1mを測る。この土坑の西側にはやや間隔を空けて2つの焼土があり、地床炉と考える。柱穴は壁際沿いに15基を検出した。柱穴の分布は北・西辺壁際に偏るが、他遺構に切られた東・南辺沿いにも本来あったものと推測する。柱穴はいずれも直径8～18cmと小規模であり、底部に向かって先細りとなっている。

<遺物>西壁寄りの床面直上で土器大型破片がまとまって出土しており、竪穴廃絶の際に意図的に残置された可能性が高い。一方、堆積土上～中位からも土器小破片、剥片石器・礫石器が多く出土しているが、これらは埋め戻しに伴う混入と捉えられる。

<考察>出土遺物には縄文後期前葉の土器を含むが、床面直上出土の土器を鑑みて縄文早期末葉に帰属と判断される。

**S I 08 竪穴住居跡(第10図、写真図版1)**

<位置>調査区南部中央付近の東壁直下に位置する。大部分が調査区外となっており、北西側の一部のみを確認した。

<形状規模>詳細は不明であるが、円形を基調とし、確認部の長さは最大6.2mを測る。

<残存深度>床面までの深さは約0.5mである。

<重複遺構>S I 06・07・S K T 04に切られる。

<覆土>堆積土は上位が混入物の少ない暗褐色土を主体とし、下位は基盤層由来土を含むオリーブ褐色土を主体とする。前者は窪地への自然流入、後者は埋め戻しによる堆積と考える。

<床面状況>床面はほぼ平坦である。壁は開口部に向かって緩やかに外傾する。

<床面施設>床面中央部と推定される位置で楕円形平面の土坑を検出しており、長さ最大1.2m、深さ約0.2mを測る。柱穴は壁際沿いに3基、中央部土坑の北側に隣接する1基の計4基を検出した。いずれも直径17～40cm、深さ6～15cmで底面は平坦であり、重複するS I 06・07の柱穴とは規模・形態ともに異なる。

<考察>出土遺物がないため時期の特定はできないが、重複関係から最も古い遺構となる。S I 07の推定時期が縄文早期末葉なので、これより古い時期が推測される。

### S I 09 竪穴住居跡(第11図、写真図版2)

〈位置〉調査区南部に位置する。

〈規模形状〉大部分が調査区外に位置しており、さらに削平の影響が著しいため正確な規模・形状は不明である。

〈残存深度〉上部は削平を受けたことにより壁溝を検出したことにより床面を確認したに過ぎない。土層断面から0.3mの深さは遺存していたものと推定される。

〈重複遺構〉S K 22に切られる。壁溝及び土層断面の観察から建て替えがあったものと判断できる。住居は中段階において南側に拡張しているのを確認できる。新段階は中段階よりも北側に壁溝を移動している。

〈覆土〉古段階は暗灰褐色土、中段階は黒灰茶褐色土であり、新段階は黒茶褐色土上位を主体としている。

〈床面状況〉ほぼ平坦である。

〈柱穴〉6基を検出したが、配列は明確ではない。

〈壁溝〉南側の古・中段階の壁溝2条が部分的に見られる。

〈考察〉出土遺物の記載がないため、出土なしと判断した。時期は不明。土層断面と壁溝の位置から2回の建て替えを想定している。ただし、検出範囲も狭いことから全容把握は困難で、古・中段階としたものは同一時期の可能性も視野に入れるべきか。

## (2) 土 坑

### S K 01 土坑(第11図)

〈位置〉調査区北部に位置する。

〈平面形・規模〉不整形な隅丸長方形を呈する。長軸約1.5m×短軸約1.2m、深さ約0.4mである。

〈形状〉底部は平坦である。

〈覆土〉基盤層を少量含むものの暗灰茶褐色土が主体である。下部には炭・焼土が多量に認められる。

〈考察〉何らかを焼成した遺構であることは明確であるが、覆土の状況から新しい時期であると認識される。

〈備考〉断面図を欠く。

### S K 02 土坑(第11図)

〈位置〉調査区北部に位置する。

〈平面形・規模〉隅丸方形を呈する。一辺約1.1m、深さ約0.6mである。

〈形状〉断面は底部から外傾して立ち上がる。

〈覆土〉締まりの弱い暗茶褐色土であり、淡灰茶褐色土が下部に部分的に含まれる。

〈考察〉時期・性格とも不明。

〈備考〉断面図を欠く。

### S K 03 土坑(第11図)

〈位置〉調査区北部に位置する。

〈平面形・規模〉隅丸方形である。一辺約0.5m、深さ約0.3mである。

〈形状〉断面は浅鉢状を呈する。

<覆土>締まりの弱い暗茶褐色土であり、基盤層の明黄褐色土を少量含む。  
 <考察>時期・性格とも不明。  
 <備考>断面図を欠く。

#### S K 04土坑(第11図)

<位置>調査区北部に位置する。  
 <平面形・規模>ほぼ円形である。直径約0.8m、深さ約0.5mである。  
 <形状>断面は箱形を呈する。  
 <覆土>締まりの弱い暗茶褐色土であり、暗黒褐色土を部分的に含む。  
 <考察>時期・性格とも不明。  
 <備考>断面図を欠く。

#### S K 05土坑(第12図)

<位置>調査区北部に位置する。  
 <平面形・規模>やや長楕円形状を呈する。残存した長軸約1.7m×短軸約1.6m、深さ約0.8mである。  
 <形状>断面は底部から外傾して立ち上がる。  
 <覆土>淡黒褐色土を主体としており、灰褐色土が多く含まれる。  
 <考察>覆土の状況や土層断面の観察から倒木痕と捉えられる。  
 <備考>遺構ではないとの判断か。断面図を欠く。

#### S K 06土坑(第12図)

<位置>調査区北部に位置する。  
 <平面形・規模>隅丸長方形である。長軸約0.4m×短軸約0.3m、深さ約0.2mである。  
 <形状>断面は浅鉢状を呈する。  
 <覆土>黒灰色土である。  
 <考察>時期・性格とも不明。  
 <備考>断面図を欠く。

#### S K 07土坑(第12図、写真図版2)

<位置>調査区北部南側の西壁直下に位置し、西側は一部調査区外へと延びている。  
 <平面形・規模>円形で、最大径1.2m、深さ約0.7mを測る。  
 <形状>底面は緩やかに窪み、壁はわずかにオーバーハングする。  
 <覆土>全体的に旧表土由来の黒褐色土を母材とし、底面直上層は基盤層由来のスコリアを多く含むものの、それより上位では混入物の少ない黒褐色土やブロック状の基盤層由来土が主体となる。このような堆積状況から、本土坑は廃絶時に若干の埋め戻しがなされた後放置され、開口部の崩落を伴いながら自然に埋没したと推測する。  
 <考察>形状から貯蔵施設の可能性がある。時期は不明。

#### S K 08土坑(第12図、写真図版2)

<位置>調査区北部南側に位置する。

＜平面形・規模＞円形で、長軸1.5m×短軸1.4m、深さ約0.4mを測る。

＜形状＞底面は緩やかに窪み、壁はわずかにオーバーハングする。

＜覆土＞全体的に旧表土由来の黒褐色土を母材とし、壁際付近にはブロック状の基盤層由来土が認められる。このような堆積状況から、本土坑は廃絶後放置され、開口部の崩落を伴いながら自然に埋没したと推測する。

＜考察＞上半部がないものの、底面形状から貯蔵施設の可能性が考えられる。時期は不明。

#### S K 09土坑(第12図、写真図版2)

＜位置＞調査区北部南側に位置する。東側は林道開削の際に半分ほど削平されている。

＜平面形・規模＞残存部の平面は円形で、長軸1.5m×短軸1.4m、深さ約0.4mを測る。

＜形状＞底面はほぼ平坦で、壁はわずかにオーバーハングする。

＜覆土＞遺構自体の残存率が低いため詳細は不明であるが、全体的に旧表土由来の灰茶褐色土を母材として基盤層由来土の混入は少ない。本土坑は廃絶後自然に埋没したと推測する。

＜考察＞時期・性格とも不明。

＜備考＞断面図を欠く。

#### S K 10土坑(第12図)

＜位置＞調査区中央部北端付近東側に位置し、竪穴住居1に近接する。

＜平面形・規模＞不整形な楕円形。長径0.9m×短径0.7m、深度0.2m。

＜形状＞坑底部はほぼ平坦で、壁はやや内湾し外傾する。断面は逆台形に近い形状を呈する。

＜覆土＞S I 01の埋土に類似した黄灰色(2.5Y4/1)土のみを認めた。

＜考察＞近接し、埋土が類似することからS I 01に関連する可能性があるが、確証はなく、性格・時期とも詳らかでない。

＜備考＞断面図を欠く。

#### S K 11土坑(第12図)

＜位置＞調査区中央部中央付近西側で調査区東壁直下に位置する。S I 03に近接する。

＜平面形・規模＞一部調査区外に存在するが、不整な円形を呈するものと見られる。直径約0.7m、深度0.2m。

＜形状＞坑底部は平坦で、壁はやや外傾する。断面は矩形に近い形状を呈する。

＜覆土＞黒色土が混じった淡い褐色土のみ認める。

＜考察＞時期・性格とも不明。

＜備考＞断面図を欠く。

#### S K 12土坑(第13図／遺物：第32図、写真図版21)

＜位置＞調査区中央部中央付近西側で調査区東壁直下に位置する。S I 03に近接する。

＜平面形・規模＞一部調査区外に存在するが、不整な楕円形を呈するものと見られる。長径約0.7m、深度0.2m。

＜形状＞坑底部は平坦で、壁は外傾する。断面は逆台形を呈する。

＜覆土＞黒色土が混じった淡い褐色土のみ認める。

＜遺物＞覆土中出土の土器1点を掲載した。

＜考察＞時期・性格とも不明。

＜備考＞断面図を欠く。

#### S K 13土坑(第13図)

＜位置＞調査区中央部中央付近西側で調査区東壁直下に位置する。

＜平面形・規模＞一部調査区外に存在し、S K 14との重複のため明確ではないが、不整形な円形と推定した。検出長約0.3m。検出形状から本来は直径0.6m程度の規模が推定できる。残存深度0.1m。

＜形状＞坑底部から検出面にかけて全体に湾曲した断面を呈する。

＜重複遺構＞S K 14に切られる。S I 03とも重複するが、前後関係は詳らかにできなかった。

＜覆土＞S I 03とほぼ同質の灰色土のみ認める。

＜考察＞S I 03の床面に存在することから、S I 03に関連する遺構の可能性はあるが定かではない。

＜備考＞断面図を欠く。

#### S K 14土坑(第13図)

＜位置＞調査区中央部中央付近西側で調査区東壁直下に位置する。

＜平面形・規模＞一部調査区外に存在するが検出部分の形状より円形を呈すると思われる。直径約0.5m、残存深度0.2m。

＜形状＞坑底部はほぼ平面で、壁は直立する。断面は矩形となる。

＜重複遺構＞S I 03およびS K 13を切る。

＜覆土＞黒灰色土のみ認める。

＜考察＞時期・性格とも不明。

＜備考＞断面図を欠く。

#### S K 15土坑(第13図)

＜位置＞調査区中央部中央付近西側でS I 02に隣接する。

＜平面形・規模＞不整な円形で、0.8×0.9mを測る。

＜形状＞坑底部は浅く窪み、壁は全体に外傾する。断面は逆台形を呈する。

＜重複遺構＞S I 02を切る。

＜覆土＞灰色(5Y4/1)土のみ認め、若干基盤層である黄褐色土を含む。

＜考察＞時期・性格とも不明。

＜備考＞断面図を欠く。記載がないため深さは不明。

#### S K 16土坑(第13図)

＜位置＞調査区中央部に位置する。

＜平面形・規模＞不整形な隅丸長方形形状である。長軸約1.1m×短軸約0.9m、深さ約0.3mである。

＜形状＞断面は浅い皿状を呈する。

＜覆土＞暗黒茶褐色土である。

＜考察＞時期・性格とも不明。

＜備考＞断面図を欠く。

**S K 17土坑(第13図)**

＜位置＞調査区中央部に位置する。

＜平面形・規模＞不整形であるが隅丸長方形を指向していたものと捉えられる。長軸約1.5m×短軸約1.2m、深さ約0.4mである。

＜形状＞断面は皿状を呈する。

＜覆土＞暗茶褐色土である。

＜考察＞時期・性格とも不明。

＜備考＞断面図を欠く。

**S K 18土坑(第13図)**

＜位置＞調査区中央部に位置する。

＜平面形・規模＞やや不整形な隅丸長方形である。長軸約0.7m×短軸約0.6m、深さ約0.3mである。

＜形状＞断面は箱形である。

＜考察＞時期・性格とも不明。

＜備考＞断面図を欠く。堆積土の状況についても不明。

**S K 19土坑(第13図、写真図版2)**

＜位置＞調査区中央部南側に位置する。

＜平面形・規模＞楕円形で、長軸1.6m×短軸1.4m、深さ約0.4mを測る。

＜形状＞底面は緩やかに窪み、壁は開口部に向かって緩やかに外傾する。底面中央には短軸方向に掘り込まれた溝を伴い、長さ1.0m、幅0.3m、深さ約0.3mを測る。

＜覆土＞基盤層由来土を主体として旧表土がわずかに混入した暗茶褐色土の単一層である。このような堆積状況から、本土坑は掘削後期間を置かずに掘り上げた土によって再び埋め戻されたと推測できる。

＜考察＞堆積状況から土坑墓である可能性が高いと考える。底面に設けられた溝の具体的な機能については詳らかではなく、今後類例の点検と考察が必要であろう。ちなみに県外では秋田県鹿角市物見坂Ⅲ遺跡の縄文時代早期土坑に類例が認められる(秋田県教育委員会 2003)。

＜備考＞断面図を欠く。

**S K 20土坑(第13図)**

＜位置＞調査区南部に位置する。

＜平面形・規模＞隅丸長形状を呈する。長軸約1.4m×短軸約1.1m、深さ約0.3mである。

＜形状＞断面は浅い皿状である。

＜重複遺構＞S I 04の北西隅部を切っている。

＜覆土＞暗黒灰茶褐色土である。

＜考察＞時期・性格とも不明。

＜備考＞断面図を欠く。

**S K 21土坑(第13図、写真図版3／遺物：第32図、写真図版21)**

＜位置＞調査区南部中央に位置する。

<平面形・規模>円形で、長軸0.5m×短軸0.4m、深さ約0.1mを測る。

<形状>壁は底面から連続して緩やかに外傾し、開口部に至る。

<覆土>基盤層由来土を主体とした暗褐色土の単一層であり、埋め戻しによるものと考えられる。

<遺物>尖底土器のほか、その周辺から磨石等の礫石器が多く出土している。土器は大部分が欠失しているが、出土状況から本来は大型の破片が横倒しの状態で埋納されていた可能性が考えられる。

<考察>かなり小径のピットで機能面については不明であるが、出土遺物から縄文早期末葉と判断される。

<備考>断面図を欠く。

### S K 22土坑(第13図)

<位置>調査区南部に位置する。

<平面形・規模>上部が大きく削平され、土層断面の観察で確認できたことから、詳細は判然としない。

<重複遺構>S I 09を切る。

<覆土>上層は灰茶褐色土・下層は暗い茶褐色系統の色調を中心としている。

<考察>時期・性格とも不明である。

### (3) 陥し穴

#### S K T 01陥し穴(第14図、写真図版3)

<位置・検出状況>調査区北部北半の調査区西壁直下に位置する。遺構西端部は調査区外となる。基盤層である明黄褐色(10YR6/6)土の上面で暗灰茶褐色土の溝状の集まりを確認した。

<平面形・規模>溝状を呈する。検出長2.6m、幅約0.8m、深さ約1.5mを測る。

<形状>坑底部はほぼ平坦で、壁は外傾し、上端から中位付近で傾斜がやや緩やかな角度に変化し広がる。短軸断面はラッパ状を呈する。長軸端部はオーバーハングする。

<覆土>最上部に暗灰茶褐色土、中位付近には黒茶褐色土、暗茶褐色土、暗褐色土の順で堆積する。底部には暗灰黒色土が堆積する。中位付近以下の各土層には基盤層の黄褐色土が混じるが、暗褐色土にはきわめて多量に混じる。

<考察>出土遺物がないため時期は不明。

#### S K T 02陥し穴(第14図、写真図版3)

<位置・検出状況>調査区中央部北側に位置する。S D 01埋土掘削後、基盤層である明黄褐色(10YR6/6)土の上面でオリーブ黒色(7.5Y2/2)土の溝状の集まりを確認した。

<平面形・規模>溝状である。長さ3.2m、幅0.7m、深さ0.8mを測る。

<形状>坑底部はほぼ平坦で、壁は外傾し、上端から中位付近で傾斜角が緩やかな角度に変化し広がる。短軸断面はラッパ状を呈する。長軸端部壁面はほぼ直立する。

<重複遺構>S D 01に切られる。

<覆土>最上部にオリーブ黒色(7.5Y2/2)土、中位付近には黄橙色(10YR7/8)土が混じったオリーブ黒色(7.5Y2/2)土が、底部には再びオリーブ黒色(7.5Y2/2)土が堆積する。

<考察>出土遺物がないため時期は不明。

### S K T 03陥し穴(第14図)

<位置・検出状況>調査区中央部南側に位置する。S I 04の埋土掘削時に基盤層(明黄褐色土:10YR6/6)上面で、S I 04埋土である淡茶褐色土から切り込む、溝状を呈する暗黒灰色土の集まりを確認した。S I 04の埋土掘削に併せて上部を掘削し、S I 04の底面以下に埋土が続くことを確認した。

<平面形・規模>溝状である。長さ4.0m、検出最大幅約0.6m、深さ約0.7mを測る。

<形状>坑底部はほぼ平坦で、壁は外傾し、上端から中位付近で傾斜が緩やかな角度に変化し広がる。短軸断面は漏斗状を呈する。長軸端部壁面の南側はほぼ直立するが、北側は外傾し広がる。

<重複遺構>S I 04を切る。

<覆土>最上部に暗黒灰色土、中位付近には暗黒茶褐色土、基盤層の黄褐色土が混じった暗灰黒褐色、灰黄褐色土の順で堆積し、最下部には黒灰色土が堆積する。

<考察>出土遺物がないため時期は不明。

### S K T 04陥し穴(第14図、写真図版3)

<位置・検出状況>調査区南半部に位置する。S I 07の埋土掘削中、オリーブ黒色(7.5Y3/1)土層上面から切り込む形の溝状に集まる暗灰黄色(2.5Y4/2)土を確認した。当該遺構の東半部分は調査区外へと延びている。S I 06の埋土掘削に併せて上部を掘削し、S I 06の底面以下に埋土が続くことを確認した。

<平面形・規模>溝状を呈する。検出長1.4m、最大幅0.9m(断面により確認)、深さ約1.3mを測る。

<形状>坑底部はほぼ平坦で、壁は外傾し、上端から中位付近で傾斜が緩やかな角度に変化し広がる。短軸断面は漏斗状を呈する。長軸端部はオーバーハングする。

<重複遺構>S I 06・07・08を切る。

<覆土>最上部に暗灰黄色土(2.5Y4/2)、中位付近より底部には黄褐色土(2.5Y5/3)が堆積する。

<考察>出土遺物がないため時期の特定は困難だが、S I 07を縄文早期末葉と想定していることから、重複関係よりこの時期より新しいと推測される。

## (4)溝 状 遺 構

### S D 01溝状遺構(第15図、写真図版3/遺物:第32・38・39・41図、写真図版21・25・26・27)

<位置>調査区全域に及ぶ。南部で途切れる箇所もあるが、同一遺構と捉えて差し支えない。

<規模>調査区内で検出された推定全長約101mである。最大幅は調査区北端にあり約5.6m、最小幅は調査区南部で幅約0.3mである。溝底面は南から北へ傾斜するが、北部南側で急激に立ち上がる箇所があり、その比高差は約1.5mである。それ以北では溝の幅平均約3.6m、西岸からの深さ平均約1.3m、以南では幅平均1.1m・西岸からの深さ平均0.2mで際立った差異が看取できる。

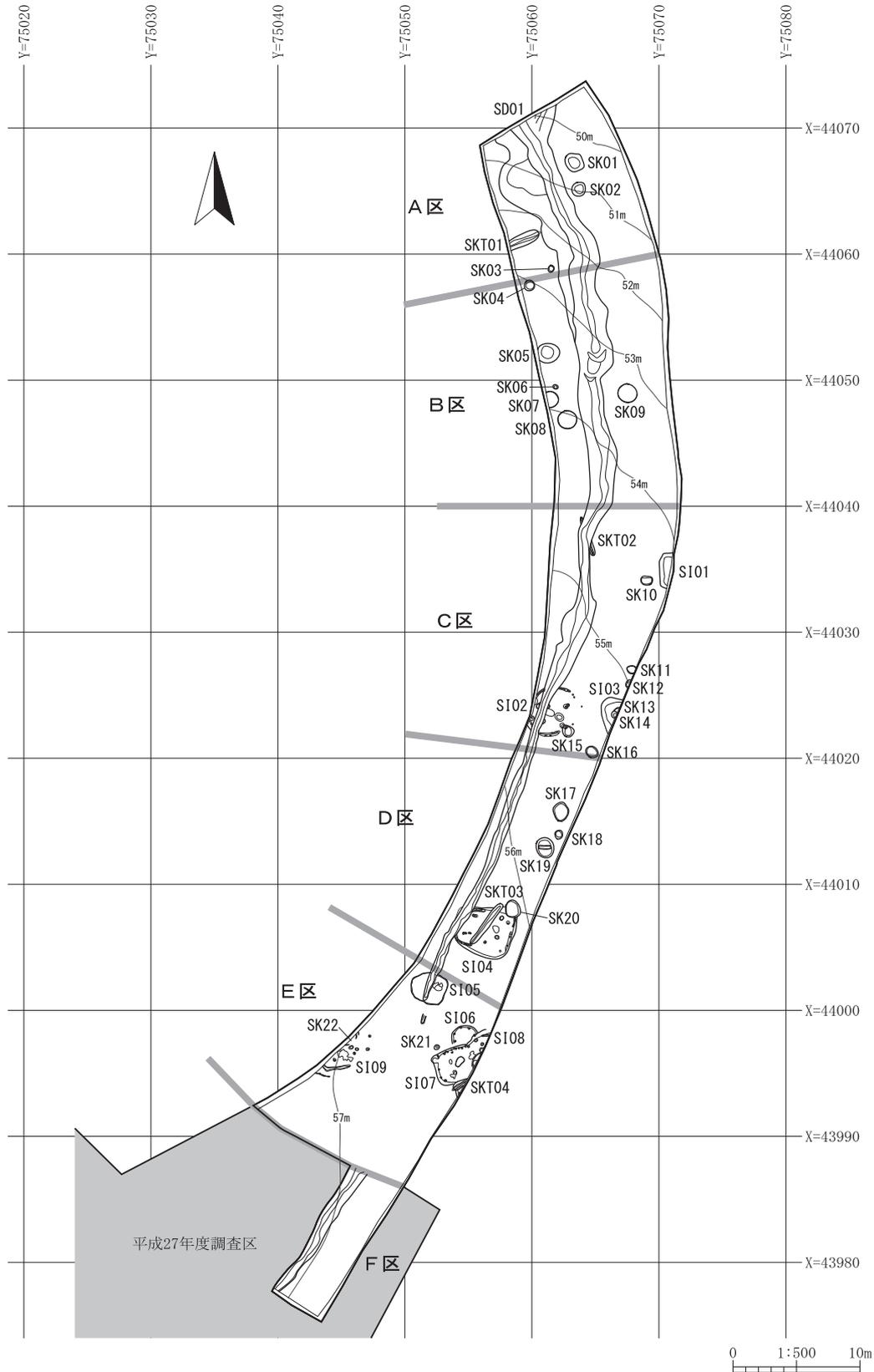
<形状>北部では平面形状が一定しておらず、特に北端部では西側に大きく張り出している部分がある。断面形は概ね底部の小さい逆台形状を呈する。一方、北部南側で急激に立ち上がる箇所以南では平面形状はほぼ定形化し、断面形も浅い皿状で推移する。

<重複遺構>S I 02・04・05、S K T 02をいずれも切っている。

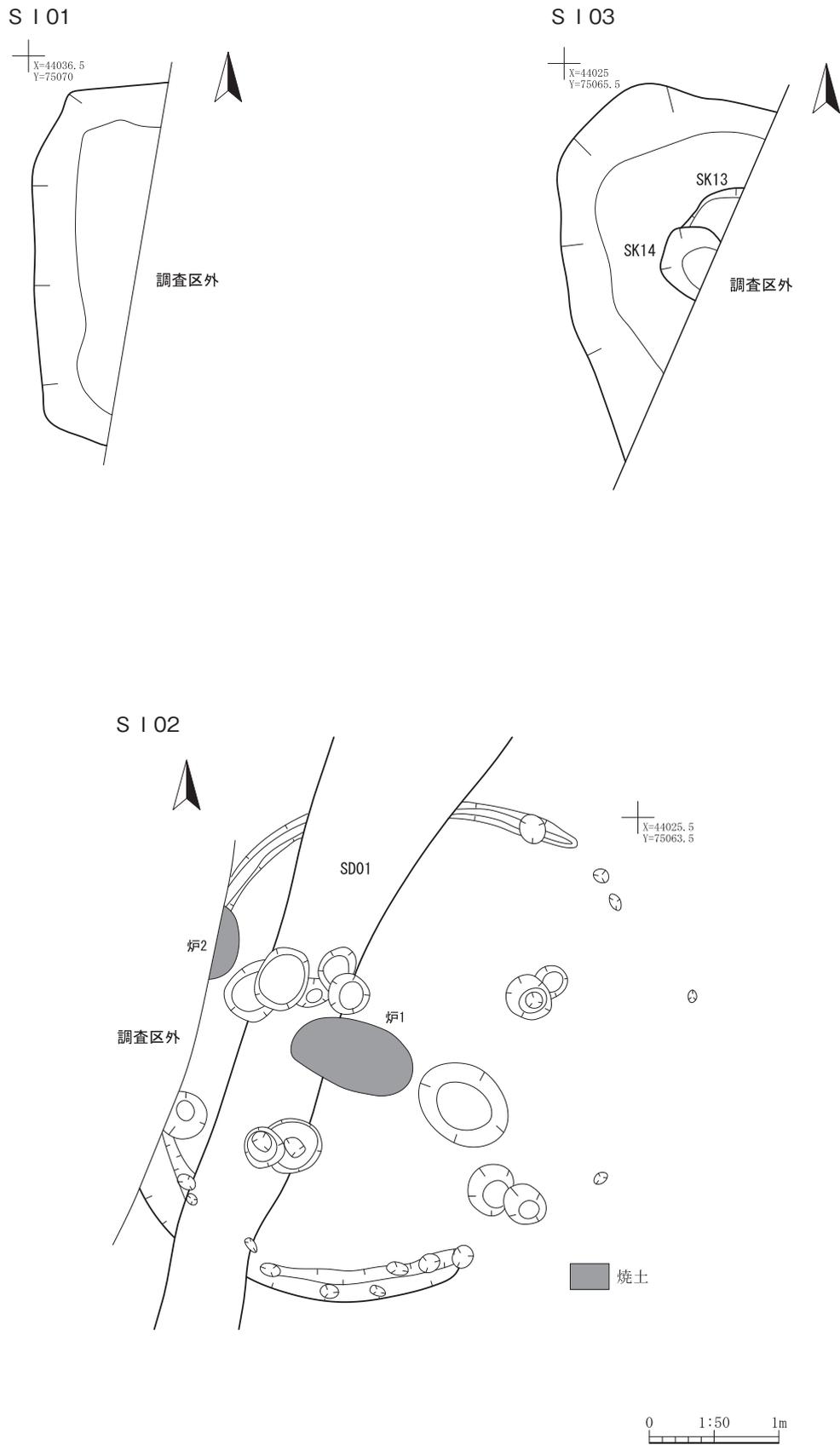
<覆土>全体的に暗茶褐色系統を基調としており、締まりは弱い。

<遺物>縄文時代の遺物が多く含まれるが、近世末～近代の陶磁器・銅銭(寛永通宝)などが出土していることから、遺構の帰属時期もこの段階に求められる。寛永通宝は北部南側で急激に立ち上がる箇所の最深部より出土している。

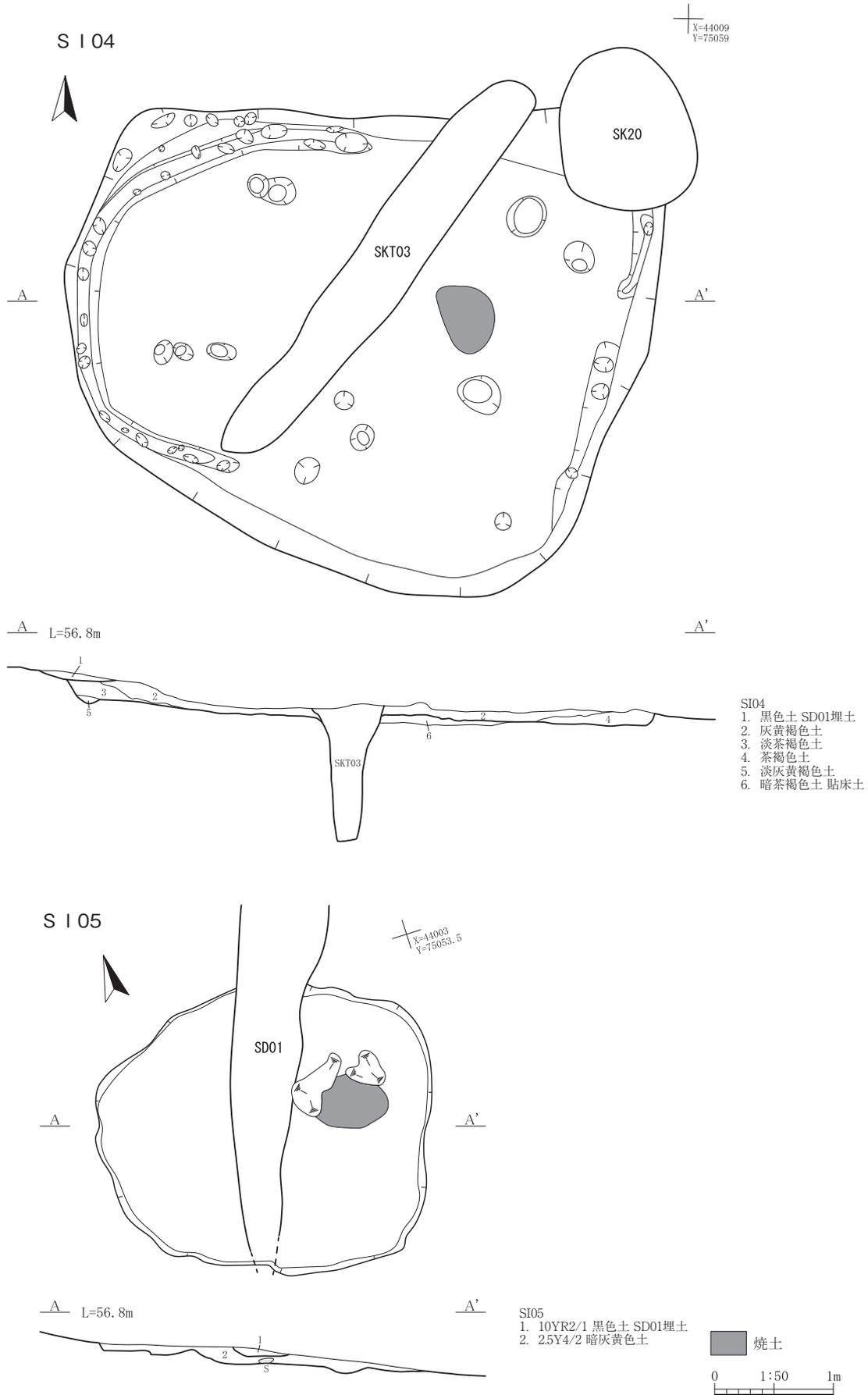
＜考察＞現林道の調査区と相似形であること、調査区南側で現在でも窪地として遺存していることから、近世末～近代の道路跡と指摘できる。



第7図 遺構配置図(平成26年度調査区)

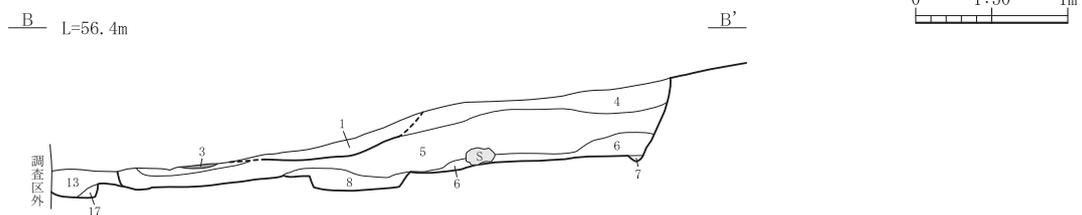
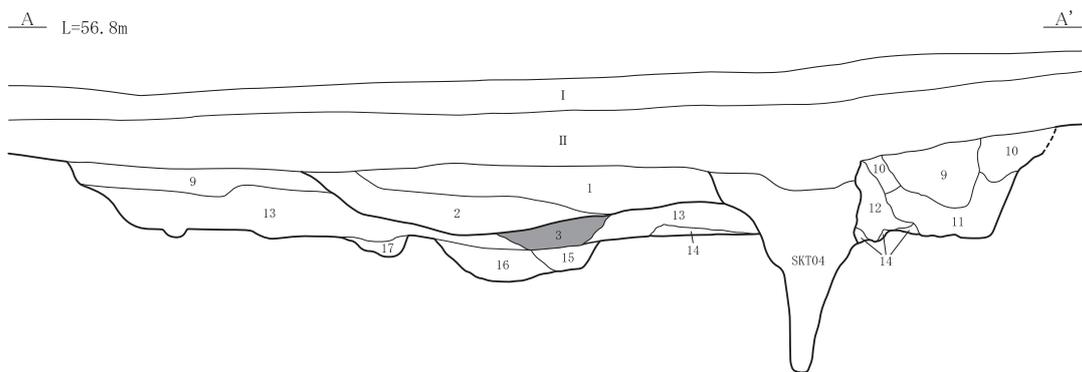
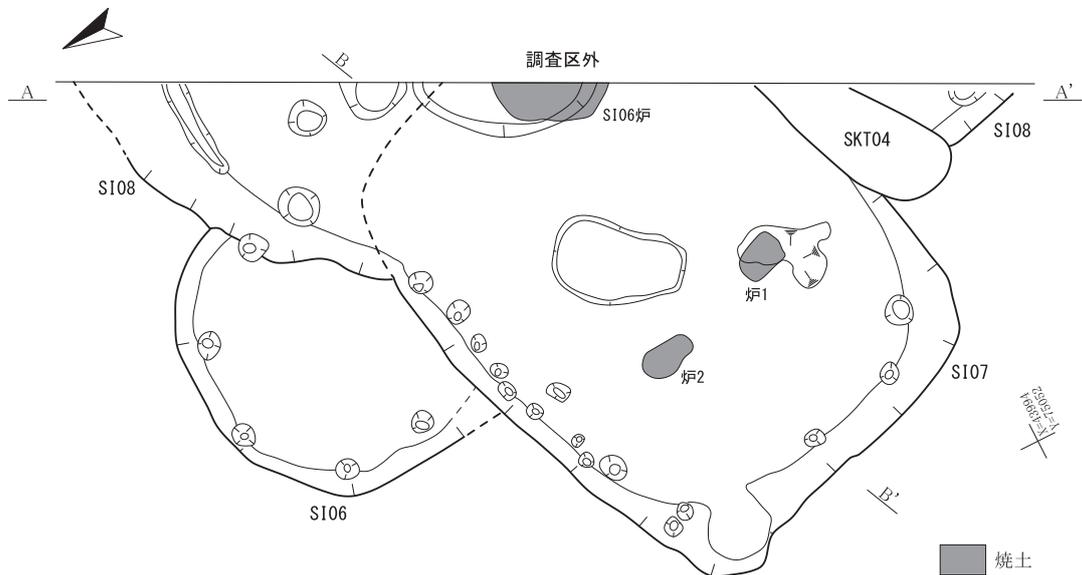


第8図 S I 01~03竪穴住居跡



第9図 S I 04・05竪穴住居跡

S I 06~08

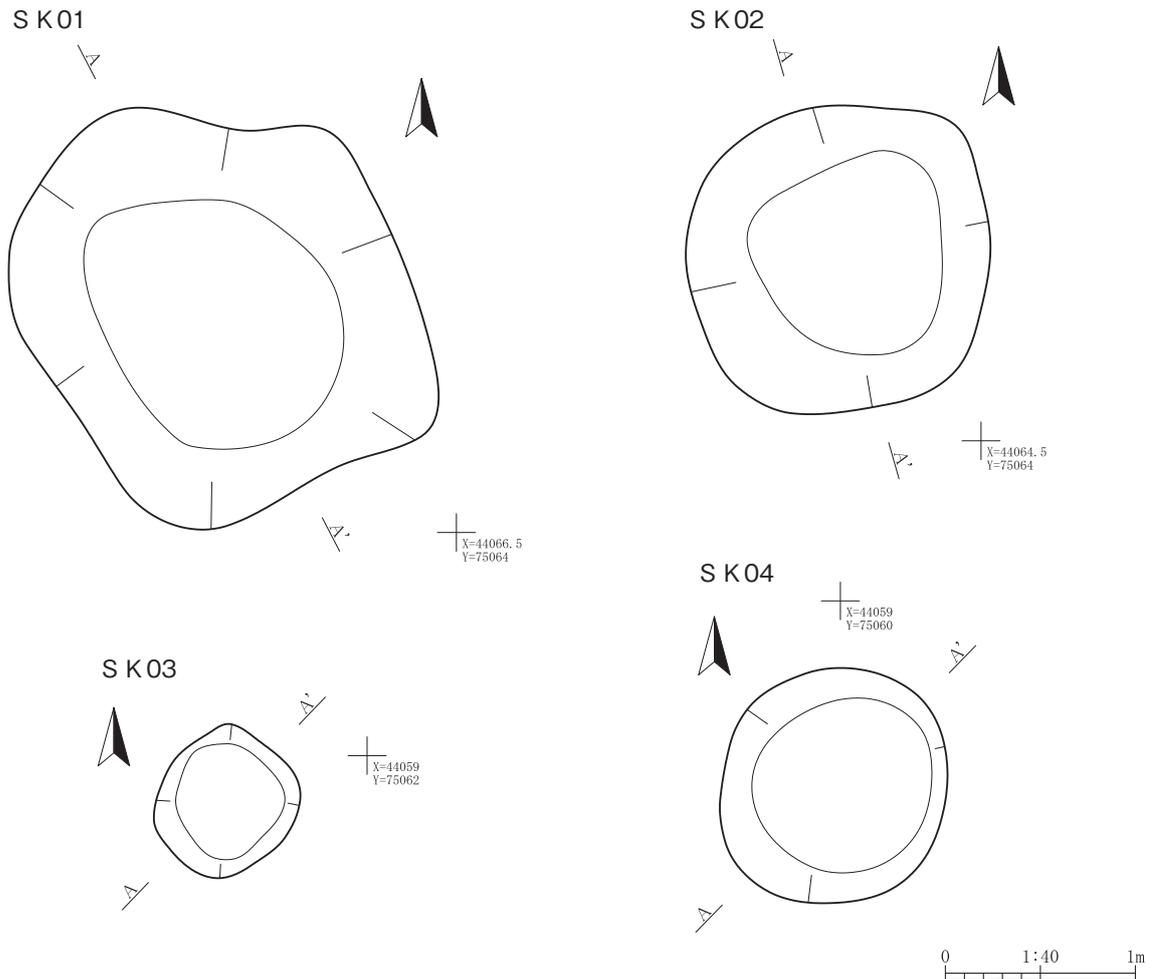
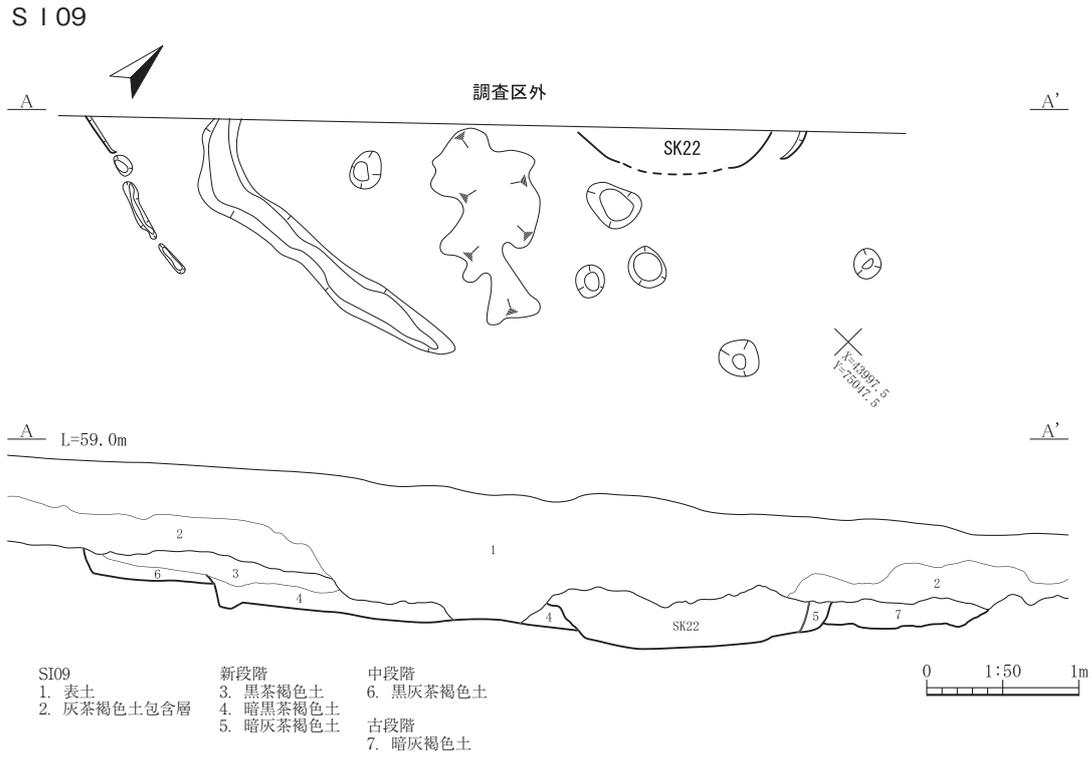


- S I 06
1. 7.5Y3/1 オリーブ黒色土
  2. 2.5Y4/1 褐色土 スコリア少量含む
  3. 5YR3/6 暗赤褐色焼土

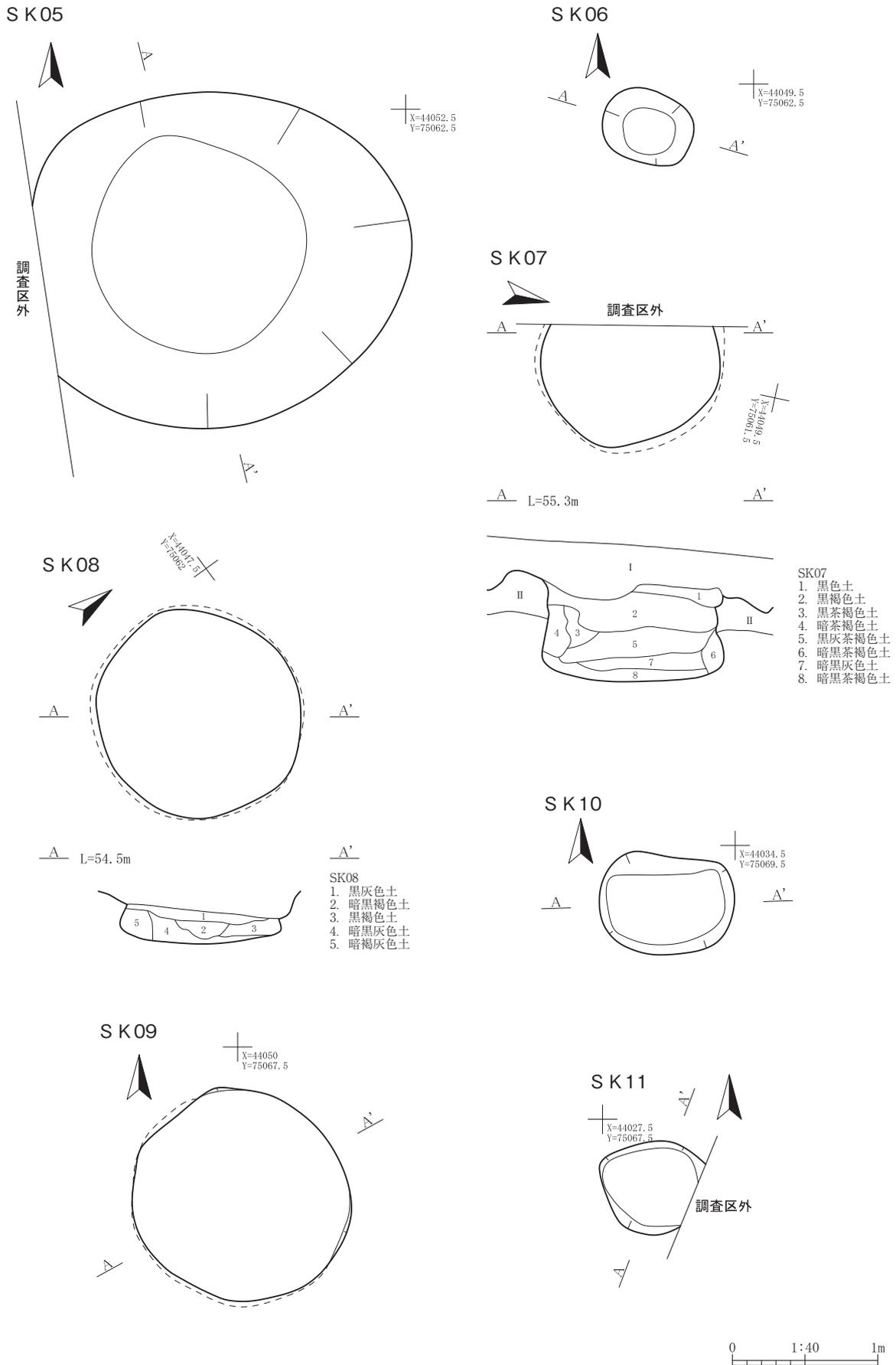
- S I 07
4. 10YR2/1 黒色土 径1~3mmの黄褐色土粒含む
  5. 10YR2/2 黒褐色土 径1~5mmの黄褐色土粒・炭化物含む
  6. 10YR2/1~2/2 黒~黒褐色土 径1~10mmの炭化物含む
  7. 10YR3/3 暗褐色土 径5~10mmの黄褐色土粒含む 壁溝埋土
  8. 10YR3/3 暗褐色土 床面土坑埋土

- S I 08
9. 10YR3/4 暗褐色土
  10. 10YR2/1 黒色土
  11. 2.5Y4/3 オリーブ褐色土
  12. 2.5Y3/1 暗褐色土
  13. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色土
  14. 10YR6/6 明黄褐色土
  15. 10YR5/6 黄褐色土
  16. 暗褐色土
  17. 10YR5/4 におい黄褐色土

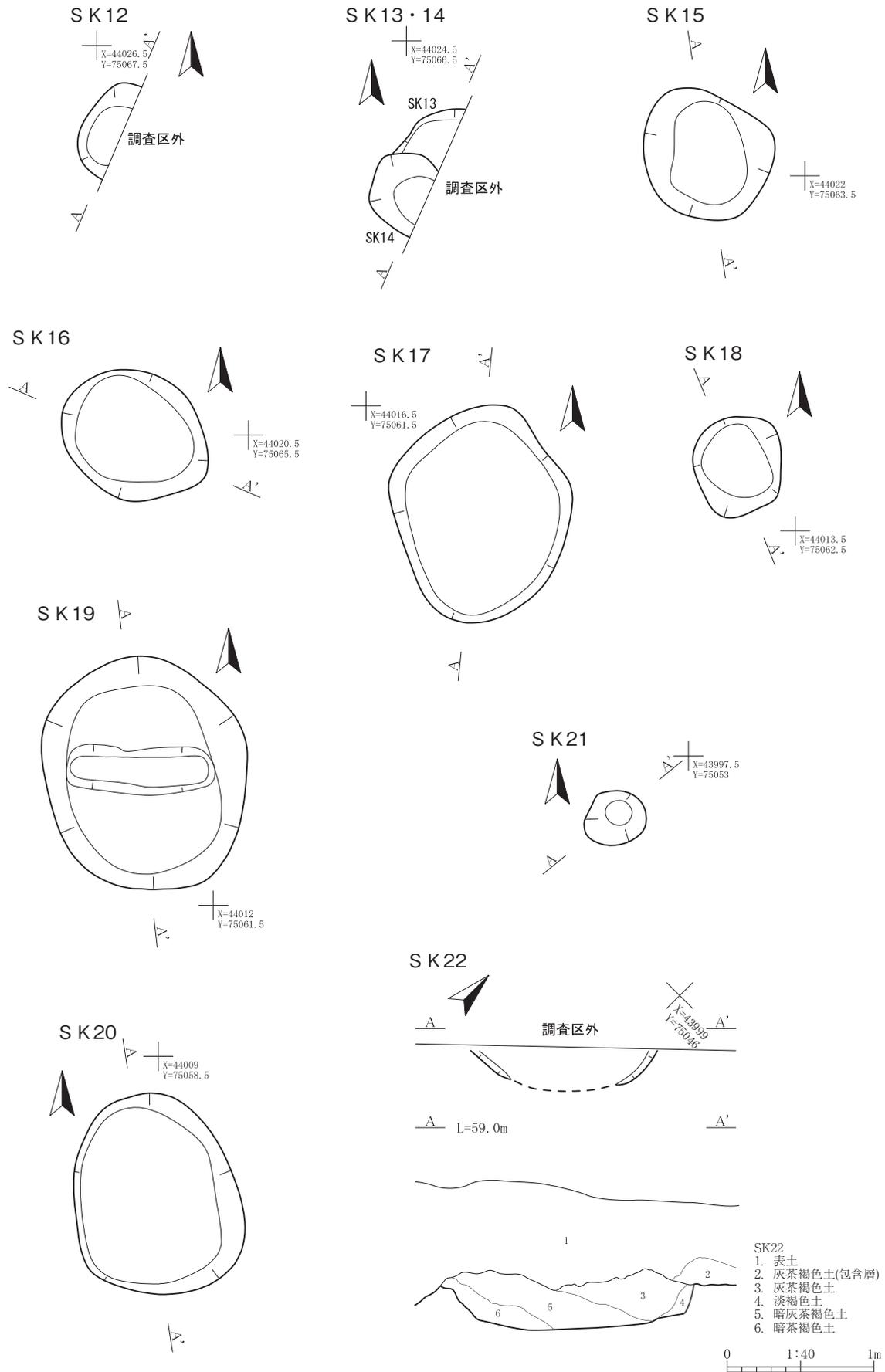
第10図 S I 06~08竪穴住居跡



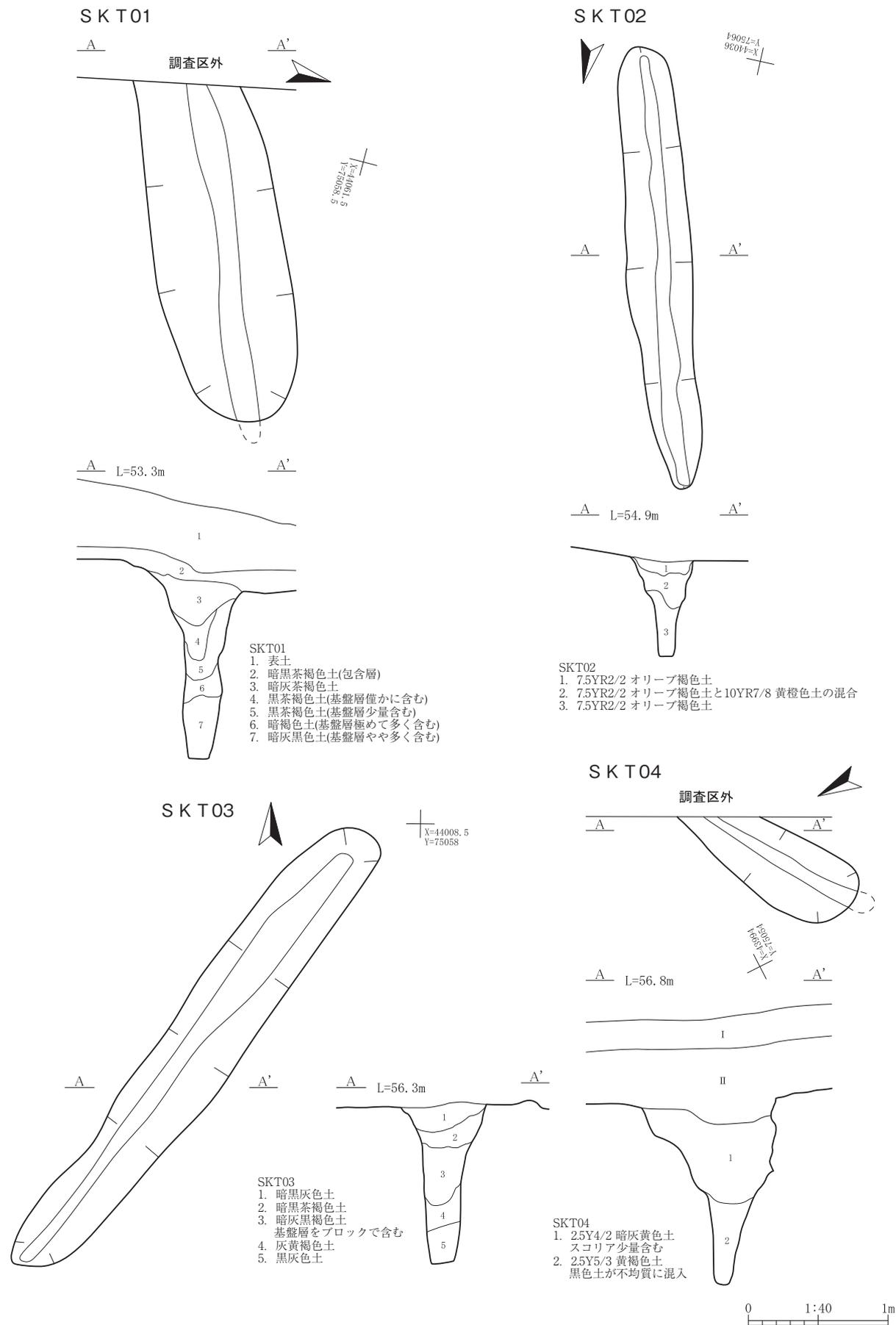
第11図 S I 09竪穴住居跡、SK01~04土坑



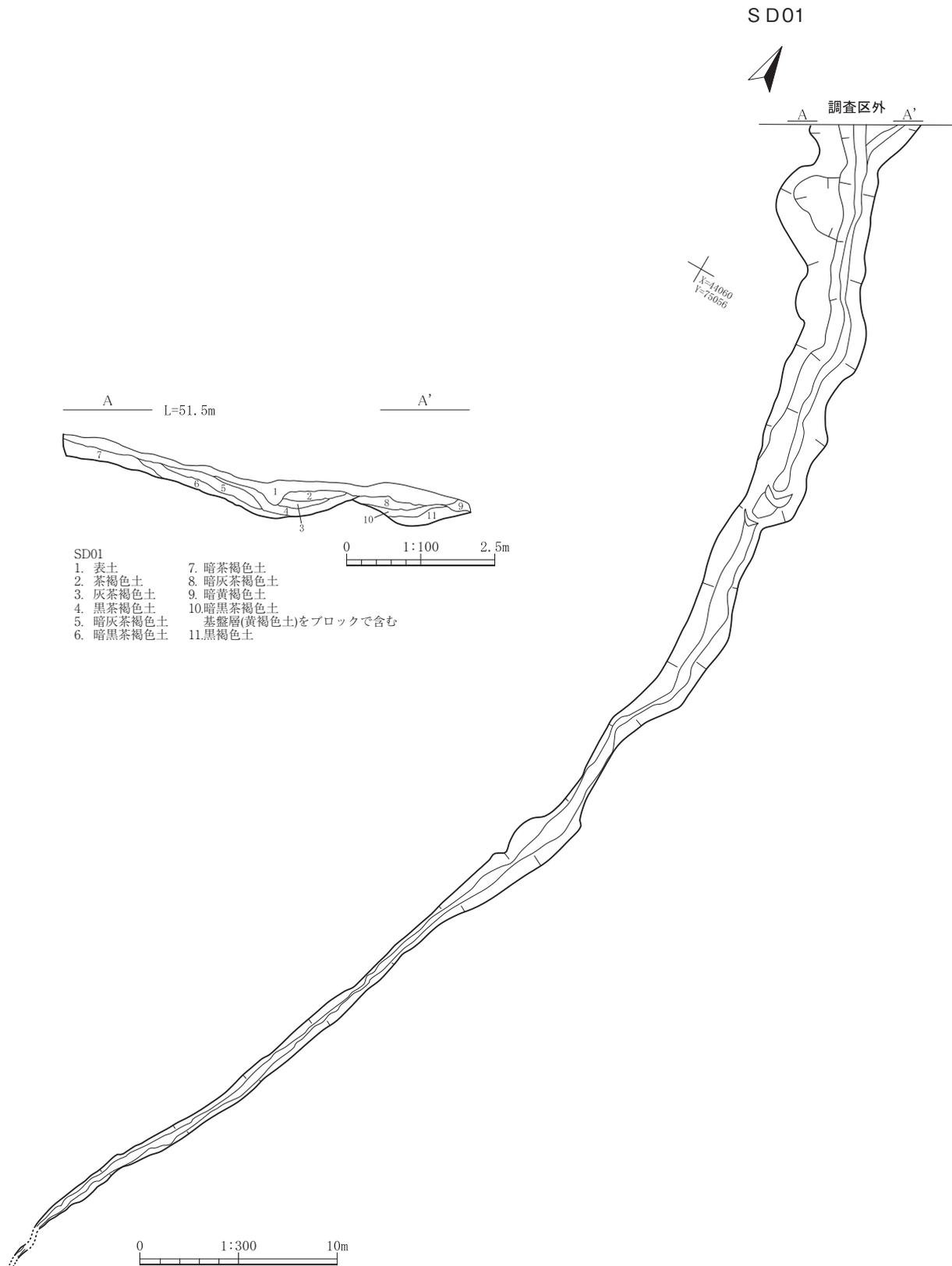
第12図 SK05~11土坑



第13図 SK12~22土坑



第14図 SKT01~04陥し穴



第15図 S D 01溝状遺構

## 4 平成27年度調査

平成27年度の調査では、縄文時代早期末葉の竪穴住居跡2棟、時期不明(いずれも縄文時代内)の土坑3基、陥し穴5基、焼土遺構4基を検出した。

竪穴住居跡2棟は、前年度調査区より続く緩やかな南東斜面地で見つかった。土坑は食糧貯蔵用と考えられるフラスコ状土坑が1基検出された。陥し穴は5基検出されたうち、4基が溝状、1基が円形を呈する。焼土遺構は調査区南側で隣接して3基、北東側で1基確認された。いずれもほぼ同一等高線上に存在し、他遺構との重複、遺物の出土とも認められない。以下、遺構種別ごとに詳細を記す。

### (1) 竪穴住居跡

**S I 10 竪穴住居跡**(第17図、写真図版4 / 遺物：第29・35図、写真図版18・19・23・24)

<位置・検出状況> 調査区北側、I A 11 a ~ 12 b グリッドに位置する。Ⅷ層面で検出した。

<重複遺構> S I 11と接し、本遺構が古い。

<平面形・規模> 歪な四角形。長軸500cm、短軸398cm、深さ18cm。

<埋土> 4層から成る。暗褐色～褐色土シルトを主体とし、1～2mmのパミスと炭化物が混入する。堆積状況からみて自然堆積と推測する。

<床面・壁> 床面は地床炉を検出した面とした。概ね平坦である。壁は南側のごく一部がS I 11と接する。北東側の約5mの範囲が現代の削平により消失しており、残存状態は良くない。確認できた壁は床面から緩やかに立ち上がるが、掘り込みが浅いため僅かなものとなっている。

<炉> 住居床面からはほぼ同規模の焼土範囲を2箇所検出した。この焼土範囲を炉1・炉2とした。炉1・炉2の平面形はともに不整な円形を呈し、炉1の規模は26×25cmを測り、使用面から12cm下の地山まで被熱により焼土化していることが確認された。炉2の規模は24×22cmを測り、使用面から6cm下まで焼土化が認められた。

<附属施設> 柱穴は9個確認された。いずれも炉の周囲に隣接して確認されたが、規模・配列が不規則で支柱穴かどうかは定かではない。

<出土遺物> 土器が1.61kg、石器が200点余り出土した。このうち土器7点と石器10点を掲載した。

<時期・考察> 出土した遺物と埋土の様相から縄文時代早期末葉と判断した。野外調査中は1棟の竪穴住居跡として精査を進めたが、平面形や炉の位置、支柱穴の配置等から2棟の重複も考えられる。

**S I 11 竪穴住居跡**(第18図、写真図版5 / 遺物：第29・35・36図、写真図版19・24)

<位置・検出状況> 調査区北側 I A 11 a ~ 12 b に位置する。Ⅷ層上面で検出した。

<重複遺構> S I 10と接し、本遺構の方が新しい。

<平面形・規模> 不整な楕円形。長軸508cm、短軸312cm、深さ20cm。

<埋土> 1層からなる。褐色シルトに1～2mm程のパミスと地山ブロックが混入する。堆積状況からみて自然堆積と推測する。

<床面・壁> 床面は地床炉を検出した面とした。凹凸が見られるが概ね平坦である。壁は南東側が後世の削平により消失しているが、他の部分は床面から緩やかに立ち上がる。検出面から床までの掘り込みが浅く壁も僅かなものとなっている。

<炉> 床面から焼土範囲を1箇所検出し、この焼土範囲を地床炉とした。不整な円形を呈し、50×

62cmを測る。使用面から約12cm下まで被熱により焼土化している。

<付属施設>土坑が2基検出され、それぞれ土坑1・2とした。土坑1は不整な円形で開口部は43×34cm、深さは16cmと比較的浅い。検出面からは台石が出土した。台石の下に埋土があり、台石を安定させるために入れられたものかどうかは不明である。土坑2は地床炉下から、長軸188cm×短軸108cm、深さ14cmの長楕円形を呈する浅い掘り込みが確認された。地床炉は土坑2の検出面において確認されたため、土坑2を埋めて床面と同じ高さにならした後、炉として使用したものと考えられる。柱穴は29個確認された。そのうち支柱穴と考えられるものが5個である。小型の柱穴が壁沿いに並ぶ。

<出土遺物>埋土中から土器片が数点(約330g)出土し、1点を掲載した。石器は約80点が出土し、このうち7点を掲載した。

<時期・考察>遺構内から出土した炭化物4点について年代測定を行ったが、<sup>14</sup>C年代で6,380±30yrBP～6,310±30yrBPという結果が得られている。縄文時代早期末葉の範疇に含まれる。

## (2) 土 坑

### S K 27土坑(第19図、写真図版6 / 遺物：第32・38図、写真図版21・25)

<位置・検出状況>調査区東側 I A 12 c グリッドに位置する。Ⅷ層上面で検出した。

<重複遺構>なし。S I 11に隣接する。

<平面形・規模>不整な円形を呈する。155×148cm、深さ48cm。

<埋土>3層から成る。褐色シルトを主体とし、1～2mmの黄色パミスを含む。堆積状況から自然堆積と推測する。

<底面>平坦であるが、歪である。

<出土遺物>埋土中から石匙1点と風化の進んだ土器片1点が出土した。表裏に縄文が施され、赤御堂式に比定されると考えられる。

<時期・考察>出土遺物から縄文時代早期末葉の可能性がある。機能については不明である。

### S K 29土坑(第19図、写真図版6)

<位置・検出状況>調査区東側 I A 3 f グリッドに位置する。Ⅷ層上面で検出した。

<重複遺構>なし。

<平面形・規模>開口部は不整な円形を呈する。135×130cm、深さ81cm。

<埋土>6層から成る。黒褐色シルトを主体とし、1～2mmの白色パミスを含む。堆積状況から自然堆積と推測する。断面はフラスコ状を呈する。

<底面>開口部に比べ広く平坦である。

<出土遺物>なし。

<時期・考察>出土遺物がないため、時期は特定できない。形状から貯蔵施設と考えられる。

### S K 30土坑(第19図、写真図版6 / 遺物：第38図、写真図版25)

<位置・検出状況>調査区東側 I A 14 s グリッドに位置する。Ⅷ層上面で検出した。

<重複遺構>なし。

<平面形・規模>円形を呈する。205×195cm、深さ73cm。

<埋土>5層から成り、黒色シルトを主体とする。堆積状況から自然堆積と推測する。

<底面>平坦であるが、北西に僅かに傾斜している。

<出土遺物>埋土中から少量の石器が出土した。敲磨器1点を掲載した。

<時期・考察>時期を特定できる遺物がないため詳細は不明である。

### (3) 陥し穴

#### S K T 05 陥し穴(第19図、写真図版6)

<位置・検出状況>調査区北側 I A 4 e ~ I A 5 e グリッドに位置する。Ⅷ層上面で検出した。

<平面形・規模>細長楕円形を呈する。長軸305cm×短軸48cm、深さ125cm。長軸方向はおよそ西-東にある。

<埋土>3層から成る。黒褐色シルトを主体とし、1~2mmの白色パミスを含む。堆積状況から自然堆積と推測する。

<底面>開口部に比べ狭く細長い。ほぼ平坦であるが、東に傾斜している。西側壁はオーバーハングが見られる。

<時期・考察>時期等詳細は不明である。

#### S K T 06 陥し穴(第20図、写真図版7)

<位置・検出状況>調査区東側 I A 17 h グリッドに位置する。Ⅷ層上面で検出した。

<平面形・規模>細長楕円形を呈する。長軸378cm×短軸66cm、深さ120cm。長軸方向はおよそ北西-南東にある。

<埋土>3層から成る。黒色シルトを主体とし、1~2mmのオレンジパミスを含む。堆積状況から自然堆積と推測する。

<底面>開口部に比べ狭く細長い。ほぼ平坦であるが、南東に傾斜している。長軸方向両端壁は僅かにオーバーハングが見られる。

<時期・考察>時期等詳細は不明である。

#### S K T 07 陥し穴(第20図、写真図版7 / 遺物：第38図、写真図版25)

<位置・検出状況>調査区東側 I A 17 h ~ I A 17 i グリッドに位置する。Ⅷ層上面で検出した。

<平面形・規模>細長楕円形を呈する。長軸406cm×短軸75cm、深さ125cm。長軸方向はおよそ北西-南東方向にある。

<埋土>4層から成る。黒褐色シルトを主体とし、1~2mmのオレンジパミスを含む。堆積状況から自然堆積と推測する。

<底面>開口部に比べ狭く細長い。一部に凹凸がみられ、全体として南東に傾斜している。長軸方向北西壁にオーバーハングが見られる。

<出土遺物>埋土から石鏃2点が出土している。

<時期・考察>時期等詳細は不明である。

#### S K T 08 陥し穴(第21図、写真図版7)

<位置・検出状況>調査区東側 I A 18 h グリッドに位置する。Ⅷ層上面で検出した。

<平面形・規模>円形を呈する。155×150cm、深さ211cm。

<埋土>6層から成る。黒褐色~黄褐色シルトを主体とし、1~2mmのオレンジパミスを含む。堆

積状況から自然堆積と推測する。

<底面>開口部に比べ狭いが、ほぼ平坦である。

<時期・考察>時期等詳細は不明である。

#### S K T09陥し穴(第21図、写真図版7)

<位置・検出状況>調査区東側 I A 3 f グリッドに位置する。Ⅷ層上面で検出した。

<平面形・規模>細長楕円形を呈する。長軸364cm×短軸61cm、深さ120cm。長軸方向はおよそ北東-南西にある。

<埋土>7層から成る。黄褐色シルトを主体とし、1～2mmの白色パミスを含む。堆積状況から自然堆積と推測する。

<底面>開口部に比べ狭く細長く平坦である。長軸方向両壁にオーバーハングが見られる。

<時期・考察>時期等詳細は不明である。

### (4)焼土遺構

#### S N01焼土遺構(第21図、写真図版8)

<位置・検出状況>調査区北側 I A17k に位置する。Ⅷ層上面で検出した。

<平面形・規模>不整な円形の広がり、40×38cmを測る。

<時期・考察>地山が被熱の影響により使用面から2.5cm下まで焼土化している。周辺遺構に伴う屋外炉の可能性が高い。周辺の状況から縄文時代内と判断した。

#### S N02焼土遺構(第21図、写真図版8)

<位置・検出状況>調査区北側 I A11n に位置する。Ⅷ層上面で検出した。

<平面形>68×63cmの不整な円形状に広がる。

<時期・考察>地山が被熱の影響により使用面から8cm下まで焼土化している。周辺にはS N03・04があるが、関連性は不明である。屋外炉の可能性が高く、時期は検出面から縄文時代内と判断した。

#### S N03焼土遺構(第21図、写真図版8)

<位置・検出状況>調査区北側 I A11p に位置する。Ⅷ層上面で検出した。

<平面形・規模>97×75cmの楕円形に広がる。

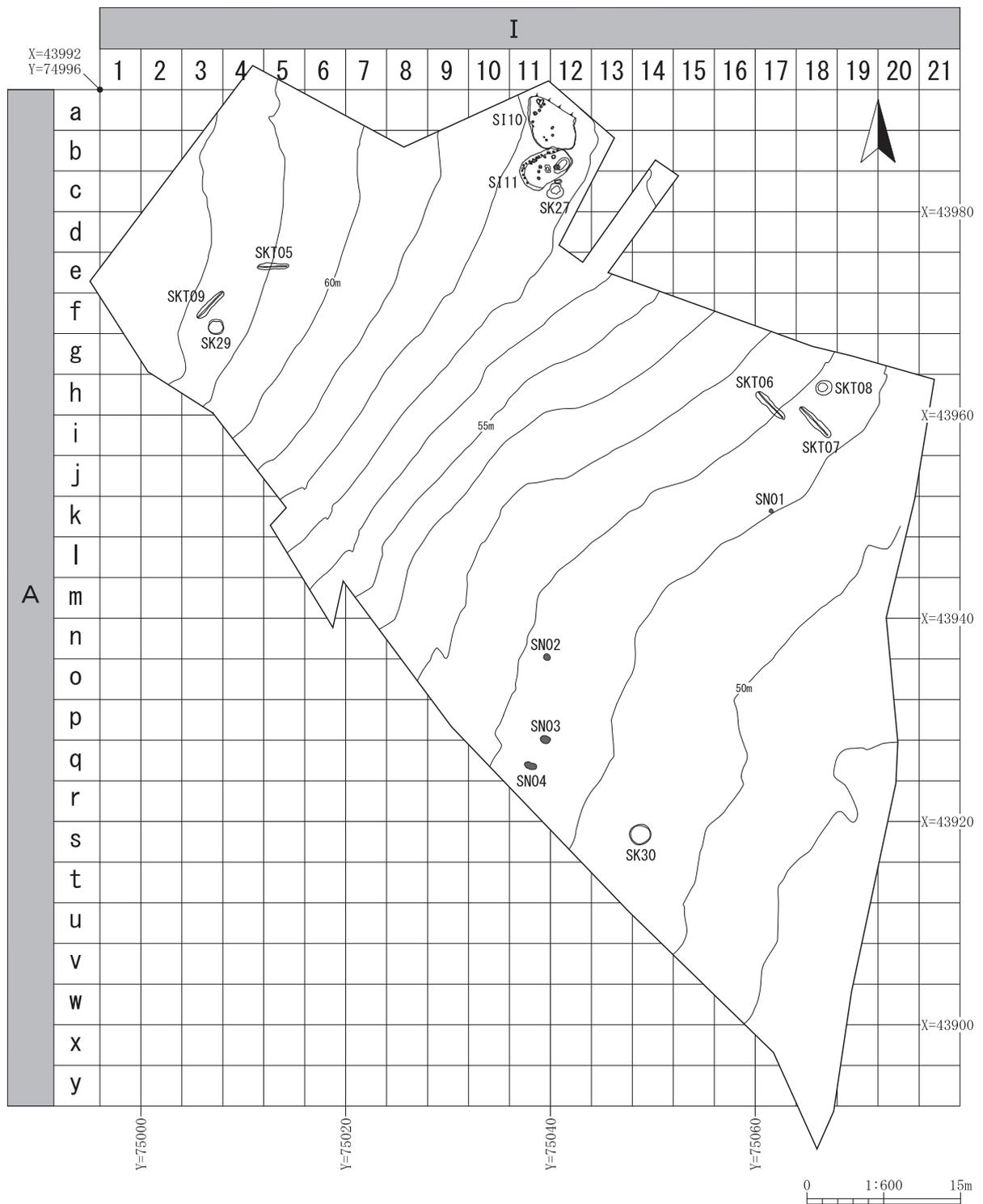
<時期・考察>地山が被熱の影響により使用面から13cm下まで焼土化している。周辺にはS N02・04があるが、関連性は不明である。焼土が厚く形成されているため、被熱量は相当なものと推定される。屋外炉の可能性が高く、時期は検出面から縄文時代内と判断した。

#### S N04焼土遺構(第21図、写真図版8)

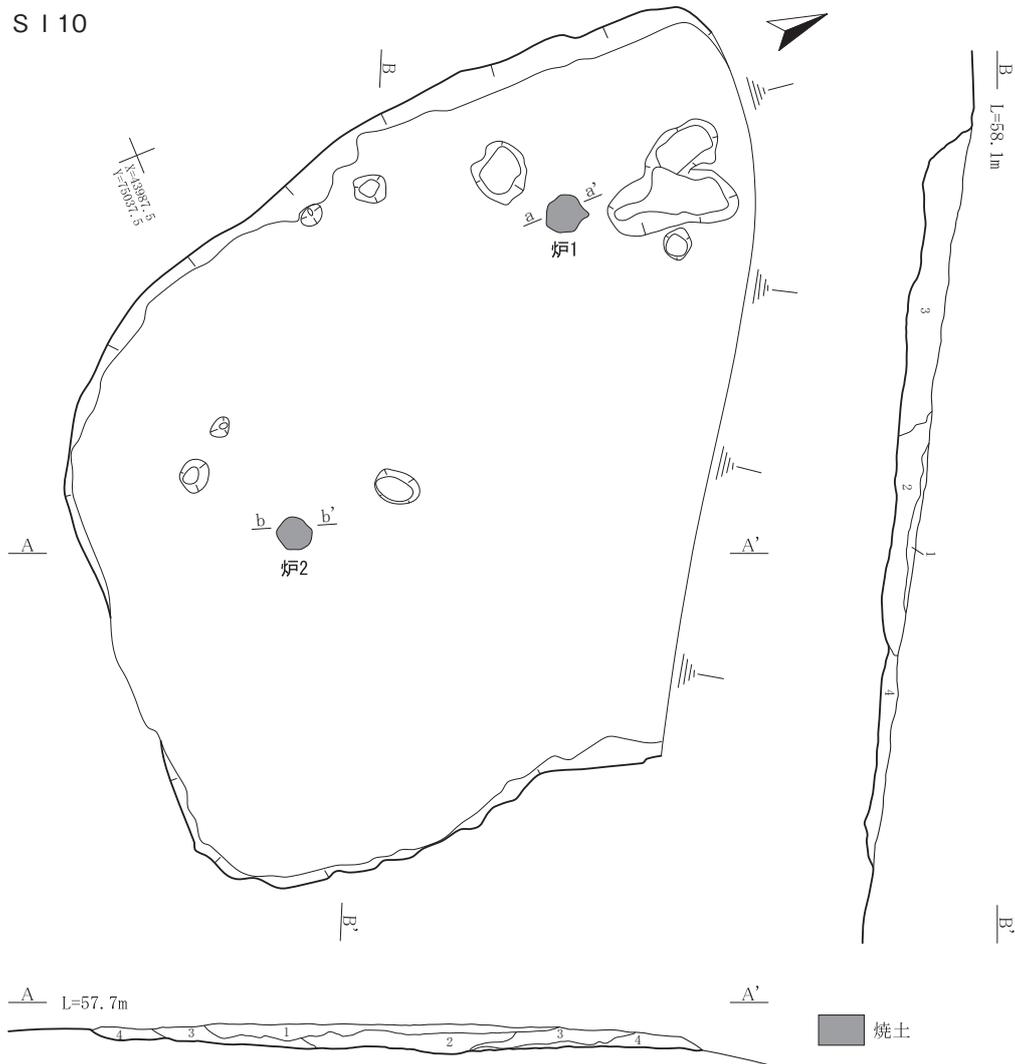
<位置・検出状況>調査区北側 I A11q に位置する。Ⅷ層上面で検出した。

<平面形・規模>121×62cmの不整な楕円形に広がる。

<時期・考察>地山が被熱の影響により使用面から12cm下まで焼土化している。S N03と距離にして約3mしか離れておらず、焼土の形成具合、規模等が酷似している。屋外炉の可能性が高く、時期は検出面から縄文時代内と判断した。

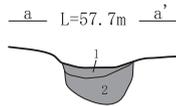


第16図 遺構配置図(平成27年度調査区)



SI10

1. 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性弱 しまりやや疎 土器片微量、粒径1~2mmのパミス少量含む
2. 10YR3/2 黒褐色シルト 粘性やや弱 しまりやや密 粒径1~2mmのパミス中量、地山ブロック少量含む
3. 10YR4/4 褐色シルト 粘性やや弱 しまりやや密 炭化物微量、1~2mmのパミス中量含む
4. 10YR4/6 褐色シルト 粘性弱 しまりやや密 地山土まだらに中量、粒径1~2mmのパミス少量含む



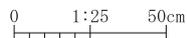
SI10 炉1

1. 2.5YR3/6 暗赤褐色シルト 粘性弱 しまりやや密 粒径2mmまでの黄色パミス少量、炭化物微量含む
2. 2.5YR4/8 赤褐色シルト 粘性弱 しまりやや密 被熱により硬化している、黄色パミス少量含む

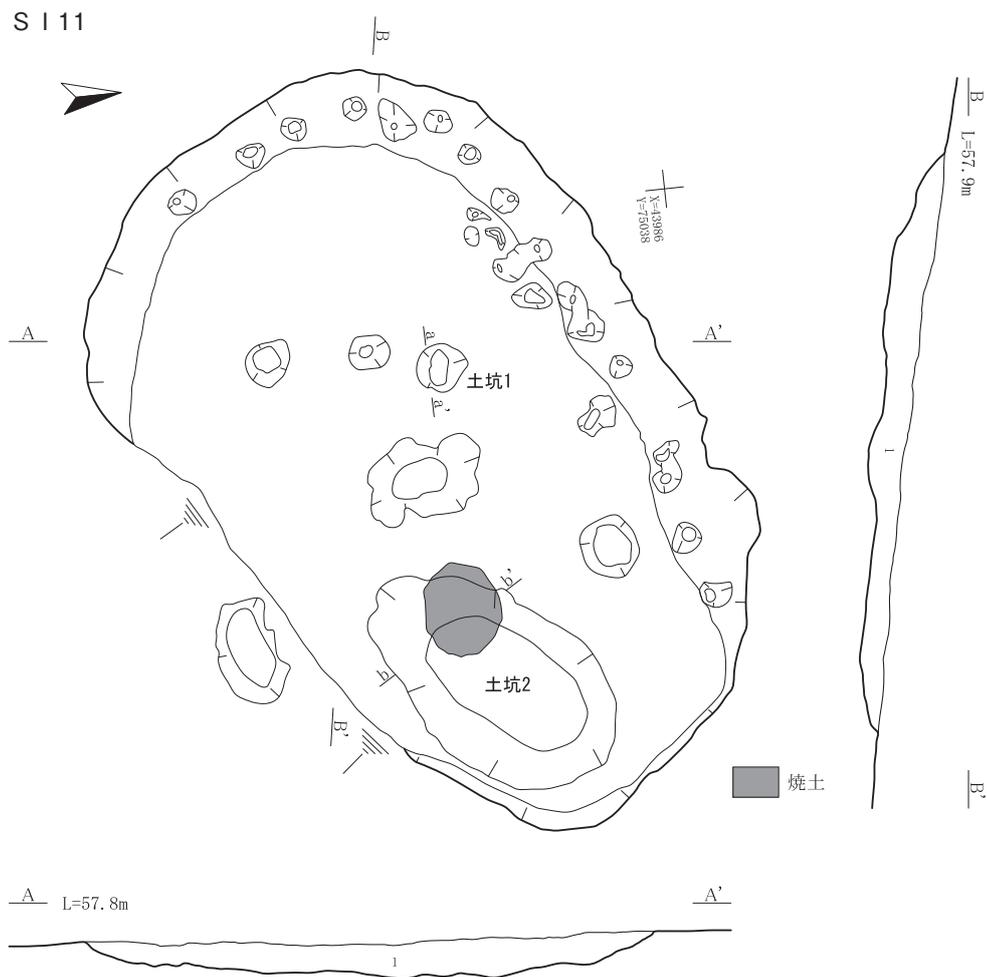


SI10 炉2

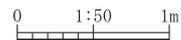
1. 7.5YR5/4 赤褐色シルト 粘性弱 しまりやや密 被熱により硬化している、粒径2mmまでのパミス少量含む



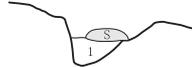
第17図 SI10 竪穴住居跡



SI11  
 1. 10YR4/4 褐色シルト 粘性弱 しまりやや密 粒径1mm~2mmのパミス微量、地山ブロック少量含む



a a' L=57.4m

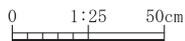


SI11 土坑1  
 1. 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性やや強 しまりやや強 粒径1mm~2mmのパミス微量、焼土粒微量含む

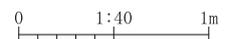
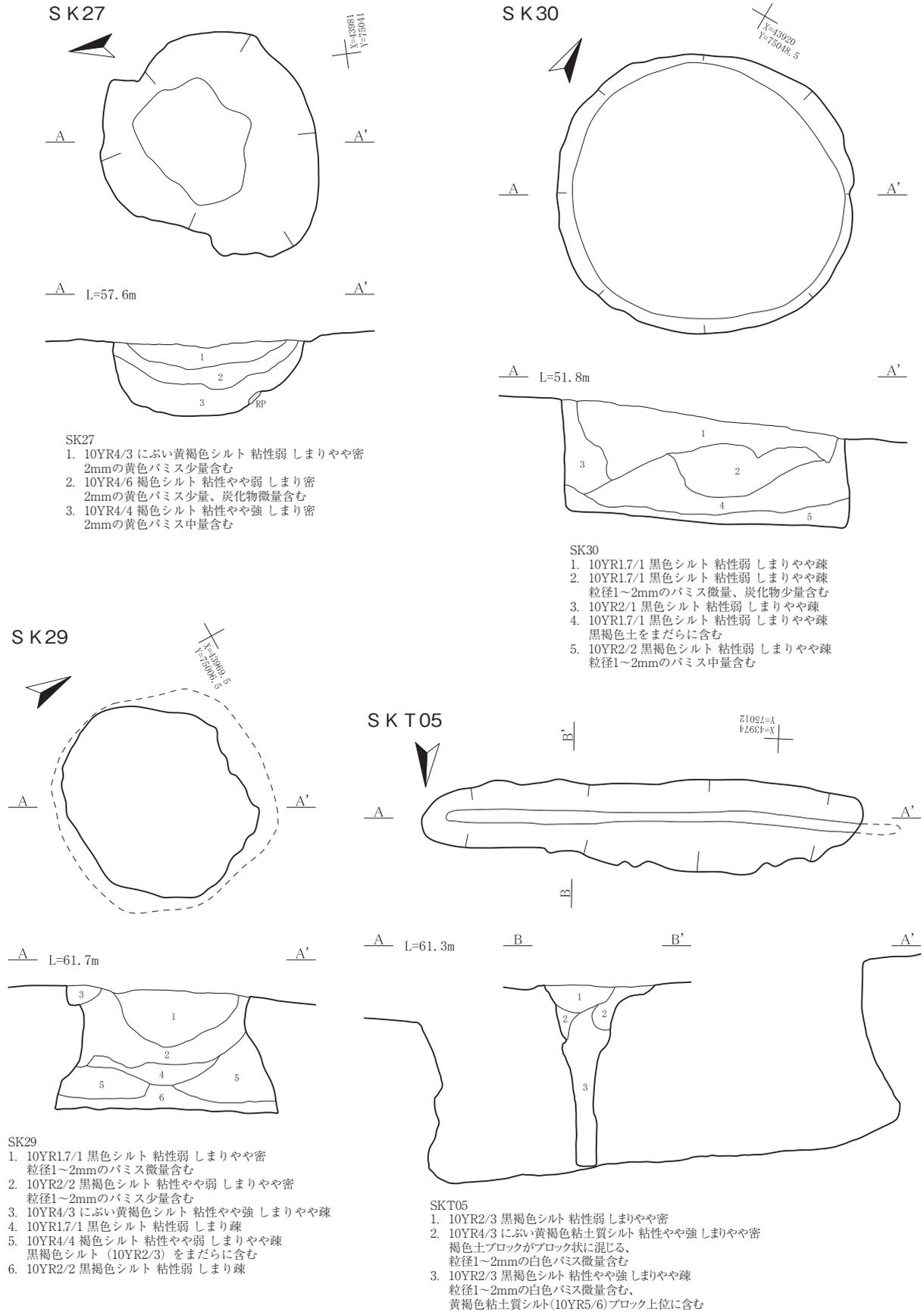
b b' L=57.4m



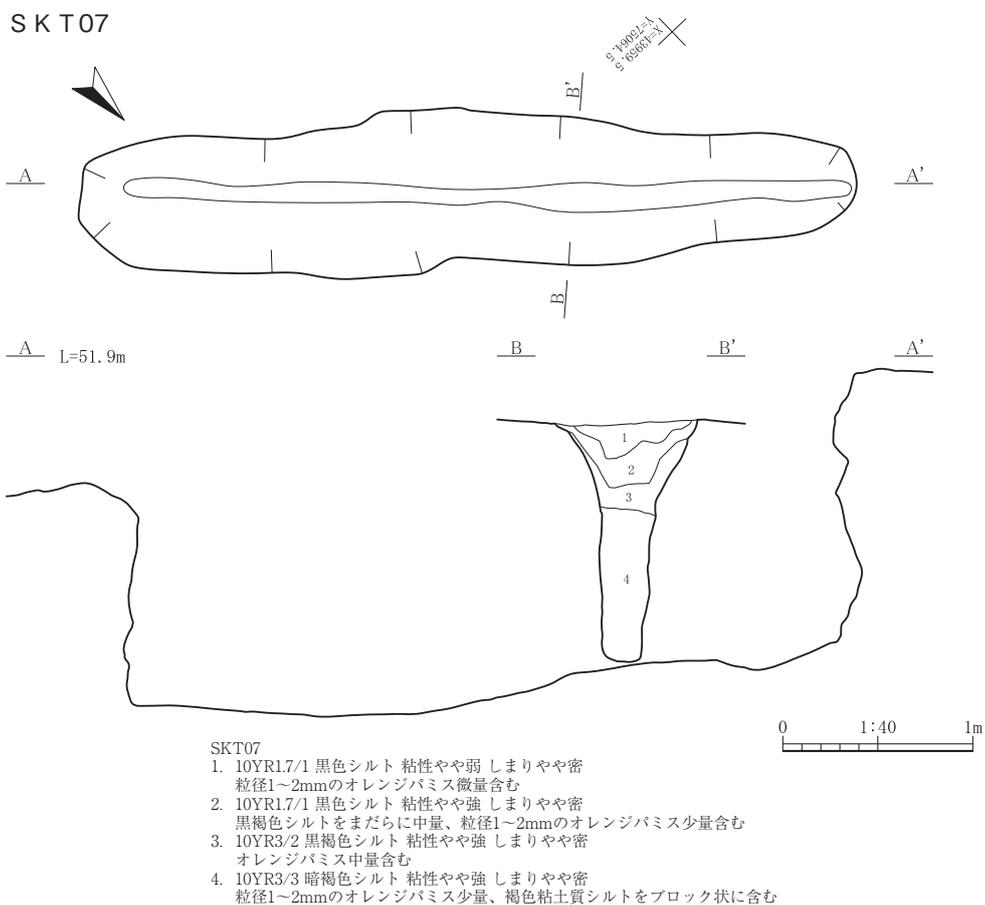
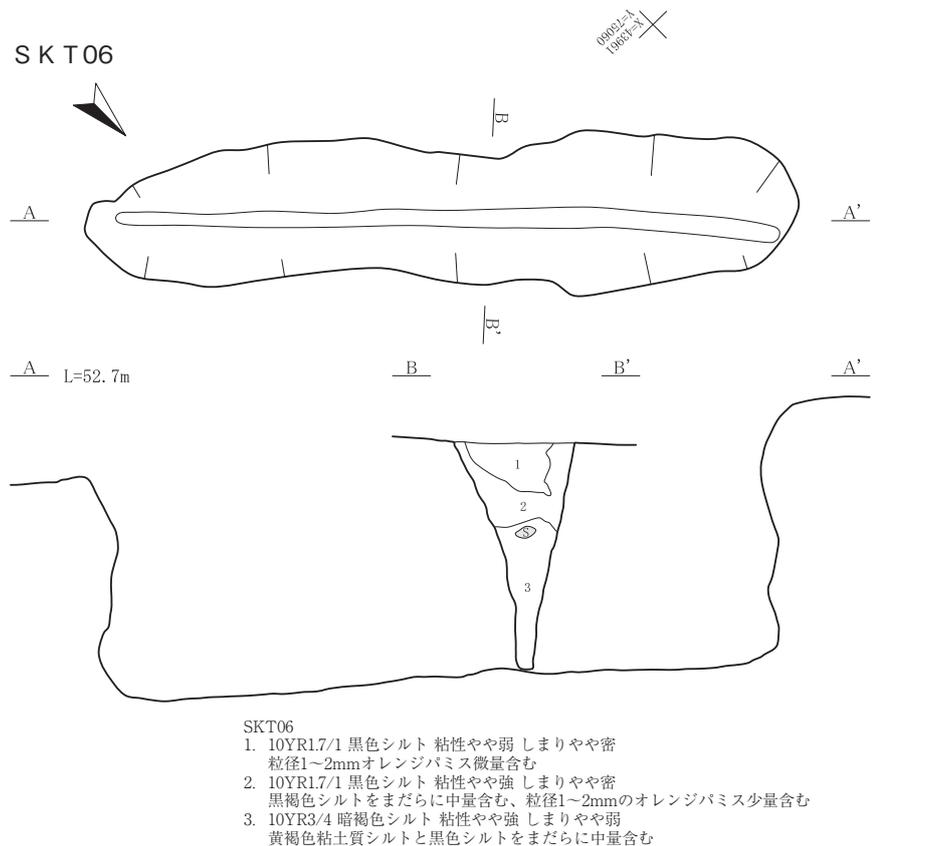
SI11 炉・土坑2  
 1. 7.5YR4/3 褐色シルト 粘性弱 しまり密 被熱により硬化が進んでいる、粒径2mmまでのパミス少量含む  
 2. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 粘性弱 しまり密 粒径2mmまでの黄色パミス少量含む



第18図 SI11 竪穴住居跡

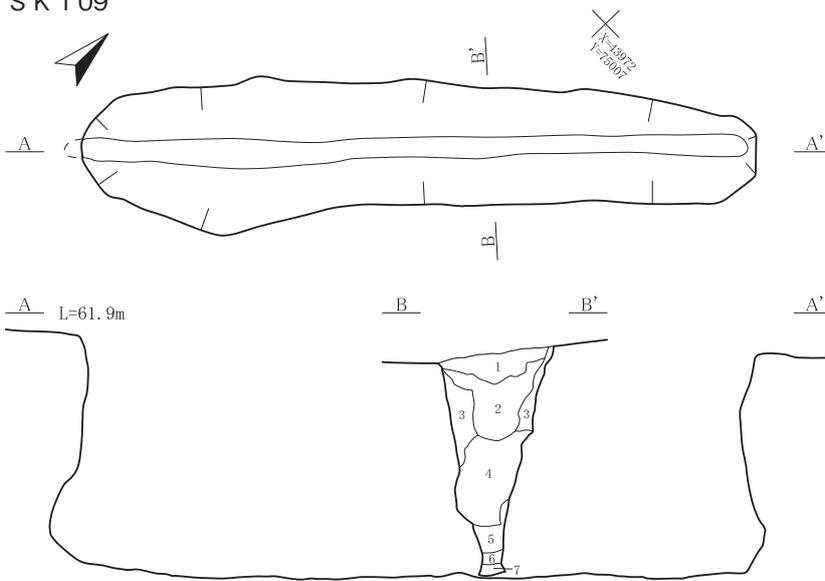


第19図 SK27・29・30土坑、SKT05陥し穴



第20図 S K T 06・07陥し穴

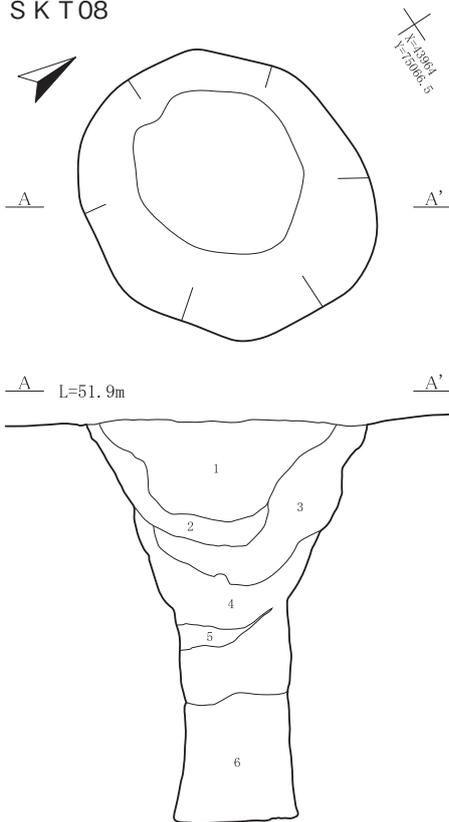
SKT09



SKT09

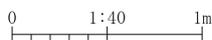
1. 10YR2/1 黒色シルト 粘性弱 しまりやや密
2. 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性やや弱 しまりやや密 粒径1~2mmの白色バミス微量含む
3. 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性やや弱 しまりやや密 粒径1~2mmの白色バミス少量含む
4. 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性やや強 しまりやや疎 黄褐色粘土質シルト(10YR5/6)をブロック状に少量含む
5. 10YR5/6 黄褐色粘土質シルト 粘性強 しまりやや疎 暗褐色シルト(10YR3/4)をまだらに含む
6. 10YR5/6 黄褐色粘土質シルト 粘性強 しまりやや密
7. 10YR2/2 暗褐色シルト 粘性弱 しまり疎

SKT08

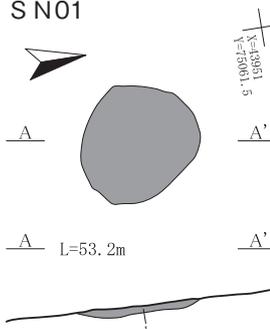


SKT08

1. 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性弱 しまりやや密 黒褐色シルト(10YR2/3)がまだらに混じる
2. 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性弱 しまりやや密 粒径1~2mmのオレンジバミスを少量含む
3. 10YR2/3 黒褐色シルト 粘性やや弱 しまりやや密 褐色シルト(10YR4/4)がブロック状に混じる
4. 10YR4/4 褐色シルト 粘性やや強 しまりやや密 黒褐色シルト(10YR2/3)を多量に含む
5. 10YR5/6 黄褐色粘土質シルト 粘性やや強 しまりやや密
6. 10YR6/8 明黄褐色粘土質シルト 粘性強 しまりやや疎 黒褐色シルト(10YR2/3)を層状に中量含む



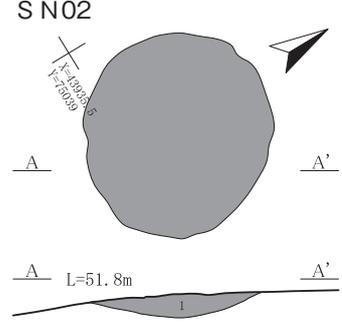
SN01



SN01

1. 7.5YR5/4 において赤褐色 粘性弱 しまりやや密 被熱により硬化が進んでいる、2mmまでのバミス含む

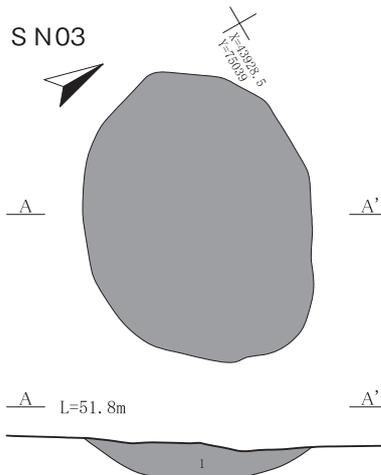
SN02



SN02

1. 5YR4/4 において赤褐色シルト 粘性やや弱 しまりやや密 粒径1~2mmのバミス中量含む

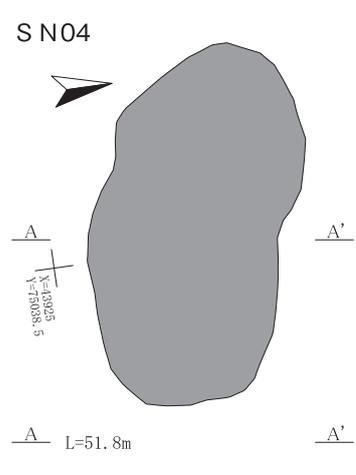
SN03



SN03

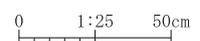
1. 5YR4/8 赤褐色シルト 粘性弱 しまりやや疎 1~2mmのバミス含む

SN04



SN04

1. 5YR5/6 明赤褐色シルト 粘性弱 しまりやや疎 粒径約3mmの軽石微量含む



第21図 SKT08・09陥し穴、SN01~04焼土遺構

## 5 平成29年度調査

平成29年度の調査で検出された遺構は、竪穴住居跡2棟、土坑5基、陥し穴6基である。時代としては、竪穴住居跡1棟が古墳時代(7世紀)に帰属するが、そのほかは縄文時代のもと考えられる。周辺の出土遺物から早期末葉が推測されるが、土坑や陥し穴の大半は詳細な時期については不明である。以下、遺構種別ごとに詳細を記す。

### (1) 竪穴住居跡

**S I 12竪穴住居跡**(第23図、写真図版11～13/遺物：第30・31・34・36・37図、写真図版19・20・23・24)

<位置・検出状況>調査区中央西側に位置し、Ⅷ層面で検出した。検出時より周辺から土師器等が確認できており、暗褐色土の明瞭なプランが確認された。

<重複遺構>SKT15と重複し、これを本遺構が切る。

<平面形・規模>一辺約360～380cmの隅丸方形を呈する。主軸方位はおよそ北にある。

<埋土>煙道・カマド部分を含め、6層に細分したが、住居本体部分は3層に分層される。ほぼ全体が黒色土と黒褐色土で構成される。下位層は黄褐色土ブロックや炭化物が多く混入し、焼失住居であることが分かる。

<壁・床面>壁は床面からほぼ直立し、深さは最深部で約50cmを測る。床面は概ね平坦で、南側の一部に貼床が施されている。また、全域には火災時の炭化材が放射状に遺存する。遺物も多く残存しており、土師器や土製紡錘車などが見られる。

<カマド>北壁のほぼ中央に付設されている。袖・天井架構には自然石を芯材としており、これらの一部が遺存している。袖の芯材石の内側はいずれも強い被熱が認められることから、外側にのみ粘土を貼付したものと推測される。燃焼部は周辺より一段低く窪み、にぶい赤褐色焼土が広がる。煙道は長さ150cm、幅40cm、深さ20cmの掘り込み式で、北へ真っ直ぐ延びる。先端部の煙出部は円形をし、煙道から更に30cmの深さをもつ。

<床面施設>北壁のカマドから西側部分と南壁の一部で壁溝が確認できる。深さは最深部でも5cm程度で、あまり明確ではない。南壁の中央部分が途切れるため、出入口の可能性もある。また、中央部からやや東よりの部分で土坑(K1)を確認した。北側に小穴が取り付くが、およそ径90cmの円形を呈する。当初は貼床土の一部と考えており、これを剥がす過程で認識した。深さは約20cmほどで、小穴部分はこれより一段高い。貯蔵施設であろうか。柱穴と思われるものは数個検出、精査したが、規模・形状的に可能性があるのはP4のみであった。径約20cmの円形で、深さは15cmほどである。住居西側では東西方向に延びる溝状のものを4条確認した。いずれも深さは数センチ程度と浅いが、ほぼ等間隔に位置し、西壁から約90cmの位置まで同じように延びることから、根太痕と判断した。

<遺物>土器が約8.9kg、石器が9点、土製紡錘車が1点、コハクの細片が出土した。土器は埋土からは僅かに縄文土器の出土も認められるが、ほとんどが床面近くから出土した土師器で、焼失時に遺存したものである。

<時期・考察>焼失住居であり、遺物の良好な残存状況から失火の可能性が考えられる。出土した土師器の年代から7世紀末～8世紀初頭を想定していたが、床面に残存した焼失時の炭化材2点(C5・26)を年代測定をしたところ、暦年較正年代で、653～674calAD、654～675calADと2点ともほぼ同様の結果が得られた。詳細は後述の第Ⅵ章に記すが、7世紀中頃に位置付けられる。また、炭化材の肉

眼樹種同定を行ったところ、すべてクリ材との結果であった。

(小林)

### S I 13 竪穴住居跡(第24・25図、写真図版14／遺物：第31・37図、写真図版20・25)

<位置・検出状況>調査区東側緩斜面にあり、Ⅷ層上面で黒褐色シルトの楕円形状プランを検出した。精査の結果、西壁沿いに概ね規則的な柱穴の配置を確認したことから竪穴住居跡と判断した。

<重複遺構>なし。

<平面形・規模>北東側は調査区外へ延び、住居壁は一部攪乱で消失している。楕円形を呈し残存部から約860×660cmの住居跡と考えられる。

<埋土>主体となる堆積土は暗褐色シルト層で南部浮石をまばらに含む。東側底面直上に堆積する2層褐色シルト層は住居壁面の崩落土と考えられる。

<壁・床面>西壁は緩やかに外反し、南北壁はほぼ直角に立ち上がる。深さは最大40cm。斜面下方に当たる東側は壁面が残存しておらず、壁面立ち上がりプランは破線で示した。床面は概ね平坦。中央部は浅く落ち込み、県教育委員会生涯学習文化課の試掘トレンチが残る。

<炉>床面中央西寄りに焼土1基を検出した。焼成面は不定形を呈し、径30cmの規模で赤褐色の焼土が広がる。残存状態は不良で、南側を上述の試掘トレンチに切られる。現地性焼土と考えられるが、実際に炉として機能していたかは判断し難い。

<ピット>43個(P 1～43)検出した。南西側は壁に沿って概ね規則的に配置するが、他は不規則な分布を示す箇所もある。径は約20～40cmの円形状が多く、深さは30cm前後である。なお、P 10・11・13・40は攪乱痕の底面で検出したが、本遺構に帰属すると判断した。大半は壁溝沿いの壁柱穴と判断される。

<遺物>縄文土器0.3kg、石器約250点が出土した。大部分は1層中に含まれる。石器の剥片が多く出土し、黒曜石片が顕著に見られる。住居中央部に向かうほど頁岩片が、壁際からは黒曜石片が多く出土した。出土位置が明確なものでは、西側床面に縄文時代早期末葉の深鉢と推測される胴部片がある。

<時期・考察>床面出土土器の年代観から縄文時代早期末葉と考えられる。中央に一段低くなる部分が確認できるが、2時期にわたる可能性や床面施設の可能性も視野に入れるべきか。

(佐藤)

## (2) 土 坑

### S K 36 土坑(第25図、写真図版15／遺物：第38図、写真図版25)

<位置・検出状況>調査区北東側、尾根上平坦部に位置する。Ⅷ層上面で検出した。

<重複遺構>なし。

<平面形・規模>平面形は略円形を呈し、開口部の規模は径1.2m、深さは40cmである。

<埋土>3層に区分した。堆積状況から人為堆積の可能性がある。

<底面>やや東側に低位となる。

<遺物>土器はなし。石器は剥片数点と特殊磨石1点が出土した。

<時期・機能>出土遺物がほとんどないため、時期の特定はできない。機能についても不明。

(中島)

**S K 37土坑**(第25図、写真図版15／遺物：第38図、写真図版25)

<位置・検出状況>調査区南東側、尾根上平坦部に位置する。Ⅷ層上面で検出した。

<重複遺構>なし。

<平面形・規模>平面形は略円形を呈し、開口部の規模は約2.2×2.0m、深さは60cmである。

<埋土>3層に区分できる。含まれるブロックから人為堆積の可能性がある。

<底面>やや凹凸が認められる。

<遺物>土器が数片、石器は剥片が十数点と敲磨器が出土している。このうち、石鏃1点を掲載した。

<時期>時期を特定できる遺物がないため詳細は不明である。機能についても不明。

(中島)

**S K 38土坑**(第26図、写真図版15)

<位置・検出状況>調査区北側、尾根上平坦部に位置する。Ⅷ層上面で検出した。

<重複遺構>なし。

<平面形・規模>平面形は略円形を呈し、開口部の規模は径93cm、深さは25cmである。

<埋土>2層に区分できる。堆積状況から人為堆積と考えられる。

<底面>概ね平坦である。

<遺物>出土していない。

<時期・機能>いずれも詳細は不明である。

(中島)

**S K 39土坑**(第26図、写真図版15／遺物：第38図、写真図版25)

<位置・検出状況>調査区北東側、尾根上平坦部に位置する。Ⅷ層上面で検出した。

<重複遺構>なし。

<平面形・規模>平面形は略円形を呈し、開口部の規模は1.9×1.4m、深さは50cmである。

<埋土>3層に区分できる。堆積状況から自然堆積の可能性がある。

<底面>中央部が最低位となり窪む。

<遺物>土器は出土していない。石器は石鏃(?)と削搔器の2点を掲載した。

<時期・機能>いずれも詳細は不明である。

(中島)

**S K 42土坑**(第26図、写真図版16)

<位置・検出状況>調査区北西側、北東向きの斜面上に位置する。Ⅴ層上面で検出した。

<重複遺構>なし。

<平面形・規模>平面形は略円形である。開口部の規模は1.2×0.8m、深さは25cmである。

<埋土>黒色土の単層である。Ⅲ層起源か。

<底面>底面は平坦である。

<遺物>出土していない。

<時期・機能>いずれも詳細は不明である。検出はⅤ層上面だが、残存状況から上位層のⅢ層からの掘り込みの可能性がある。

(中島)

## (3) 陥し穴

## S K T 10 陥し穴(第26図、写真図版16)

<位置・検出状況>調査区南側、尾根上平坦部に位置する。Ⅷ層上面で検出した。

<重複遺構>なし。

<平面形・規模>平面形は溝状である。開口部の規模は長軸3.2m×短軸70cm、長軸は北西—南東方向に平行する。深さは90cm、底面の規模は長軸3.4m×短軸15cmである。長軸方向の断面では、両端に抉れが確認できる。短軸方向の断面形はV字形を呈し、壁は外傾して立ち上がる。

<埋土>4層に区分できる。含まれるブロックの大きさと密度から自然堆積したものと考えられる。

<遺物>出土していない。

<時期>詳細は不明である。

(中島)

## S K T 11 陥し穴(第27図、写真図版16)

<位置・検出状況>調査区中央、尾根上平坦部に位置する。Ⅷ層上面で検出した。

<平面形・規模>平面形は溝状である。開口部の規模は長軸5m×短軸50cm、長軸は北東—南西方向に平行する。深さは1.2m、底面の規模は長軸5.6m×短軸15cmである。長軸方向の断面では端部に抉れが確認できる。短軸方向の断面形はV字形を呈し、壁は外傾し立ち上がる。

<埋土>単層である。自然堆積の可能性はある。

<遺物>出土していない。

<時期>詳細は不明である。

(中島)

## S K T 12 陥し穴(第27図、写真図版16)

<位置・検出状況>調査区北側、北向き斜面に位置する。Ⅷ層上面で検出したが、本来は上層からの掘り込みと思われる。Ⅴ層中か。

<重複遺構>なし。

<平面形・規模>平面形は溝状である。開口部の規模は長軸3.7m×短軸30cm、長軸は東西方向に平行する。深さは50cm、底面の規模は長軸3.6m×短軸25cmである。上述したが、検出面より上層から掘り込まれ、下部のみが残存したものと考えられる。短軸方向の断面形はU字形で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

<埋土>2層に区分できる。層位状況から自然堆積と考えられる。

<遺物>出土していない。

<時期>詳細は不明であるが、隣接するS K T 13と長軸方向が同じである。検出面からの深さに差があるが、セット関係にある可能性が高い。

(中島)

## S K T 13 陥し穴(第28図、写真図版17)

<位置・検出状況>調査区北西側、北向き斜面に位置する。Ⅴ層上面で検出した。

<平面形・規模>平面形は溝状を呈し、開口部の規模は長軸3.5m×短軸75cm、長軸は東西方向に平

行する。深さは1.4m、底面の規模は長軸3.8m×短軸2.3mである。長軸方向の断面に抉れが確認できる。短軸方向の断面形はV字形を呈し、壁は外傾し立ち上がる。

＜埋土＞6層に区分出来る。層位状況から自然堆積と考えられる。

＜遺物＞出土していない。

＜時期＞詳細は不明であるが、隣接するS K T 12と長軸方向が同じであることや位置関係から、セツト関係にある可能性が高い。

(中島)

#### S K T 14陥し穴(第28図、写真図版17)

＜位置・検出状況＞調査区北西側、尾根北向き斜面上に位置する。V層上面で検出した。

＜重複遺構＞なし。

＜平面形・規模＞平面形は溝状である。開口部の規模は長軸3.2m×短軸35cm、長軸は東西方向に平行する。深さは38cm、底面の規模は長軸3.2m×短軸15cmである。遺構の位置と規模から検出面より上層から掘り込まれ、下部のみが残存したものと考えられる。短軸方向の断面形はU字形で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

＜埋土＞単層である。自然堆積の可能性はある。

＜遺物＞出土していない。

＜時期＞詳細は不明であるが、S K T 12・13と同一等高線上に位置し、長軸方向もほぼ同じことから、これらと同じ時期の可能性が考えられる。

(中島)

#### S K T 15陥し穴(第28図、写真図版17)

＜位置・検出状況＞調査区中央西側に位置し、検出面はⅧ層面である。S I 12精査過程で認知した。

＜重複遺構＞S I 12と重複し、これに切られる。

＜平面形・規模＞開口部長軸3.9m、短軸20～60cmの溝状を呈し、長軸方向はおよそ西－東にある。重複により大部分の上半部が消失するため、本来の部分が残存するのは西端のみで、短軸は60cm前後と考えられる。

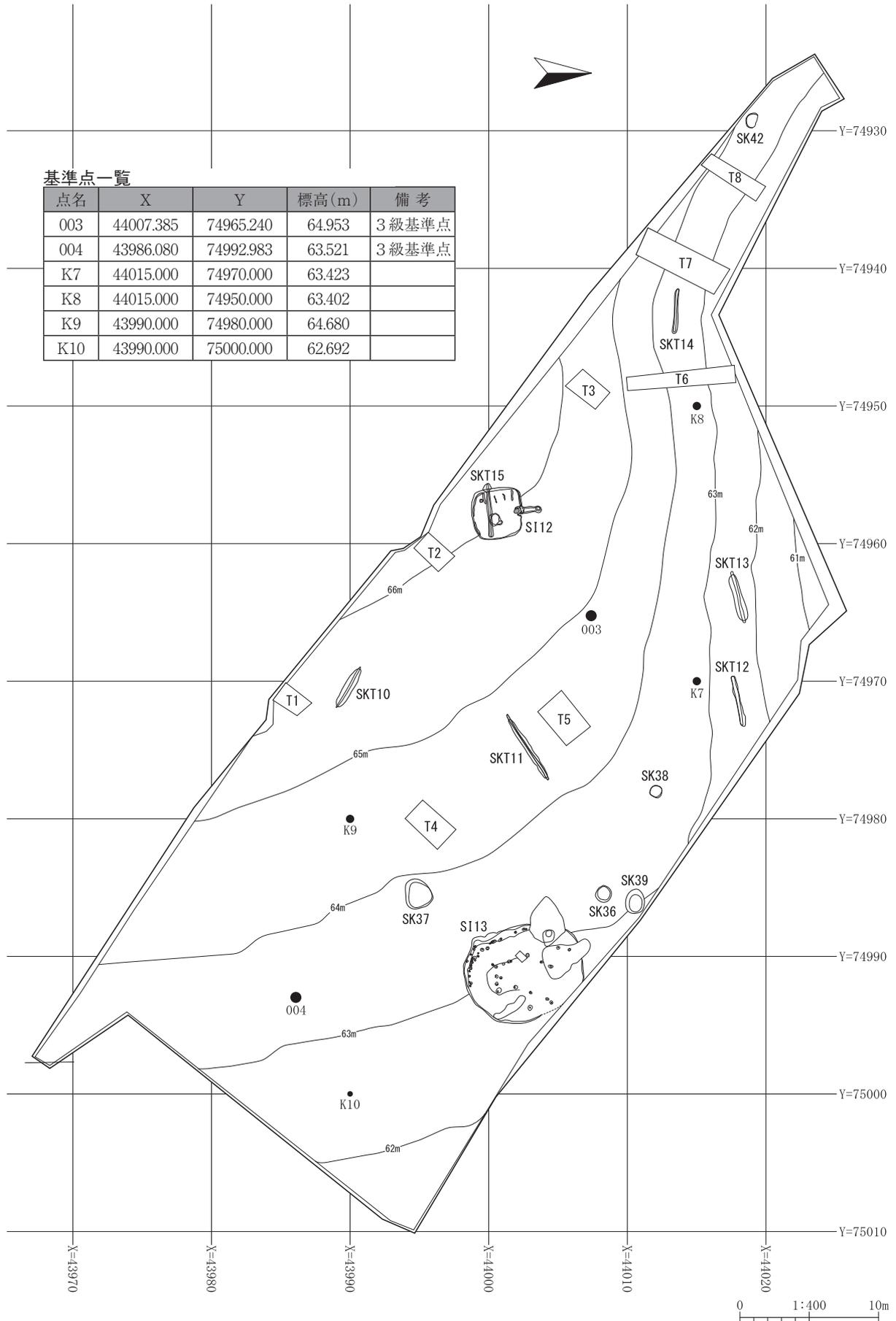
＜埋土＞暗褐色土の単層である。混入物から人為堆積の可能性はあるが、下位部分のみの可能性もある。

＜壁・底面＞短軸方向の断面形状はY字状に近く、底面からはほぼ直角に立ち上がり、上部で外傾する。底面はほぼ平坦である。

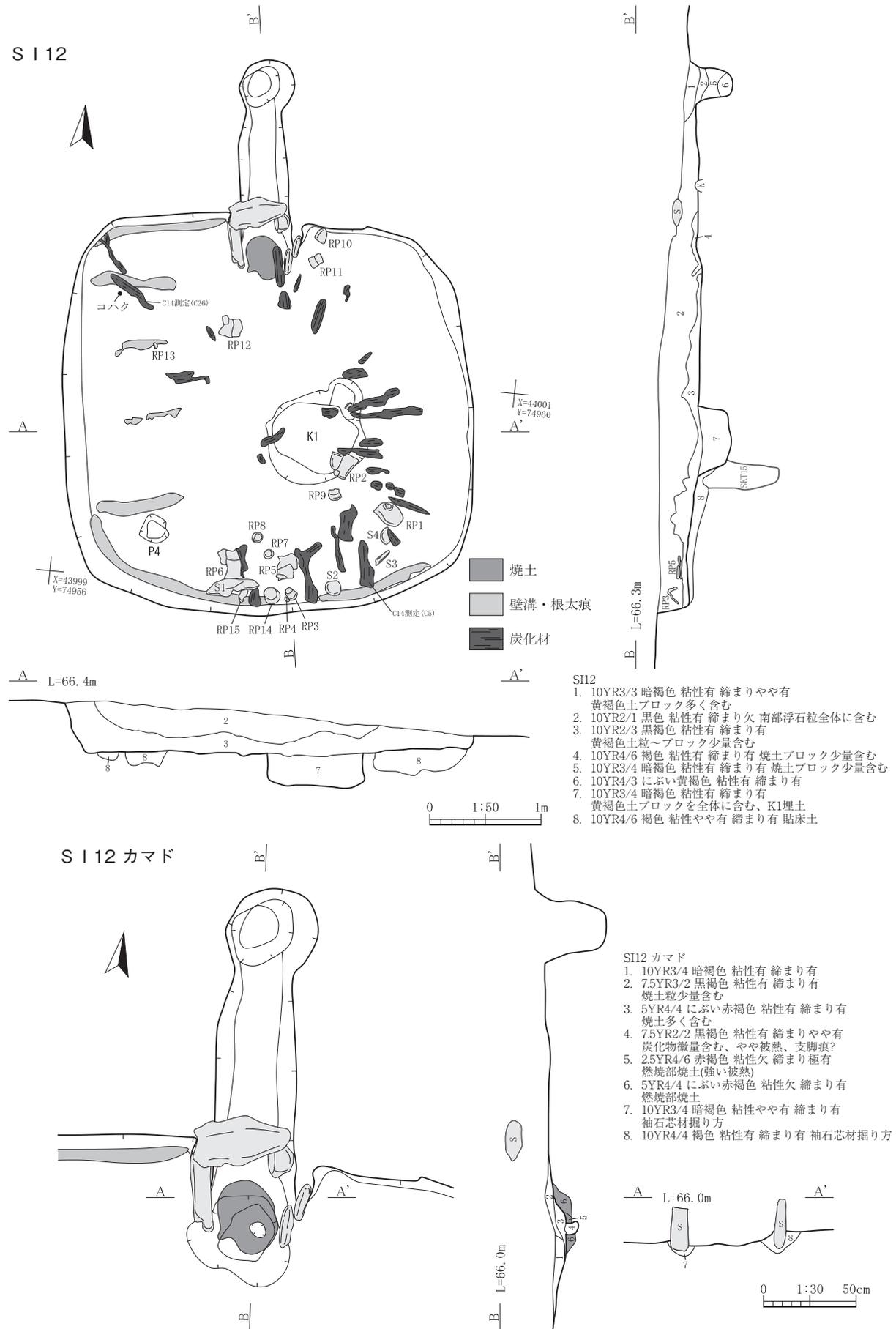
＜遺物＞出土していない。

＜時期＞出土遺物がないため詳細は不明。周辺にあるS K T 12・13・14と長軸方向は同一であり、同時期の可能性が考えられる。

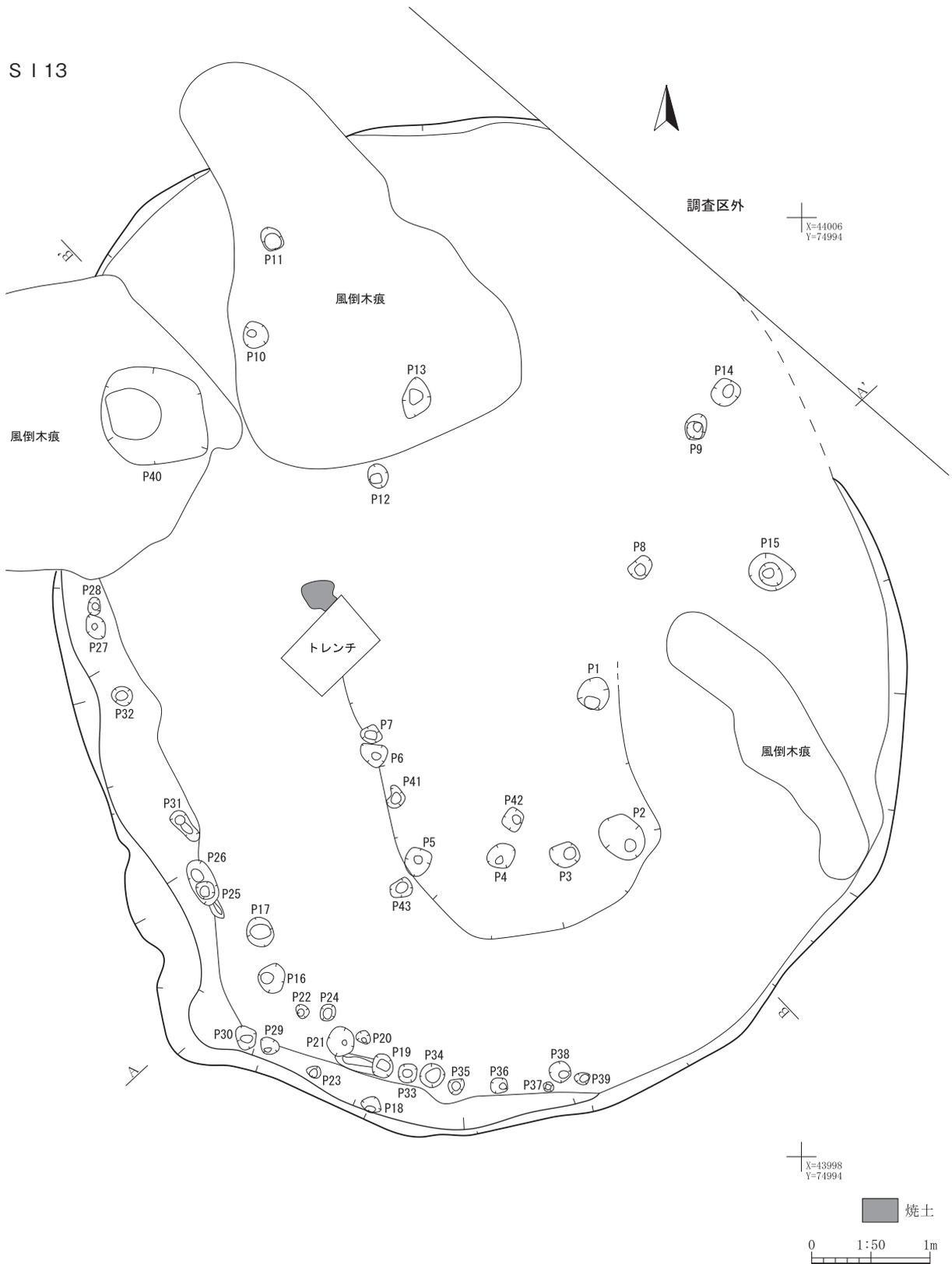
(小林)



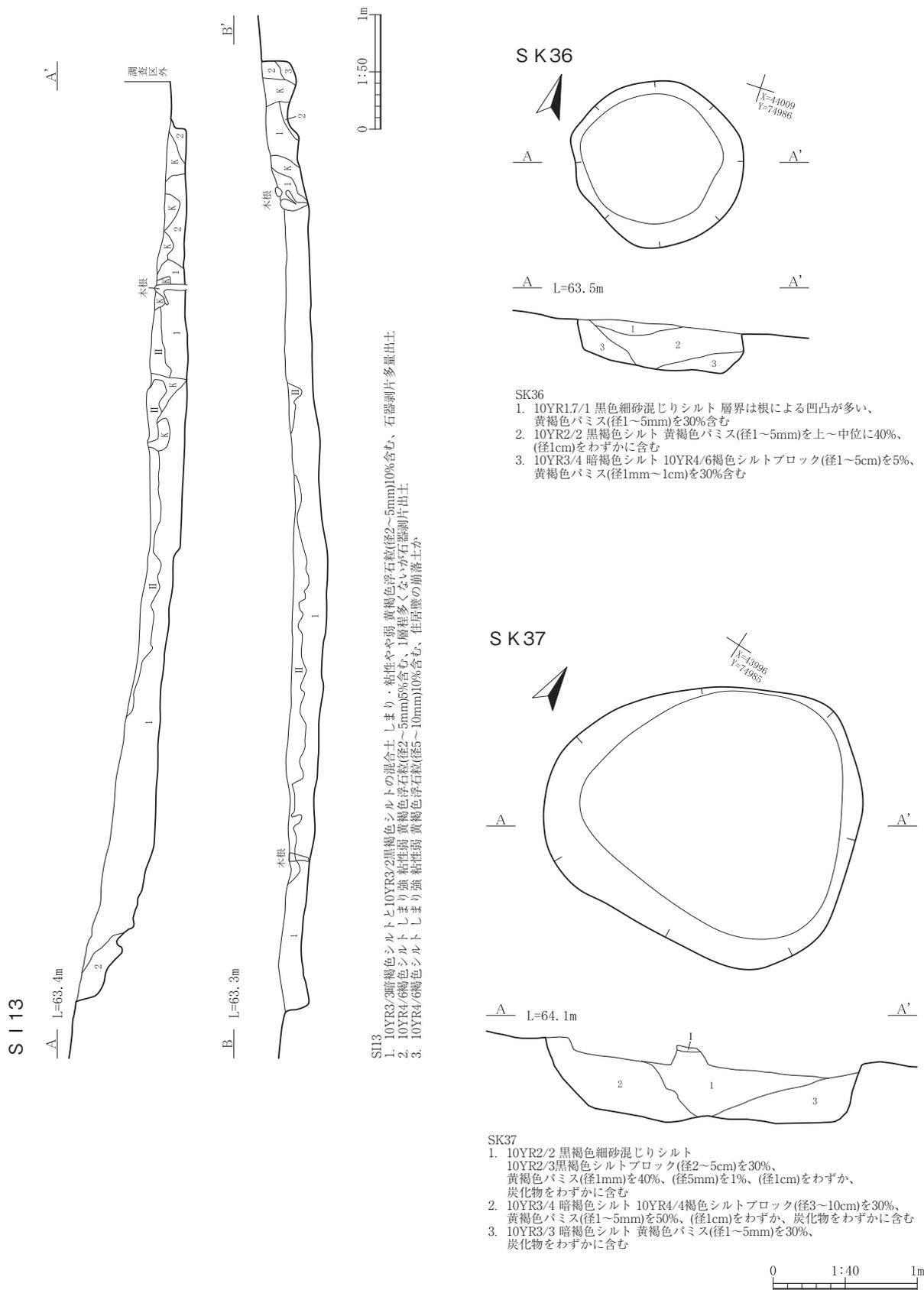
第22図 遺構配置図(平成29年度調査区)



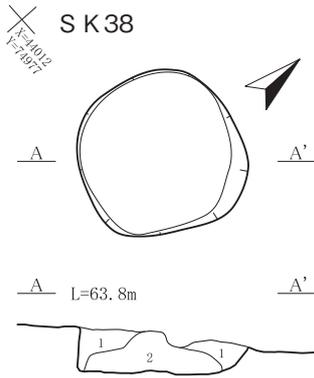
第23図 S I 12 竪穴住居跡



第24図 S I 13竪穴住居跡(1)

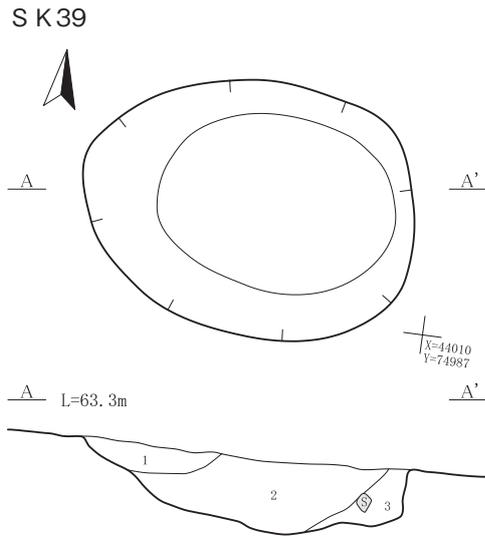


第25図 S I 13竪穴住居跡(2)、S K 36・37土坑



SK38

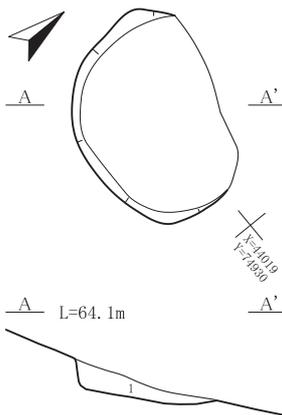
- 10YR4/3 におい黄褐色シルト  
10YR1.7/1黒色ブロック(径5~10cm)をわずか、  
黄褐色パミス(径1~5mm)を20%含む
- 10YR1.7/1 黒色シルト  
10YR4/3におい黄褐色パミス(径5~10cm)をわずか、  
黄褐色パミス(径1~5mm)を中~下位に集中して20%含む



SK39

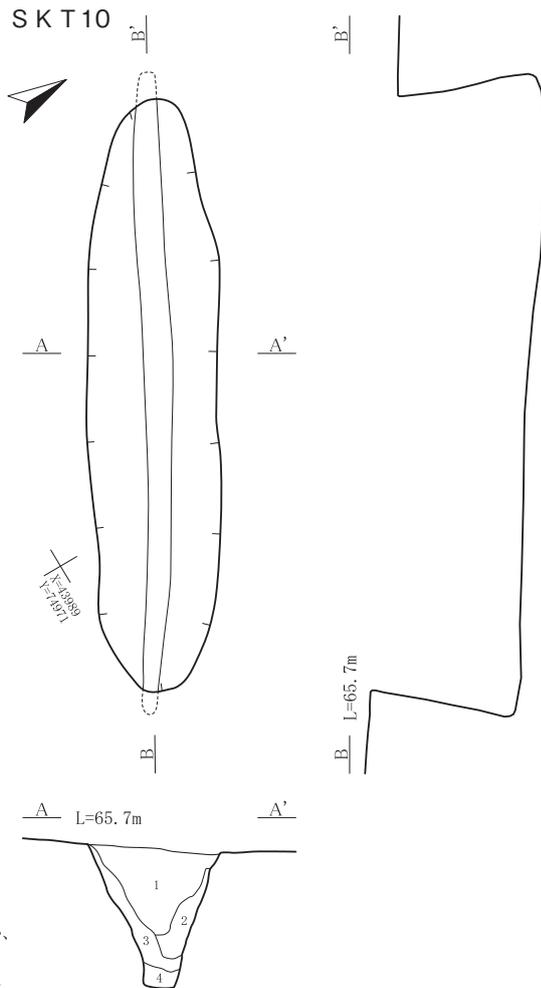
- 10YR2/1 黒色細砂混じりシルト 黄褐色パミス(径1~5mm)を10%含む
- 10YR3/1 黒褐色シルト 黄褐色パミス(径1~5mm)を40%含む
- 10YR3/2 黒褐色シルト 10YR4/6褐色シルトブロック(径5cm)を下位にわずか、  
黄褐色パミス(径1mm)を10%、中位に礫石器を含む

SK42



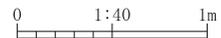
SK42

- 10YR1.7/1 黒色シルト  
10YR3/4褐色シルトブロック(径2~5cm)を10%、  
黄褐色パミス(径1~5mm)を40%、(径1cm)を5%含む

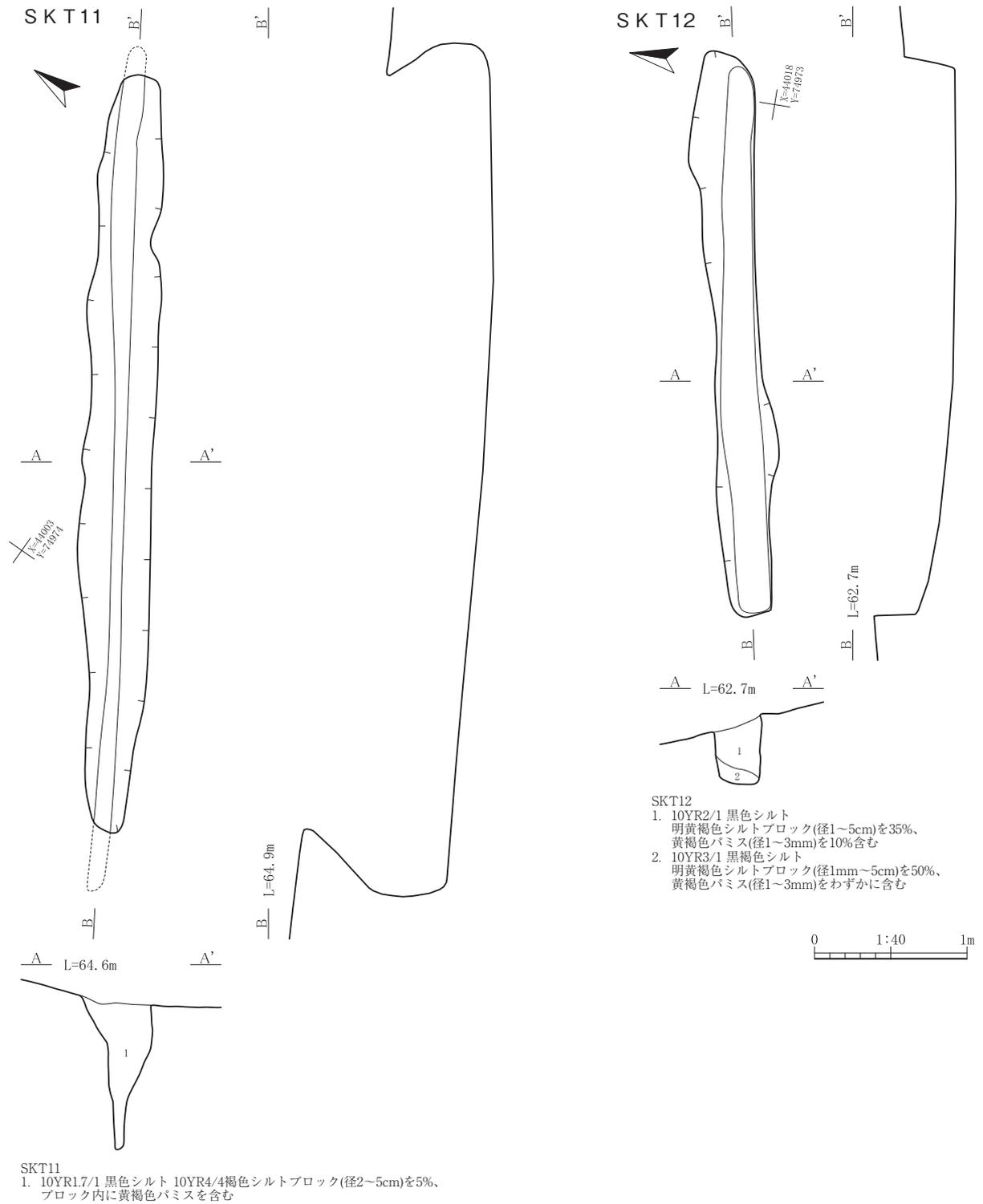


SK T10

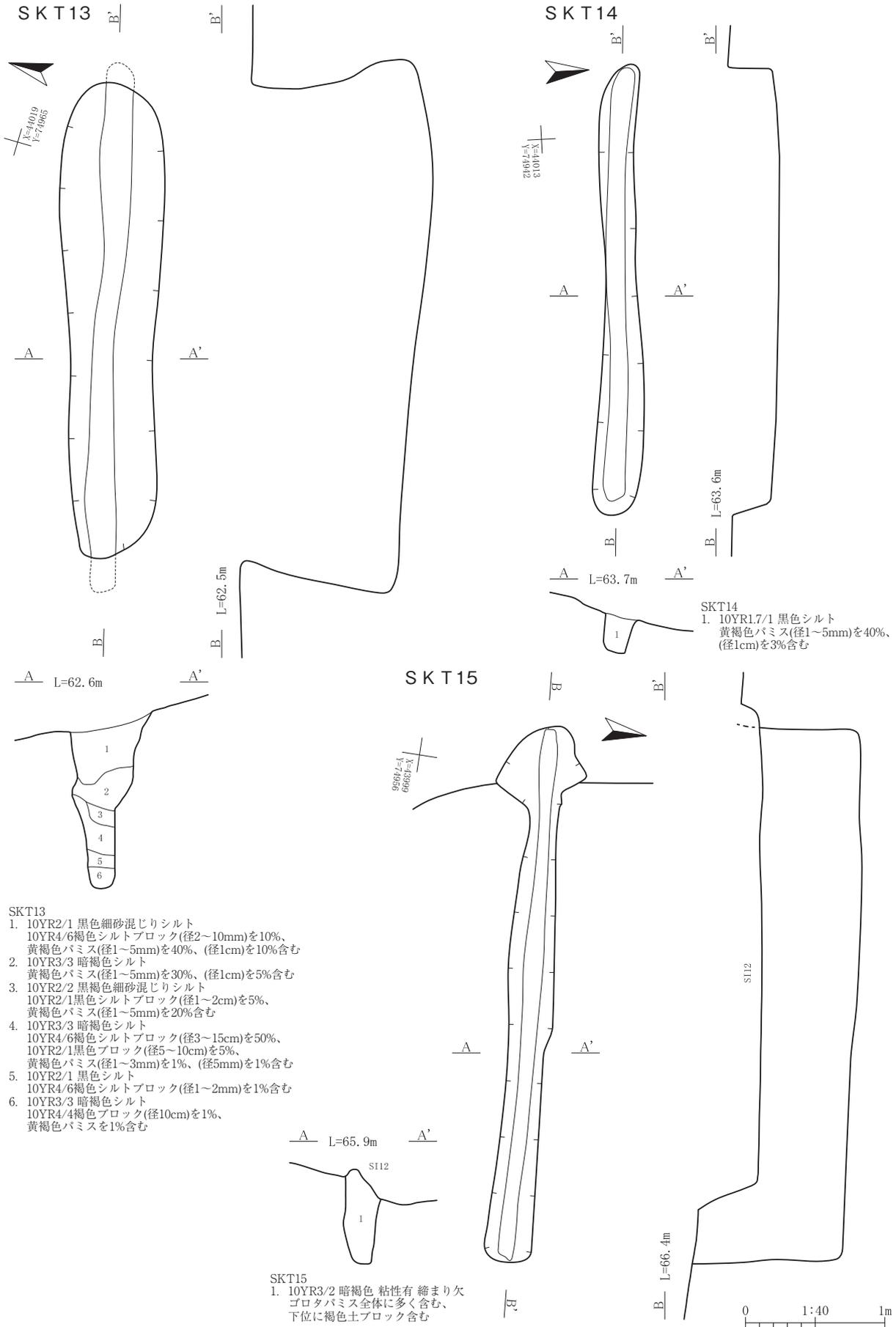
- 10YR2/1 黒色シルト 上~中位にかけて暗褐色シルトが混じる、  
黄褐色パミス(径1~2mm)を上~中位に20%含む
- 10YR4/3 におい黄褐色シルト 下位に10YR2/1黒色BL(径5cm)をわずか、  
黄褐色パミス(径1~5mm)を下位に集中して10%含む
- 10YR4/4 褐色シルト 黄褐色パミス(径1~2mm)を5%含む
- 10YR2/2 黒褐色シルト 下位に10YR4/6褐色BL(径1cm)をわずかに含む



第26図 SK38・39・42土坑、SK T10陥し穴



第27図 SKT11・12陥し穴



第28図 SKT13~15陥し穴

## V 出土遺物

3年にわたる調査で出土した遺物の総量は、大コンテナ(42×32×40cm)で13箱である。これらを土器、土製品、石器・石製品、銭貨に分類した。各種内訳は、土器が6箱、石器・石製品が7箱、土製品1点、銭貨9点である。ここではこれら種別ごとに報告する。なお、掲載・不掲載の取捨選択は調査年度ごとに各担当者が行い、分類・観察は編集者が行った。

### 1 土 器

今回の調査で出土した土器は、大コンテナで6箱で、このうち掲載したのは54点である。時期としては、縄文時代早期のものが多く、弥生時代後期の土器も数点確認できる。この他、S I 12から土師器が一括して出土している。

#### (1) 縄 文 土 器

出土土器の大半は縄文土器で、遺構内・外問わず出土している。これらを時期ごとに、①早期末葉、②前期初頭～前期前葉、③中期～後期に分類した。

<①早期末葉>出土数が最も多く、いずれの調査年度においても出土が認められる。土器型式上、a)赤御堂式、b)早稲田5類に比定されるもの、c)型式不明に細分類した。

[a]赤御堂式] 1・8～12・25・26・28・29・37～39・43～50。全体が復元できる資料は少ない。いずれも胎土に繊維を含み、尖底、表裏縄文といった要素を持つものをこれに分類した。1は口縁～底部(尖底部分はない)までが残る。口縁～胴部上半は異種原体の横回転施文による羽状縄文が構成される。胴部下半～底部には単軸絡条体第1類の縦回転が施文される。内面への施文は見られない。28も比較的に全容がわかる資料である。器高はあまり高くなく、比して口径は広い。器形から型式内でも中～新段階に位置付けられるものか。文様は合撚による異条縄文が施され、外・内面とも同種原体が使用されている。8～12・29・46・47・49・50は尖底または尖底と想定される胴部下半～底部の資料である。8は上部に向かって底部から鋭角的に立ち上がり、形状が砲弾型となる。古段階のものか。その他は底部付近と考えられるが、尖底部分はない。49・50は尖底部付近の屈曲部分が見られる。内面にも文様が施される表裏縄文となる資料は、12・25・26・28・29・38・39・45～50である。25・26は同一個体で、同種の単節縄文による回転方向を変えた非結束羽状縄文が施される。内面は羽状とはならない(破片のため確認できる範囲では)が、同種の単節縄文が見られる。28は上述のとおり。29・38・45・48は単節縄文で、内面も同種原体で施文される。47は合撚?の可能性はあるが、判然としない。内面は単節縄文としたが、同種の可能性もある。49は節の間隔が狭いことから0段が多条のLR縄文と判断したが、内面はRL縄文と異なる原体が使用されている。50もあまり判然としないが、外・内面で異なる原体の可能性はある。これらの他、尖底、表裏縄文ではないが、37は胎土・色調が似ることや文様からこれに含めた。折り返し口縁で、口唇上端から外面に節間の狭い前々段多条のLR縄文が横回転で施文される。43・44は同一個体で、RL縄文を横回転での施文後に、同一原体により横位・斜位に圧痕が施される。

[b)早稲田5類] 2・6・30・36・40～44。編年型式上、赤御堂式に後続し、底部が平底・小径と

されるが、全容が把握できる資料はなく、破片資料のみである。2は口縁上端に刻み状の刺突列、全体には斜位方向に単軸絡条体第1類が回転施文される。6は原体に縄の束を用いた綾杉状縄文で、口縁部上部は縦回転、下位は横回転施文となる。30・41・42(41・42は同一個体)は1段の縄LとRをR撚りにて2段とした合撚で、異条縄文が見られる。36は口縁～胴部の一部が残存する資料で、単軸絡条体第1類による横回転・縦～斜回転により文様が構成される。40は節間の狭い前々段多条縄文が横走・斜走する。43・44は同一個体で、RL縄文を横回転での施文後に、同一原体により横位・斜位に圧痕が施される。胎土の繊維混入は大半の資料に認められるが、量はあまり多くない。6・40・41・42には繊維混入は見られず、焼成の良い密な胎土である。

[c)型式不明] 3・7・13・27。該当する型式の判断が付かなかったものをまとめた。おそらく当該期に納まるものと考えられるが、3・13については前期前葉までと幅を持たせた。3は口唇上端に刻み、口縁上端には単節縄文圧痕が施され、全体は同一原体による横回転施文が見られる。7は口縁部が外反し、横回転による単節縄文が施文される。13は口縁部上端に1条の単節縄文圧痕、同一原体による横回転施文がされる。27は単軸絡条体第1類が施される。胎土に繊維の混入は7・27に少量見られる。

<②前期初頭～前葉> 4・35・51。4は前々段多条の単節縄文横回転施文である。胎土は密で前項の早期末葉のものよりしっかりした感じがある。繊維の混入は認められない。前葉のものか。35は口縁～胴部下半が残る。口縁上部には結節縄文、全体は末端環付の単節縄文が見られる。胎土には繊維が微量混入する。大木1式期の可能性が考えられる。51は尖底土器である。胎土に繊維を多く含み、地文は不明だが、尖底の形状から前期初頭の表館式の可能性がある。

<③中期～後期> 出土数も少ないことから標記の幅広い範囲として設定した。5・31・32・52～54が該当。中期の可能性のある資料は、32・52～54(53・54は同一個体)である。32・53・54は単節縄文の縦回転による施文が見られる。52は押引の刺突列で、前期後葉～中期前半辺りか。5・31は沈線による文様が見られる。5は曲線文に充填縄文、31は屈曲文?が施される。後期前葉の十腰内I式相当と捉えた。

## (2) 弥生土器

平成26年度調査のSD01より2点出土している(33・34)。遺構との関連は不明である。33は平行沈線間に交互刺突文が施され、地文は単節縄文の横回転である。34は口縁部上端はミガキ無文帯となり、これより下位には斜回転の単節縄文が施される(付加条の可能性もある)。両者とも縄文原体の節は小さく、非常に精緻な作りで、前述の縄文土器とは明らかに異なる。後期の赤穴式に比定されるものと考えられる。

## (3) 土師器

平成29年度調査のSI12より一括出土している。掲載したのは残存状態の良い11点(14～24)である。いずれも非ロクロ成形によるもので、14～22は甕、23は鉢、24は椀で、坏は出土していない。14は上部は頸部から屈曲して開き、底部には突き出しが認められる。口縁部はヨコナデ、胴部上半はハケメ、下半はミガキが見られるが、あまり明確ではない。内面はハケメによる調整。15は口縁上端でわずかに外反するが、胴部は直線的で、底部は外側にやや突き出す。全体的にやや歪みが認められる。調整

## 1 土器

は口縁部ヨコナデ、胴部ミガキ、底部付近にはヘラナデが見られる。内面は上部にヘラナデ、全体にはミガキ、一部にヘラナデで調整される。16は口縁部は外反し、胴部下半がやや膨らむ。口縁部付近ヨコナデ後に全体に縦位のミガキが行われている。あまり判然としないが、底部に一部ハケメも見られる。内面調整はハケメのみ。17は頸部から口縁部にかけて外反し、胴部は中央が膨らむ。18は球胴甕である。調整は口縁～頸部にかけてヨコナデ、胴部全体は縦方向のヘラナデが見られる。内面は口縁部付近はヨコナデ、全体はハケメ調整がされる。19・20は口縁部片、21・22は胴部片で、いずれも長胴甕の一部と思われるものである。19は口縁部ヨコナデ、胴部はミガキと捉えたが、あまり判然としない。内面はハケメ、ミガキが見られる。20は全体にミガキ、内面はハケメ調整である。21は全体にミガキだが、頸部付近にはヘラナデが見られ、内面は水平方向へのケズリ調整が行われる。23は下半部の一部がケズリ、他は内外面ともヘラナデが見られる。24は内外面ともヘラナデのみの調整である。

## 2 土製品

S I 12出土の土製紡錘車1点(55)のみである。上面・下面は径が異なり、断面は台形状をする。中心の貫通孔は径8～9mmである。表面には成形時の指頭痕が残る。

## 3 石器・石製品

3箇年にわたる調査で出土した石器・石製品は、大コンテナで7箱である。このうち、掲載したのは101点である。器種は、石鏃・尖頭器・石錐・石匙・スクレイパー類・石斧・敲磨器類・台石・石製品が確認された。掲載基準としては、剥片石器類・石製品は原則全点掲載とし、礫石器類については、主に遺構内出土のものは全点掲載としたが、遺構外出土のものについては掲載に至らなかったものもある。特に敲磨器類としたものが多いが、これらには自然石との判別が付かないものが含まれており、明らかな人為痕跡が認められるものを掲載対象とした。以下、器種ごとに概観する。

<石鏃>35点(57・60～62・68～70・78～80・89～96・106・107・109～115・128～135)を掲載した。茎の有無により、有茎鏃、無茎鏃、基部欠損により判別不明のものに大別した。有茎鏃は78・111の2点のみである。無茎鏃は27点で、基部の形状から平基・凸基・円基などに分類できる。詳細は観察表に記した。大半が無茎平基鏃で、16点が該当する。全体的な傾向としては、三角形をするものは少なく、長さが最大幅の3～4倍で、最大幅が中央にあるものが多い。石質は頁岩または珪質頁岩のみである。

<尖頭器>136の1点を掲載した。石鏃より大振り、長身のため尖頭器と捉えた。基部形状から無茎平基に分類できる。

<石錐>97の1点のみである。先端部が欠損する。石鏃とも考えたが、左右非対称なことから石錐とした。

<石匙>撮み部を有し、定形的な形状をするものをこれに含めた。11点を掲載した。撮み部を上部に

した場合、身部が①縦長になるもの、②横長になるもの、③斜めになるもの、に分類できる。①に該当するのは58・71・102・116・137の5点、②は59・140・141の3点、③は72・138・139の3点である。102は撮み部が見られるため、ここに分類したが、用途としては石鎌や尖頭器に近いのかもしれない。140は②に分類したが、刃部が歪な曲線をする。石質は102のみ黒曜石、他は頁岩または珪質頁岩である。

<スクレイパー類>上記の定形的な剥片石器類に該当しないが、いずれかに刃部を持つものを一括した。いわゆる削搔器や不定形石器もこれに含めた。23点(73・74・81・82・98～101・103・108・117～120・142～150)を掲載した。石質は146のみホルンフェルス、他は頁岩・珪質頁岩である。

<石斧>5点(63・64・75・83・84)を掲載した。いずれも礫の縁辺に刃部を作出した打製石斧である。石質は84のみ斑レイ岩。その他はヒン岩が使用されている。

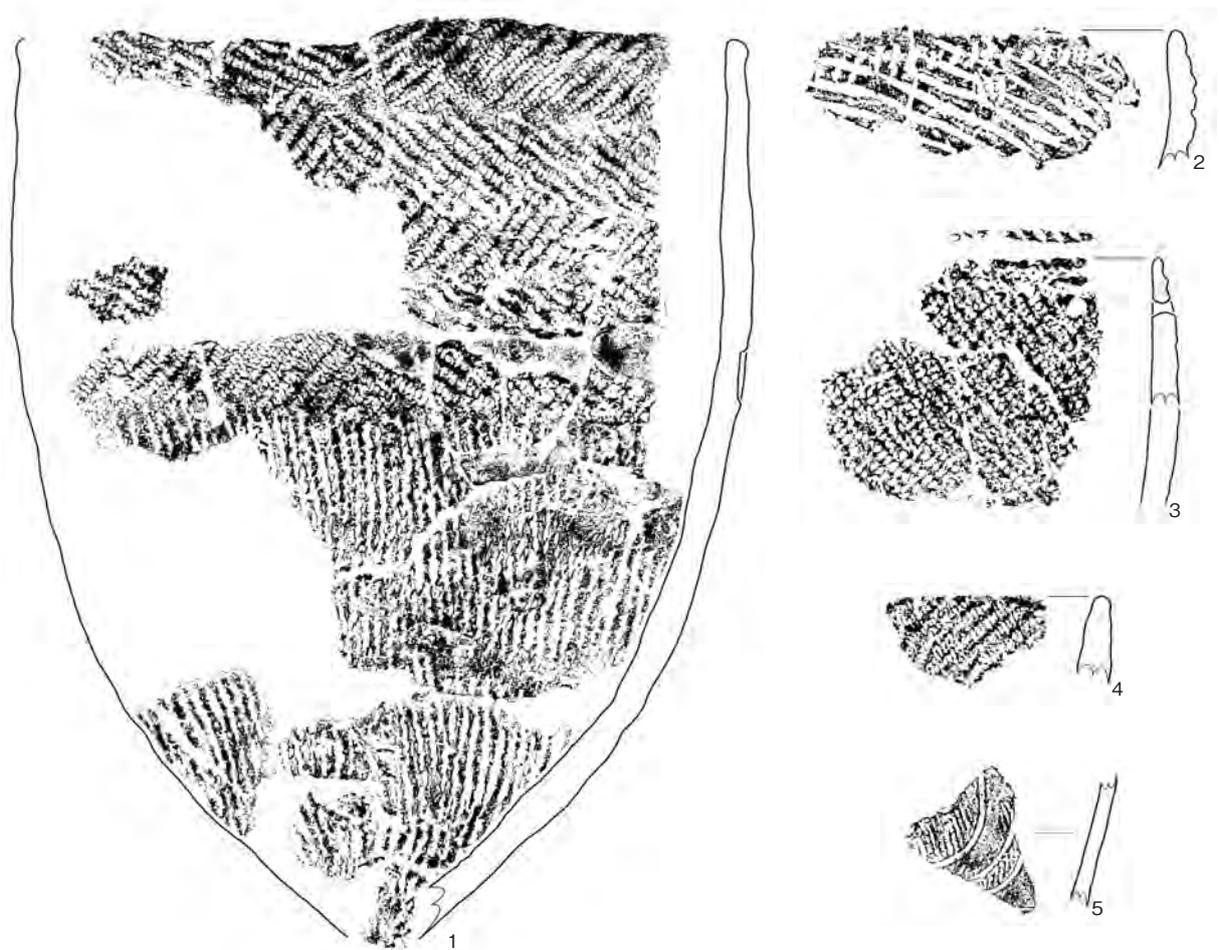
<敲磨器>22点(65～67・76・77・85～87・104・105・121～126・151～156)を掲載した。礫に敲打痕や磨り痕が見られるものを一括した。①敲打痕・磨り痕が見られるもの、②敲打痕が見られるもの、③磨り痕が見られるもの、に分類できる。①に該当するのは、65・121～123の4点、②は76・85・104・124～126・151～155の11点、③は66・67・77・86・87・105・156の7点である。87・105・121・122?・156については、円礫の幅の狭い側面に磨り痕が見られることから、特殊磨石にも該当する。

<台石>表面に使用痕が認められる扁平部分をもつ礫を分類した。56・88の2点を掲載した。88は表面にわずかに被熱痕跡を残し、扁平部分がやや窪むものである。石皿に近い用途かもしれない。

<石製品>127の1点を掲載した。円形のスクレイパーとも考えたが、縁辺の剥離角度が鈍いことから、円盤状に成形した円盤状石製品と捉えた。

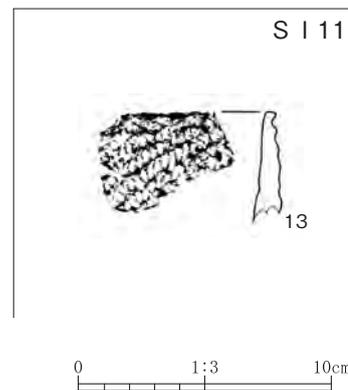
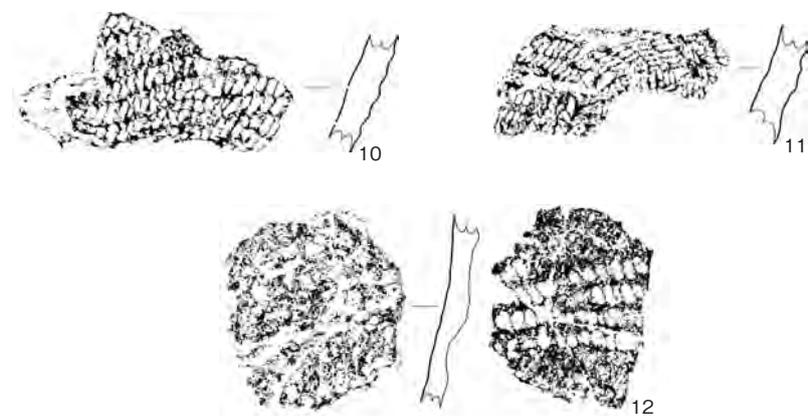
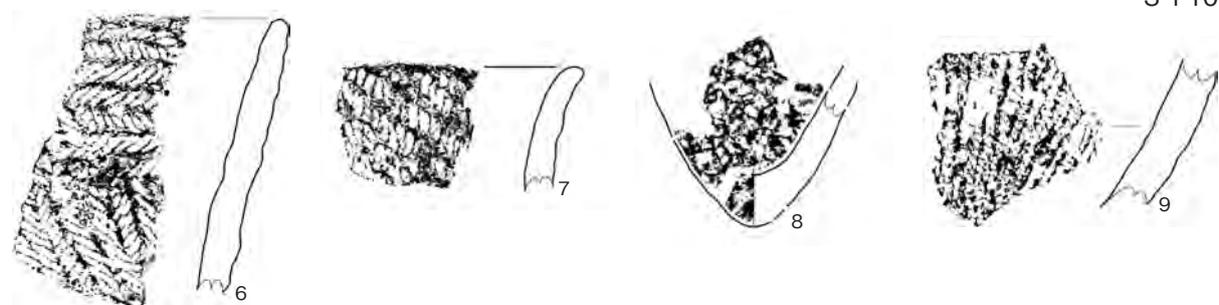
#### 4 銭 貨

S D01より9点が出土し、状態の良い1点(157)を掲載した。いずれも銅製の寛永通宝と思われる。字体から新寛永に分類されるものであると判断した。掲載のものは、背面に「文」字が鋳出されたいわゆる「文銭」で、初鋳年は1868(寛文8)年とされる。



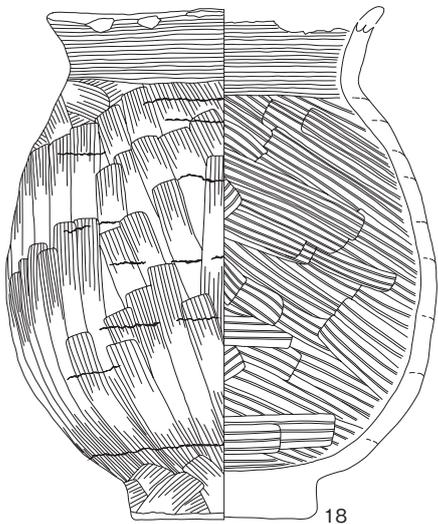
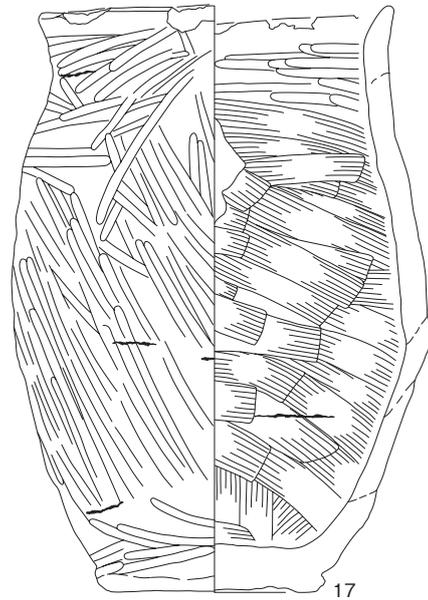
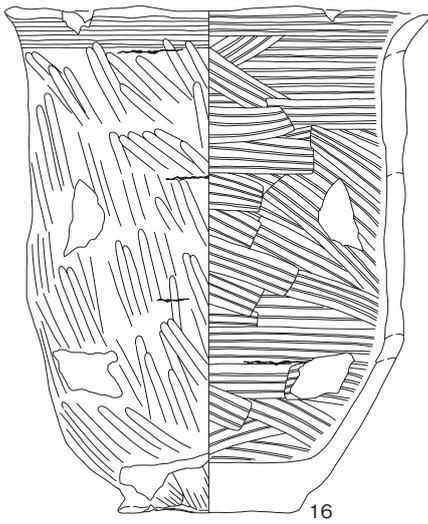
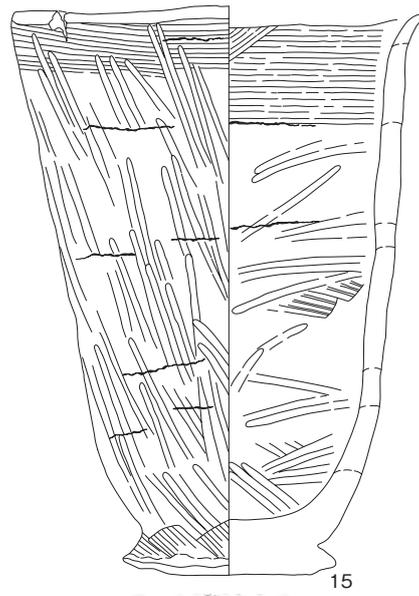
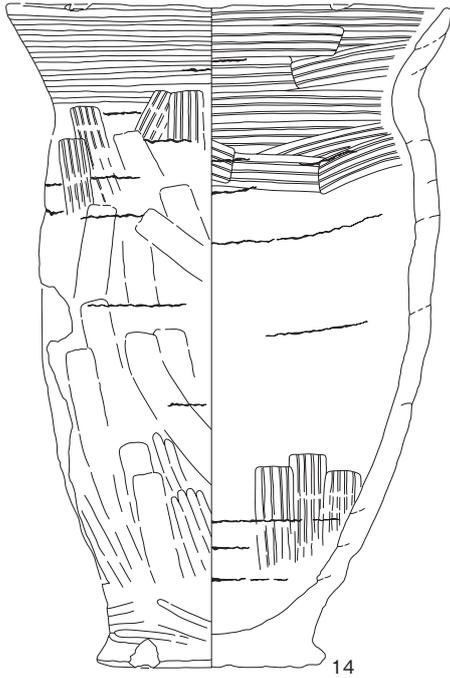
S I 07

S I 10



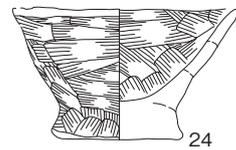
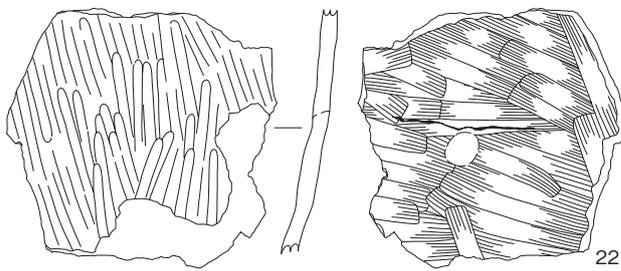
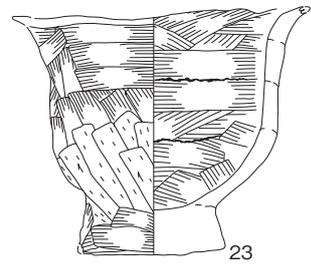
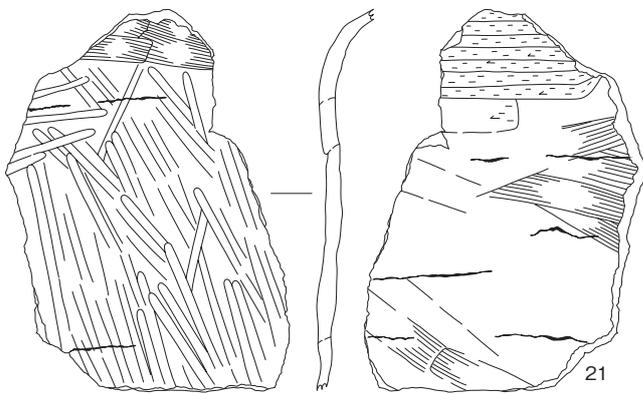
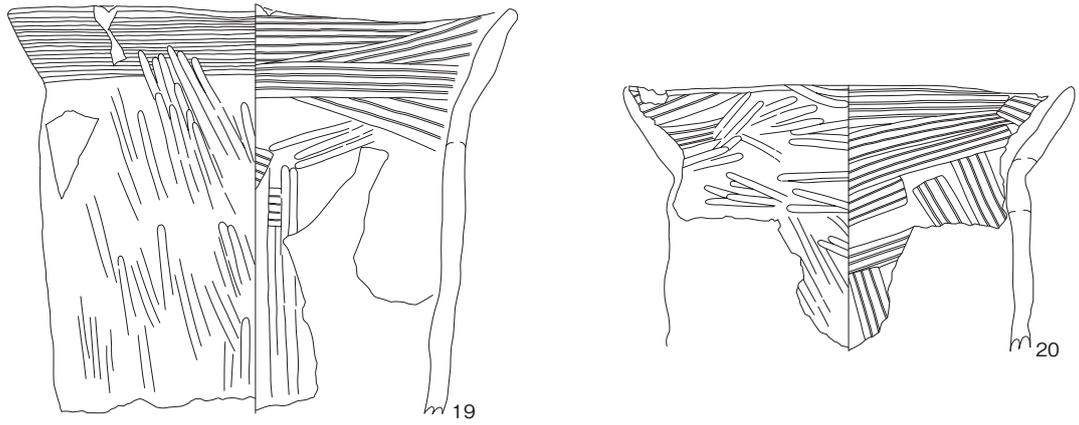
S I 11

第29図 土器 1 (S I 07・10・11)

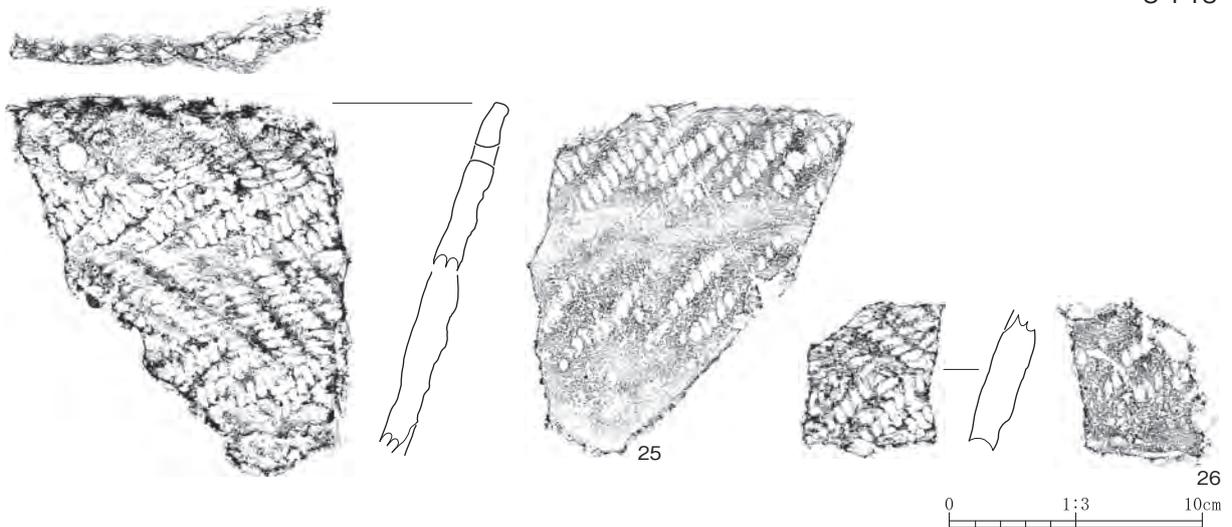


0 1:3 10cm

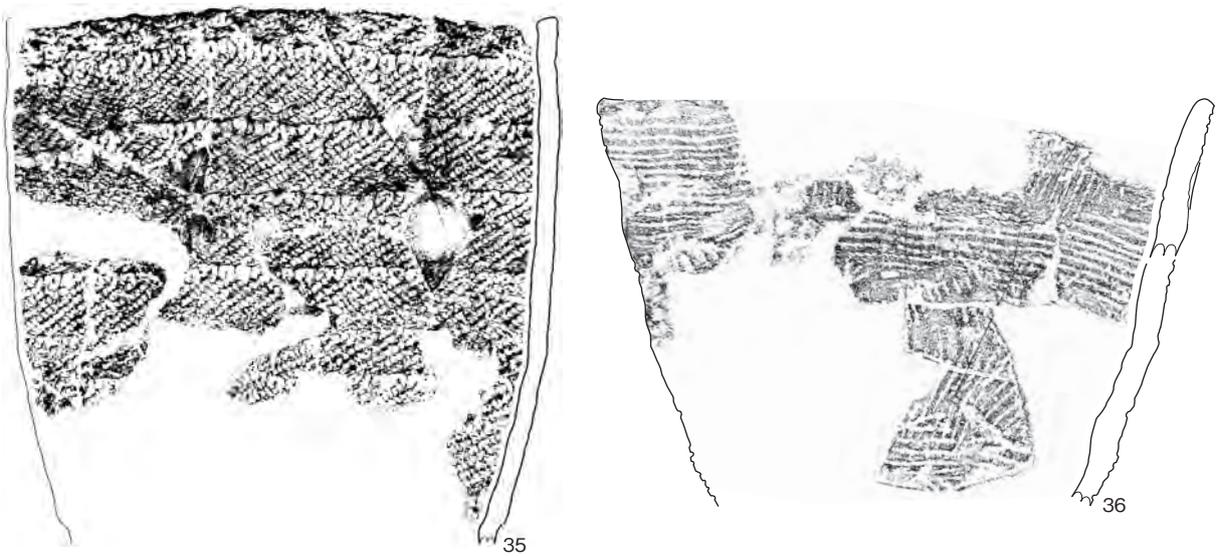
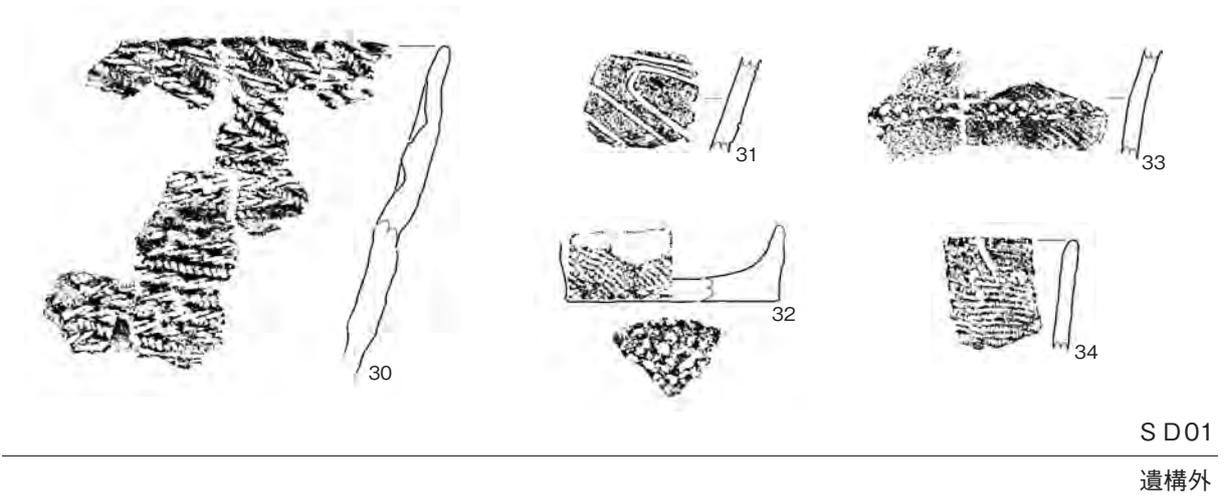
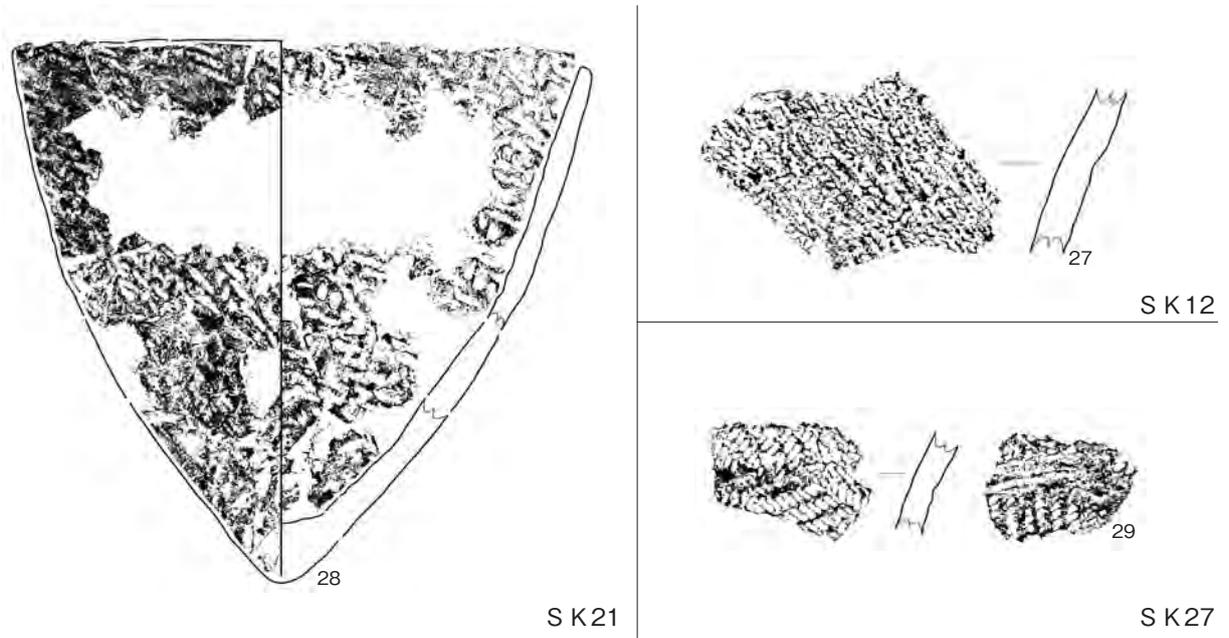
第30図 土器2(S I 12)



S I 12  
S I 13

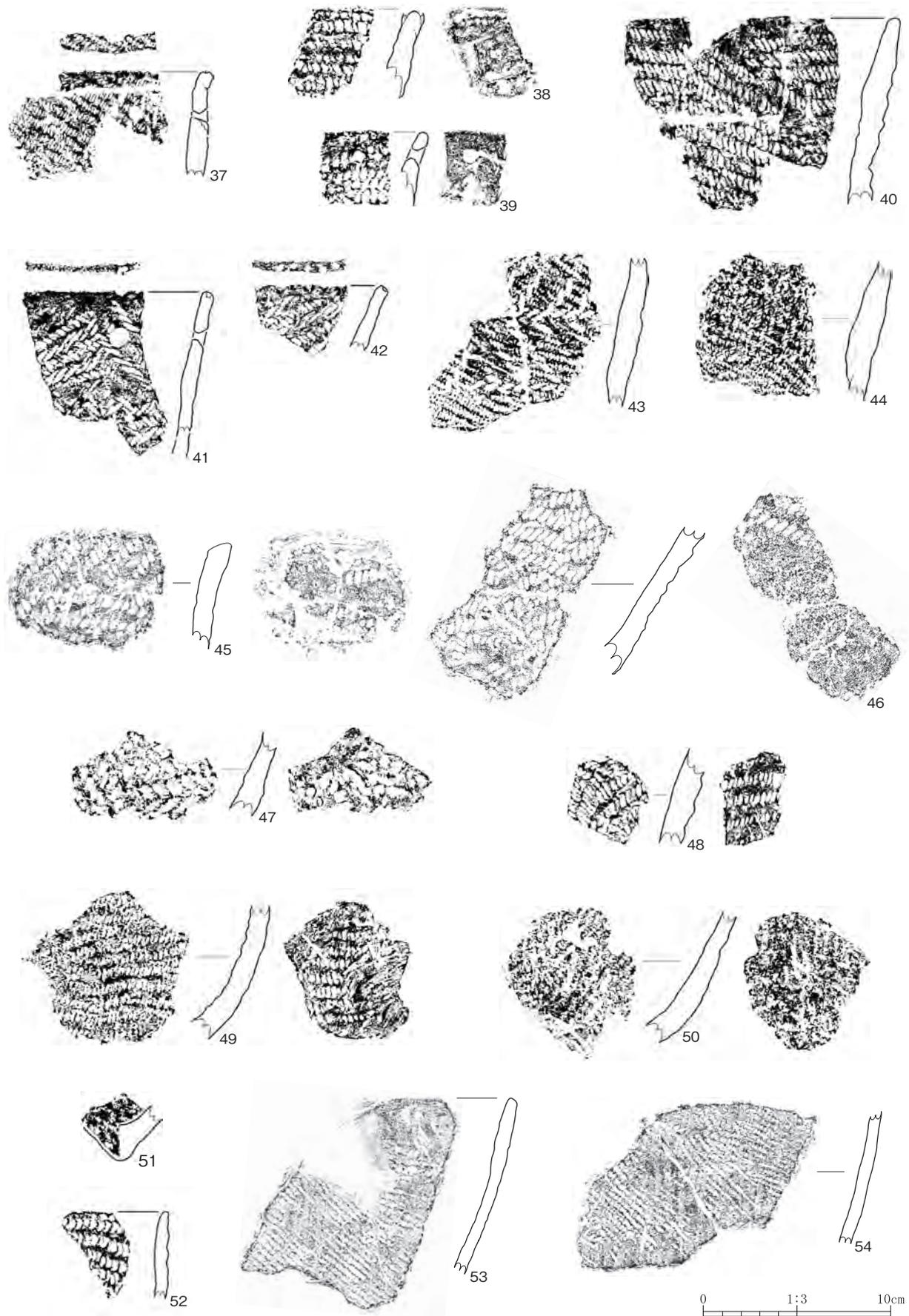


第31図 土器3 (S I 12・13)

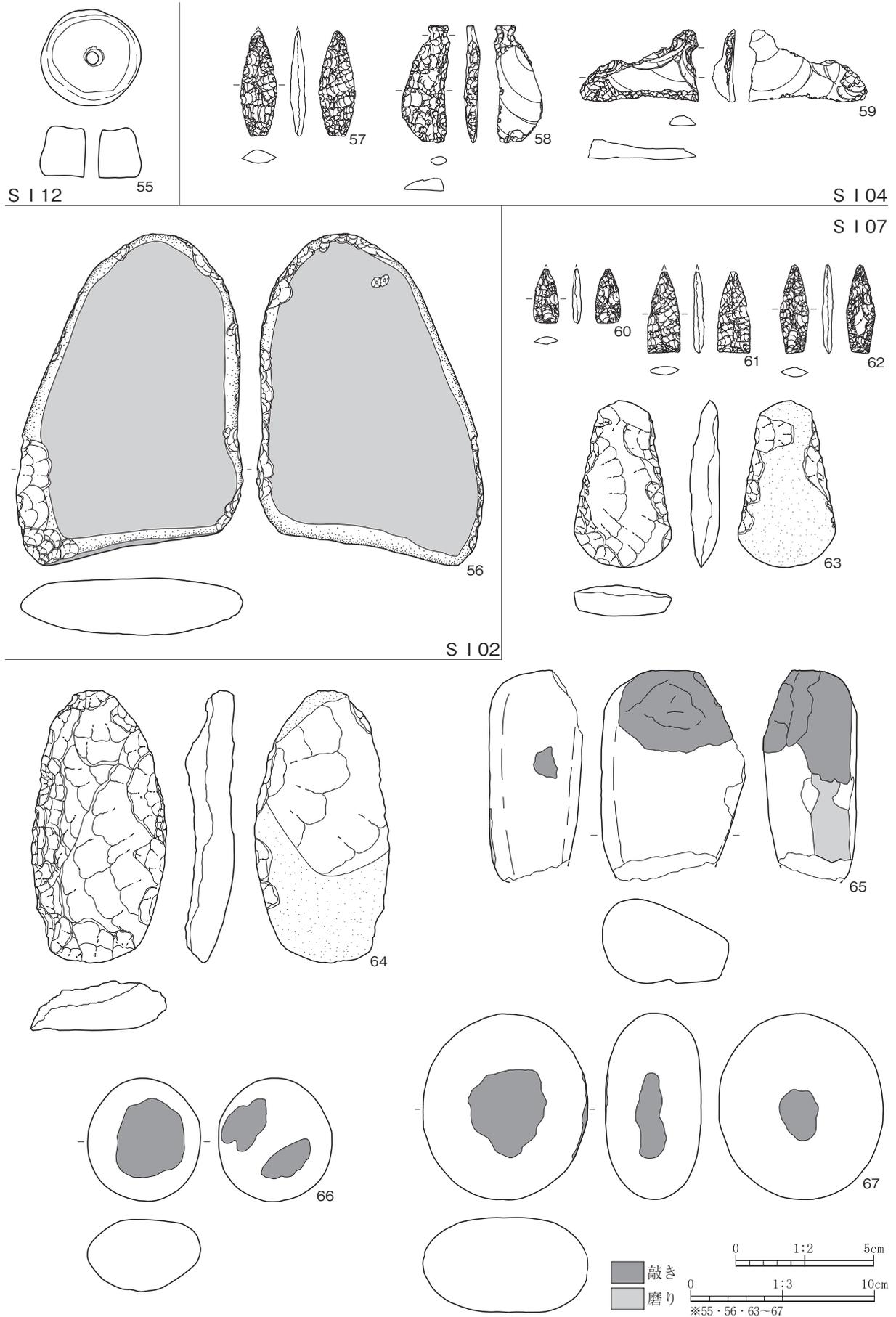


0 1:3 10cm

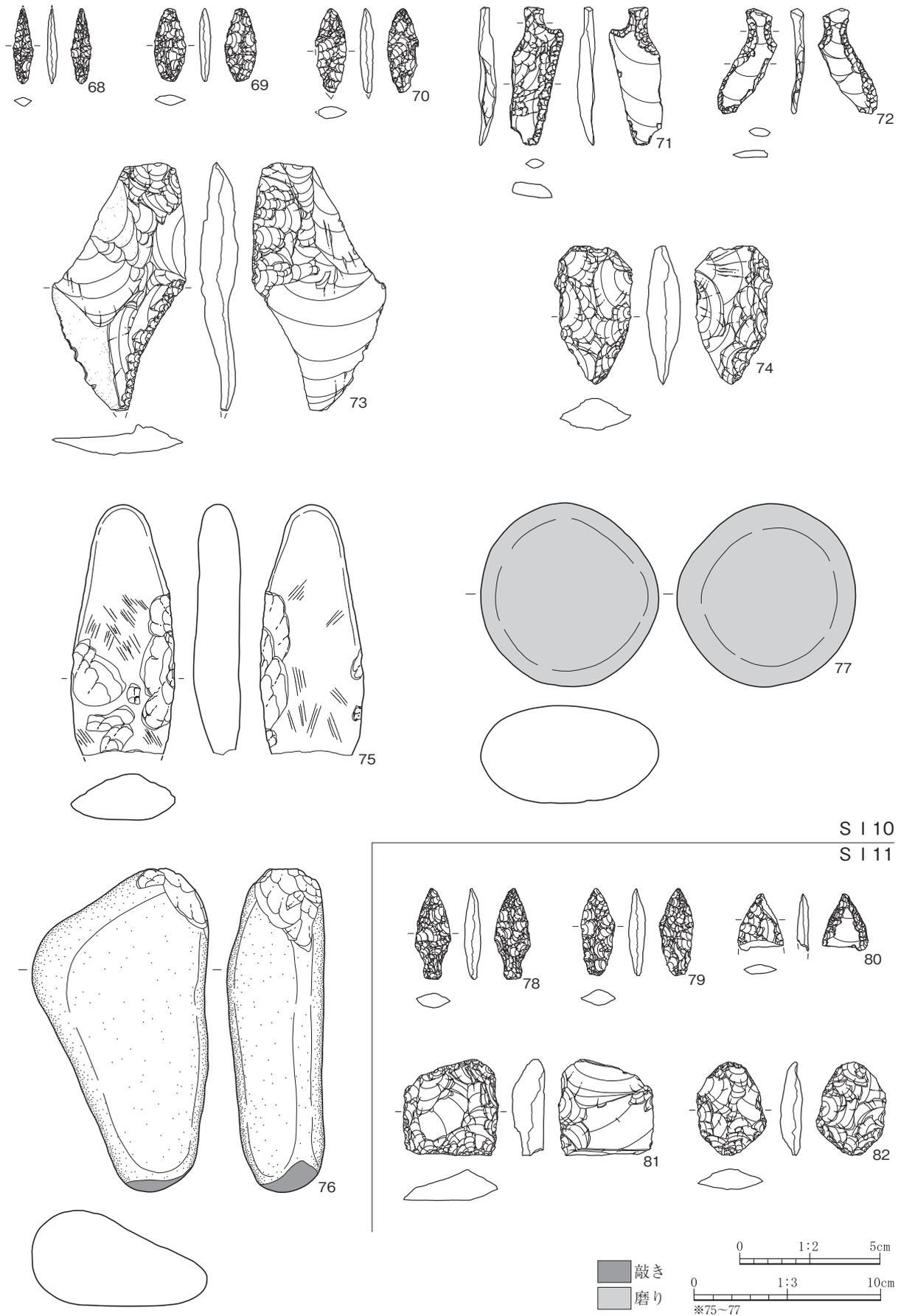
第32図 土器4 (S K 12・21・27、S D 01、遺構外)



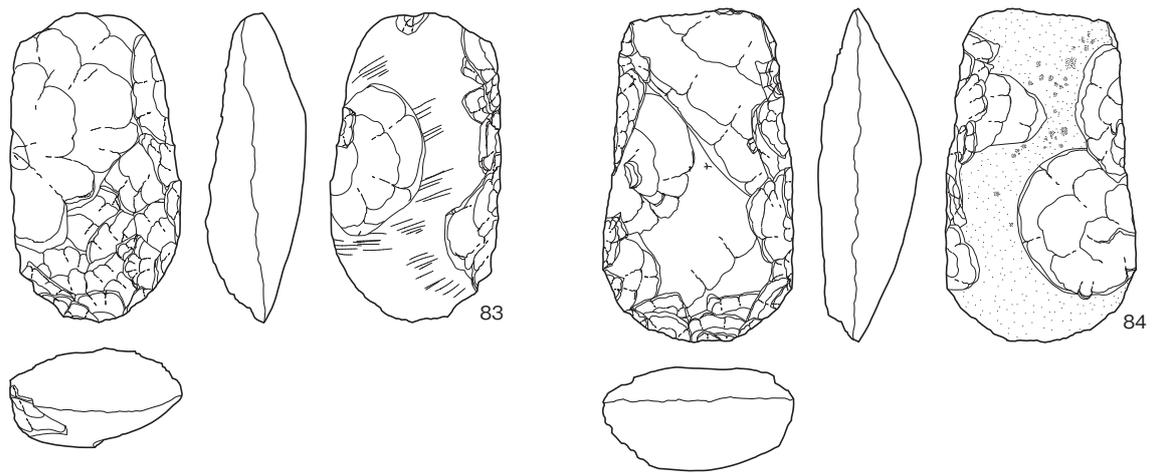
第33図 土器5 (遺構外)



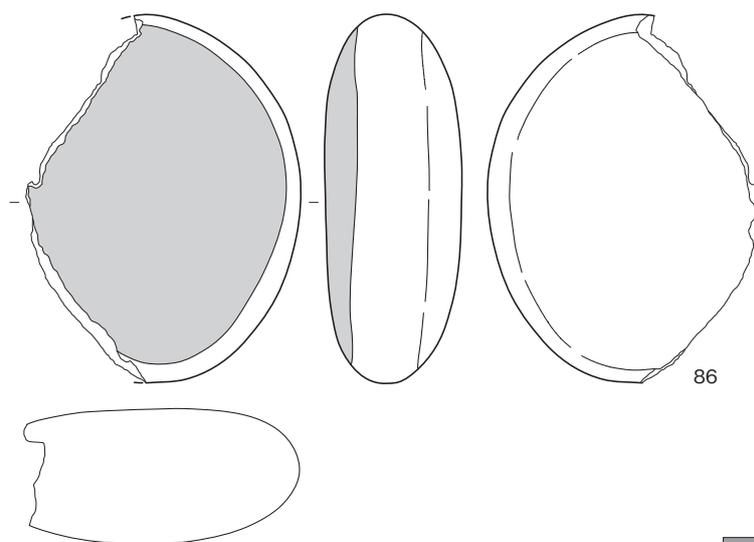
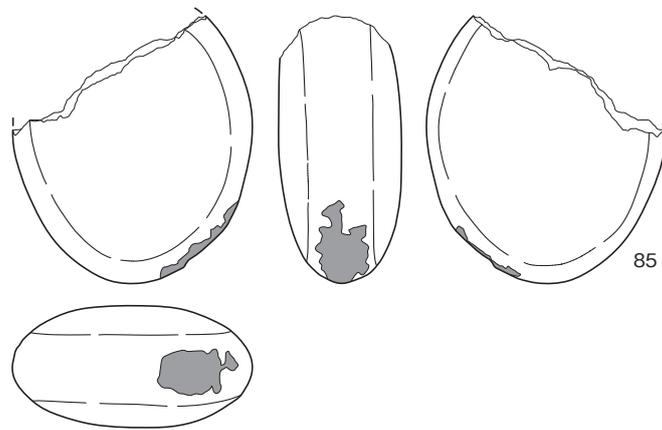
第34図 土製品(S I 12)、石器・石製品1(S I 02・04・07)



第35図 石器・石製品2 (S I 10・11)

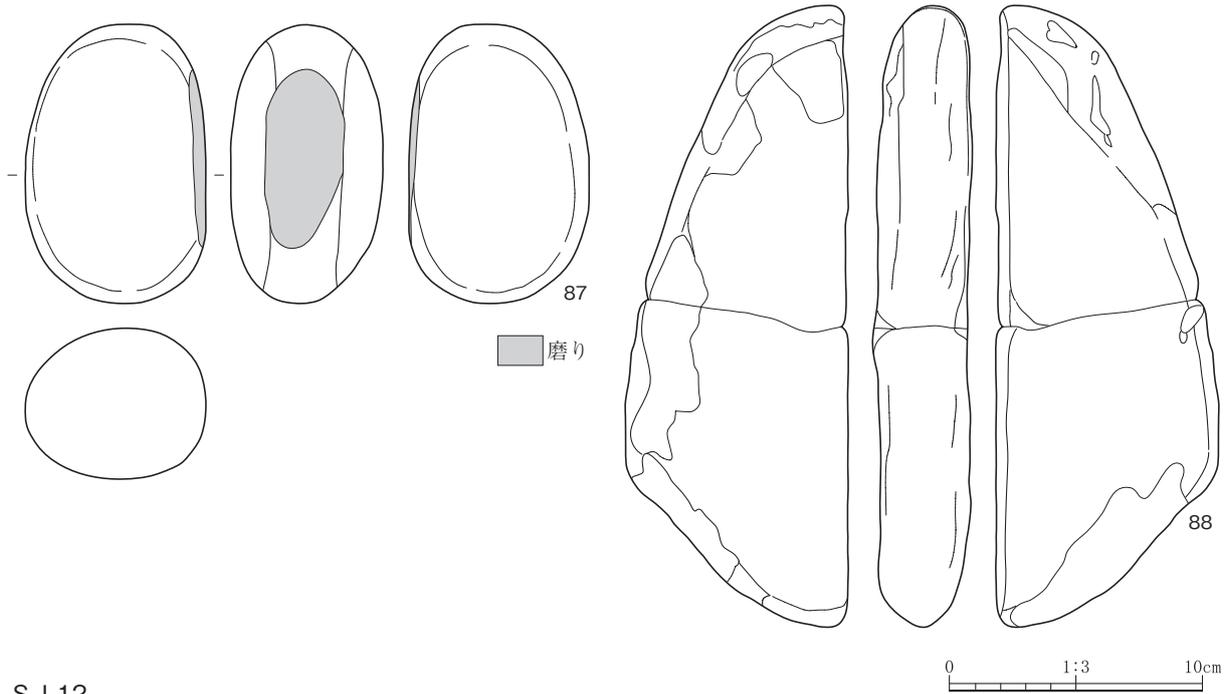


S I 11  
S I 12



第36図 石器・石製品3 (S I 11・12)

3 石器・石製品

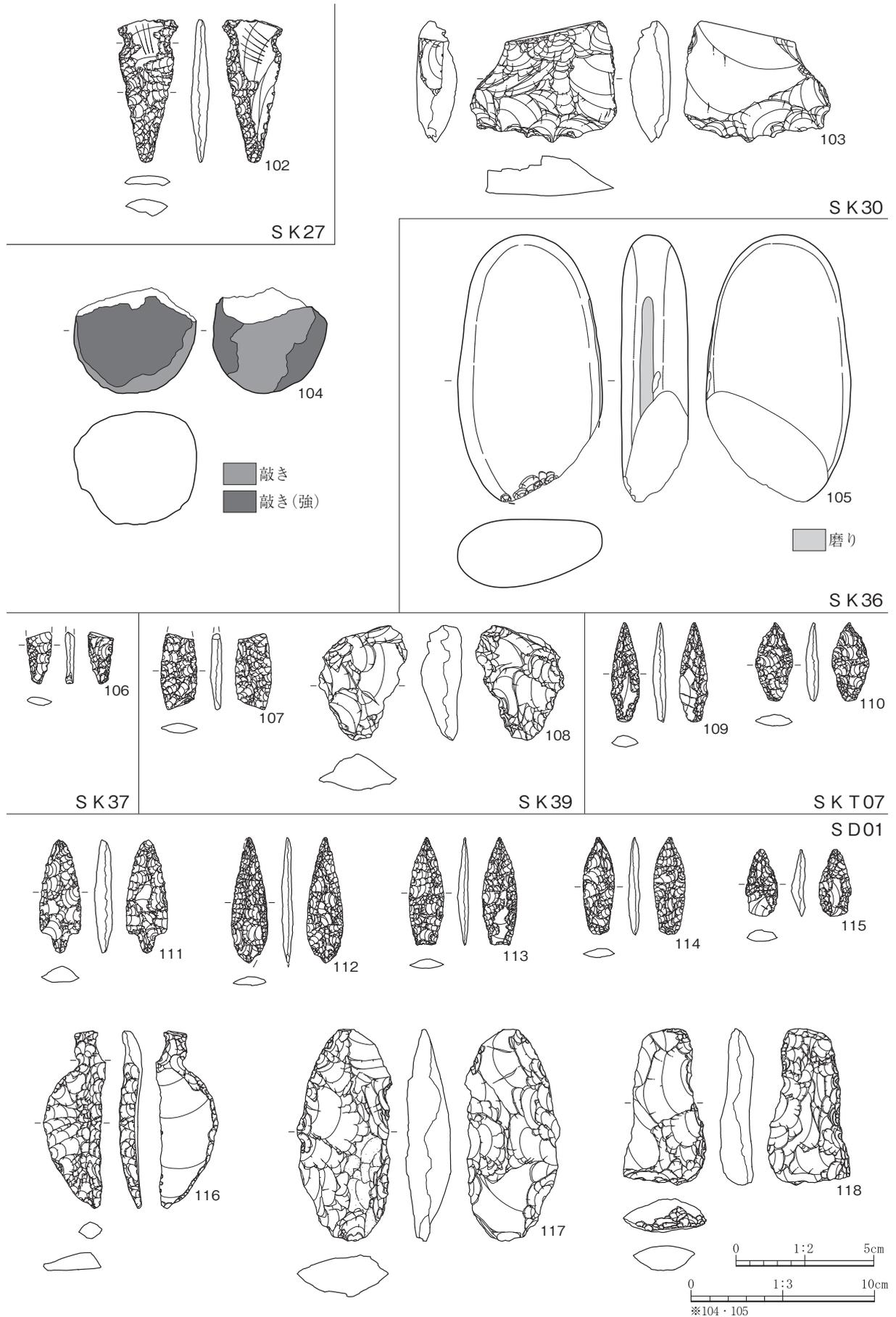


S I 12

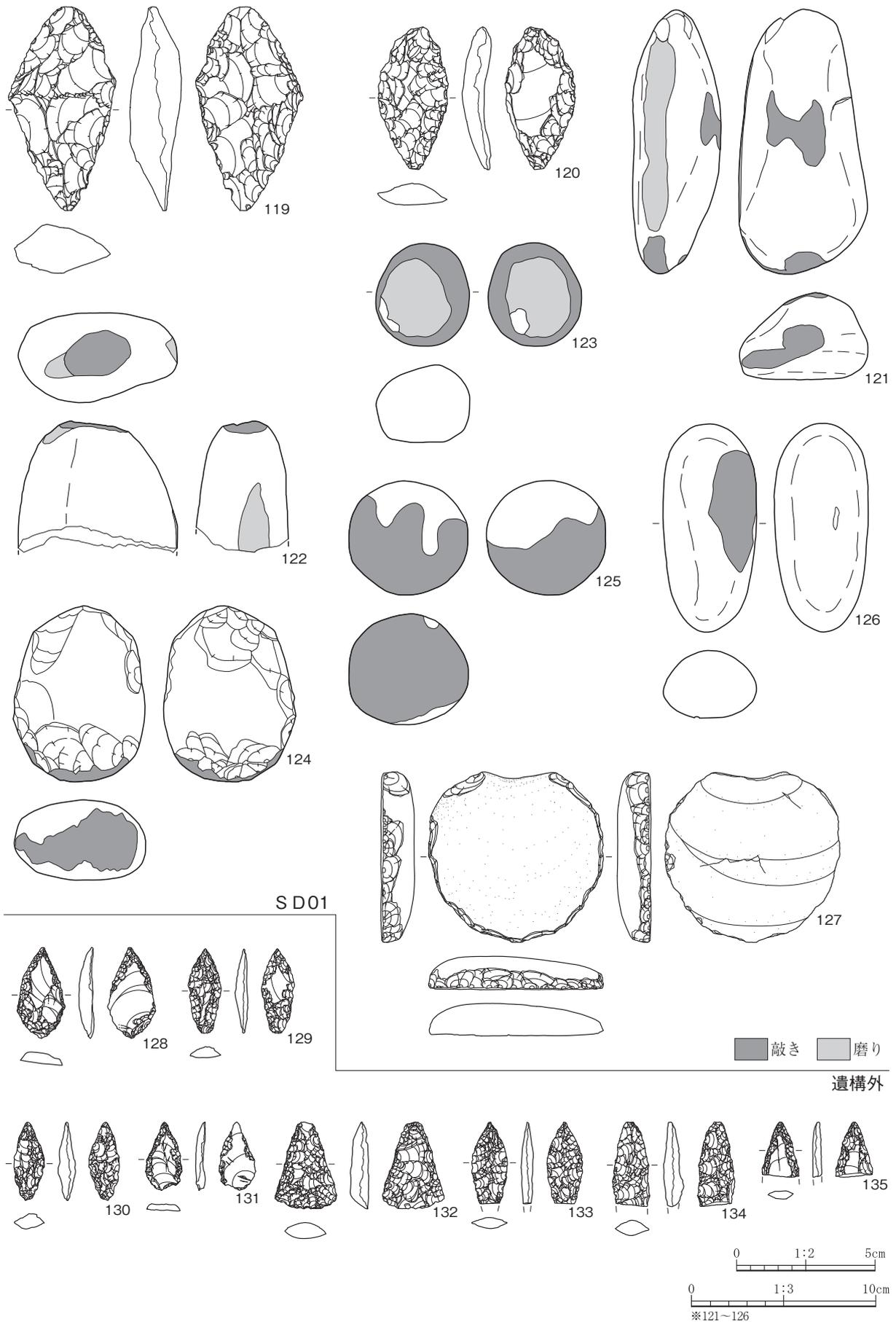
S I 13



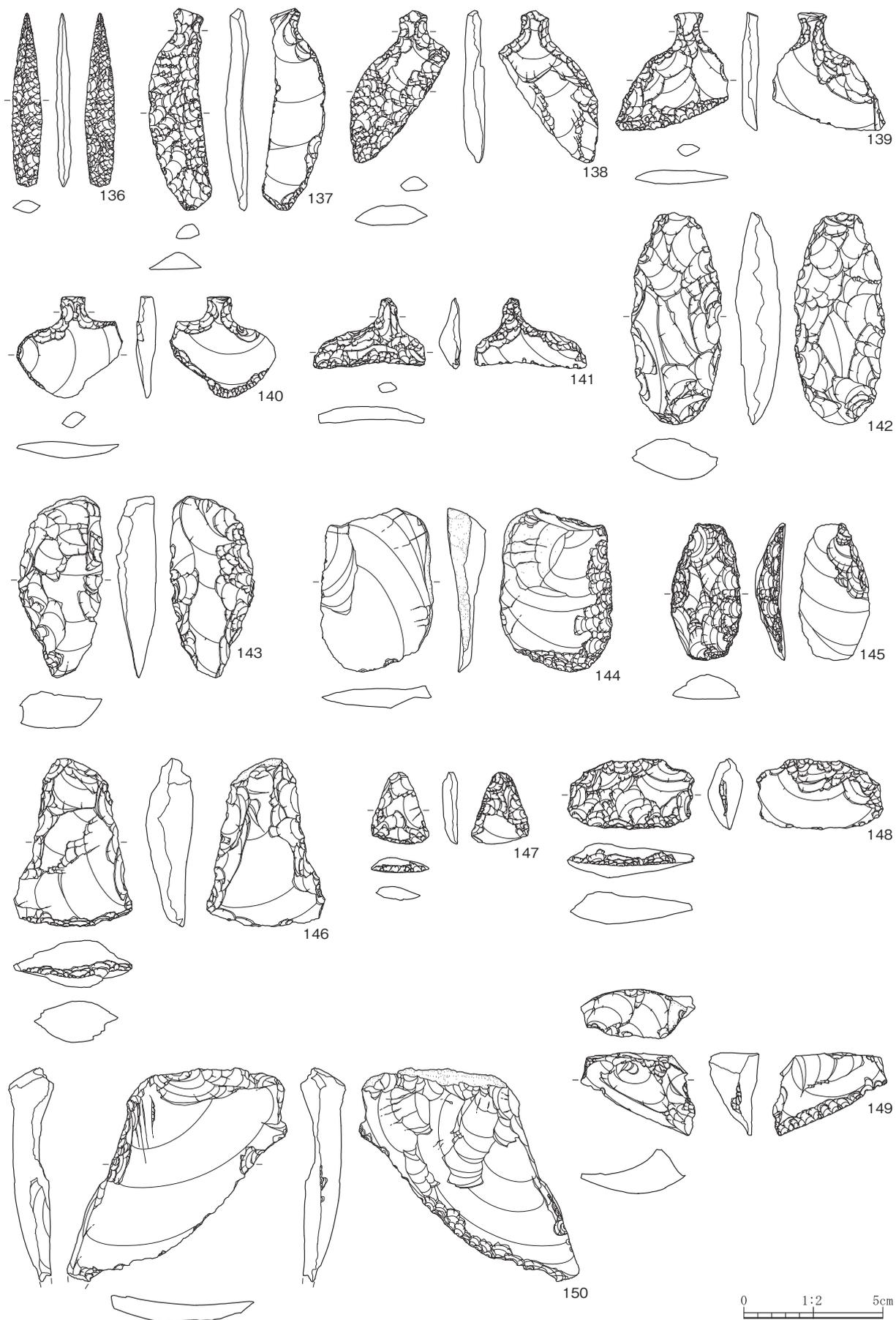
第37図 石器・石製品4 (S I 12・13)



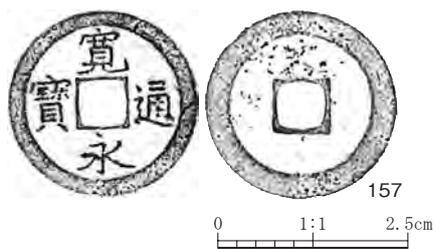
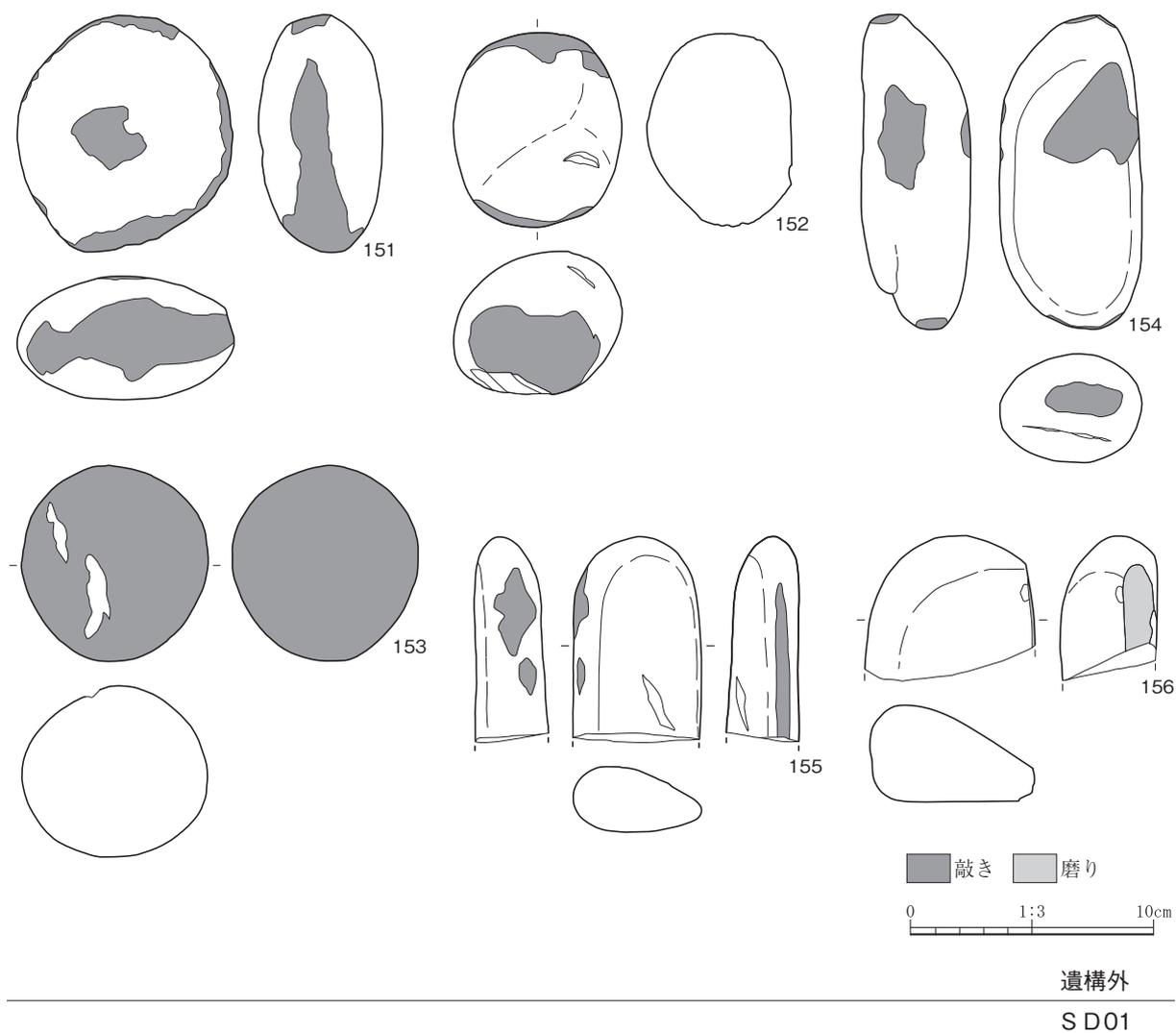
第38図 石器・石製品5 (S K27・30・36・37・39、S K T07、S D01)



第39図 石器・石製品6 (S D 01、遺構外)



第40図 石器・石製品7 (遺構外)



第41図 石器・石製品8 (遺構外)、銭貨(SD01)

第3表 土器観察表

No.	出土地点・層位	調査年度	器種	部位	時期・型式	外面	内面	備考
1	SI07 床面直上	26	深鉢	口縁～胴部	早期末・赤御堂	非結束羽状(LR+RL横)、単軸絡糸体1類L縦	指頭による調整	尖底、繊維
2	SI07 埋土上位	26	深鉢	口縁部	早期末・早稲田5?	キザミ状刺突、単軸絡糸体1類L斜		繊維少量
3	SI07 床面直上	26	深鉢	口縁～胴部	早期末～前期前葉	口唇キザミ、RL圧痕横、RL横		補修孔
4	SI07 埋土上位	26	深鉢	口縁部	前期前葉	前々段多条LR横		
5	SI07 埋土上位	26	深鉢	胴部	後期前葉・十腰内I	曲線文(沈線、LR充填)	ナデ	
6	SI10 埋土中	27	深鉢	口縁～胴部	早期末・早稲田5	綾杉状(縄の束LR+RL×2)横・縦		胎土に細石含む
7	SI10 埋土	27	深鉢	口縁部	早期末	RL横	煤付着	繊維微量
8	SI10 埋土下位	27	深鉢	底部	早期末・赤御堂	R(L+R)合燃?はつきりしない		尖底、繊維多い
9	SI10 炉直上	27	深鉢	胴部	早期末・赤御堂	単軸絡糸体1類R縦		尖底、繊維微量
10	SI10 埋土下位	27	深鉢	胴部	早期末・赤御堂	LR斜?施文深い		尖底?、繊維少量
11	SI10 埋土中	27	深鉢	胴部	早期末・赤御堂	前々段多条LR?多方向		尖底、繊維少量
12	SI10 埋土中	27	深鉢	胴部	早期末・赤御堂	摩滅著しい、不明	RL斜	表裏縄文、尖底?、繊維微量
13	SI11 埋土下位	27	深鉢	口縁部	早期末～前期前葉	LR圧痕、LR横		
14	SI12 RP6・8、カマド～煙道、北西・南埋土	29	土師器・甕	ほぼ完形		ヨコナデ、ヘラナデ、一部ミガキ	ヘラナデ	
15	SI12 RP2	29	土師器・甕	完形		ヨコナデ、ミガキ、一部ヘラナデ	ヘラナデ、ハケメ→ミガキ	底部木葉痕
16	SI12 RP5・6・15、南埋土	29	土師器・甕	ほぼ完形		ヨコナデ、ミガキ	ハケメ	
17	SI12 RP1	29	土師器・甕	ほぼ完形		ミガキ	ミガキ、ヘラナデ	
18	SI12 RP14	29	土師器・甕	ほぼ完形		ヨコナデ、ヘラナデ	ヨコナデ、ハケメ	
19	SI12 RP10・11・12・16・17、北東・南西埋土	29	土師器・甕	口縁～胴部		ヨコナデ、ミガキ(不明瞭)	ハケメ、一部ミガキ	
20	SI12 RP7、南東埋土、北東埋土上位	29	土師器・甕	口縁～胴部		ミガキ(不明瞭)	ハケメ	
21	SI12 カマド内	29	土師器・甕	胴部		ヘラナデ、ミガキ	ケズリ、ヘラナデ	
22	SI12 RP9	29	土師器・甕	胴部		ミガキ	ヘラナデ、指頭痕	
23	SI12 RP3	29	土師器・鉢	ほぼ完形		ヘラナデ、一部ケズリ	ヘラナデ	
24	SI12 RP7	29	土師器・椀	ほぼ完形		ヘラナデ	ヘラナデ	
25	SI13 RP1 床面	29	深鉢	口縁～胴部	早期末・赤御堂	口唇縄文圧痕?(不明瞭)、非結束羽状(LR縦+横)	LR横	表裏縄文、補修孔、繊維微量、26と同一個体
26	SI13 北西埋土下部	29	深鉢	胴部	早期末・赤御堂	非結束羽状(LR縦+横)	LR横	表裏縄文、繊維微量、25と同一個体
27	SK12 埋土中	26	深鉢	胴部	早期末	単軸絡糸体1類R縦～斜	ナデ	繊維少量
28	SK21 埋土下位	26	深鉢	口縁～底部	早期末・赤御堂	R(L+R)合燃横	R(L+R)合燃横、上部ナデ	表裏縄文、尖底、繊維少量
29	SK27 埋土中	27	深鉢	胴部	早期末・赤御堂	RL多方向	RL斜	表裏縄文、尖底?
30	SD01(B区)埋土中	26	深鉢	口縁～胴部	早期末・早稲田5?	R(L+R)合燃横～斜	指頭による調整	繊維少量
31	SD01(B区)埋土中	26	深鉢	胴部	後期前葉・十腰内I	沈線(屈曲文)	ナデ	
32	SD01(B区)埋土中	26	深鉢	底部	中期?	LR縦		底部網代痕
33	SD01(B区)埋土中	26	深鉢	胴部	弥生後期・赤穴	交互刺突文+沈線、RL横	ナデ	
34	SD01(F区)埋土中	26	深鉢	口縁部	弥生後期・赤穴	上端ミガキ、LR斜	ミガキ	
35	I A 15 h 検出面	27	深鉢	口縁～胴部	前期前葉・大木1?	RL結節横、末端環付LR横	ナデ	繊維微量
36	調査区南東側	29	深鉢	口縁～胴部	早期末・早稲田5	単軸絡糸体1類L縦～斜		繊維微量
37	E区 I層	26	深鉢	口縁部	早期末・赤御堂	折り返し口縁、口唇・外面前々段多条RL横	指頭による調整	繊維多量
38	E区 検出面	26	深鉢	口縁部	早期末・赤御堂	RL斜	RL?不明瞭	表裏縄文、繊維少量
39	E区 検出面	26	深鉢	口縁部	早期末・赤御堂	LR斜	不明瞭	表裏縄文?、繊維少量
40	I A 5 b 検出面	27	深鉢	口縁部	早期末・早稲田5?	前々段多条RL?斜→横、施文深い	ナデ	
41	I A 12 o 検出面	27	深鉢	口縁部	早期末・早稲田5	口唇凹形刺突、R(L+R)合燃横・縦	ナデ	胎土黒褐色、補修孔、14と同一個体
42	I A 12 o 検出面	27	深鉢	口縁部	早期末・早稲田5	口唇凹形刺突、R(L+R)合燃横・縦	ナデ	胎土黒褐色、13と同一個体
43	E区 I層	26	深鉢	胴部	早期末・早稲田5	RL圧痕横・斜、RL横	指頭による調整	繊維多量、38と同一個体
44	E区 I層	26	深鉢	胴部	早期末・早稲田5	RL圧痕横・斜、RL横	指頭による調整	繊維多量、37と同一個体
45	調査区南東側	29	深鉢	胴部	早期末・赤御堂	LR多方向	LR斜	表裏縄文、繊維少量、46と同一個体

No	出土地点・層位	調査年度	器種	部位	時期・型式	外面	内面	備考
46	調査区南東側	29	深鉢	胴部	早期末・赤御堂	LR多方向	LR斜	表裏縄文、尖底、繊維少量、45と同一個体
47	I A 9 b II層	27	深鉢	胴部	早期末・赤御堂	R(L+R)合燃?	RL多方向	表裏縄文、尖底?、繊維多い
48	I A 15 h 検出面	27	深鉢	胴部	早期末・赤御堂	前々段多糸LR多方向	前々段多糸LR斜	表裏縄文
49	I A 13 s 検出面	27	深鉢	胴部	早期末・赤御堂	前々段多糸?LR斜	RL斜	表裏縄文、尖底?、繊維少量
50	I A 9 b II層	27	深鉢	底部	早期末・赤御堂	RL縦?不明瞭	LR	表裏縄文、尖底、繊維多い
51	I A 13 s 検出面	27	深鉢	底部	前期初頭・表館?	地文不明		尖底、繊維多い
52	I A 16 h 検出面	27	深鉢	口縁部	前期後~中期?	押し刺突	ナデ	
53	調査区北西側	29	深鉢	口縁~胴部	中期?	上部無文ナデ、LR縦	ナデ	54と同一個体
54	調査区北西側	29	深鉢	胴部	中期?	LR縦	ナデ	53と同一個体

第4表 土製品観察表

No	出土地点・層位	調査年度	器種	特徴	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
55	SI12 RP13	29	紡錘車	台形状、外面に指頭痕残る、全体にナデ	5.3	5.5	2.8	95.1	孔径8~9mm

第5表 石器・石製品観察表

No	出土地点・層位	調査年度	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石質/産地/時代	備考
56	SI02 床面直上	26	台石	28.3	19.1	4.8	※3.7kg	花崗閃緑岩/北上山地/中生代白亜紀	
57	SI04	26	石鏃	(3.8)	1.3	0.5	2.2	頁岩/北上山地/中生代	無茎平基
58	SI04 貼床土	26	石匙	4.2	1.6	0.5	3.3	頁岩/北上山地/中生代	
59	SI04 貼床土	26	石匙	2.6	4.3	0.7	5.0	頁岩/北上山地/中生代	
60	SI07 埋土上位	26	石鏃	(2.0)	0.9	0.3	0.6	頁岩/北上山地/中生代	無茎平基
61	SI07 埋土上位	26	石鏃	(2.9)	1.2	0.4	1.3	頁岩/北上山地/中生代	無茎平基
62	SI07 埋土上位	26	石鏃	3.2	1.0	0.4	1.1	頁岩/北上山地/中生代	無茎平基
63	SI07 上部黒色土	26	石斧	9.2	5.3	1.6	97.5	ヒン岩/北上山地/中生代白亜紀	
64	SI07 上部黒色土	26	石斧	14.9	7.3	2.7	308.5	ヒン岩/北上山地/中生代白亜紀	
65	SI07 埋土上位	26	敲磨器	(11.6)	7.9	5.0	647.6	花崗閃緑岩/北上山地/中生代白亜紀	敲磨痕
66	SI07 埋土中	26	敲磨器	6.8	6.2	4.0	232.0	チャート/北上山地/中生代	磨痕
67	SI07 埋土上位	26	敲磨器	10.3	9.0	5.2	738.6	花崗岩/北上山地/中生代白亜紀	磨痕
68	SI10 Q1 埋土下位	27	石鏃	(2.7)	0.7	0.4	0.6	頁岩/北上山地/中生代	無茎凸基
69	SI10 Q2 埋土下位	27	石鏃	2.6	1.1	0.4	0.9	頁岩/北上山地/中生代	無茎凸基
70	SI10 Q4 埋土中	27	石鏃	(3.0)	1.1	0.5	1.4	頁岩/北上山地/中生代	無茎凸基
71	SI10 Q4 埋土中	27	石匙	5.0	1.6	0.6	4.3	頁岩/北上山地/中生代	
72	SI10 Q1 埋土下位	27	石匙	3.1	1.3	0.5	1.8	頁岩/北上山地/中生代	
73	SI10 Q1 埋土下位	27	スクレ	8.7	4.6	1.3	32.1	頁岩/北上山地/中生代	
74	SI10 Q4 埋土中	27	スクレ	4.9	2.8	1.2	14.1	頁岩/北上山地? / 中生代	
75	SI10 検出面	27	石斧	(13.5)	5.5	2.5	292.6	ヒン岩/北上山地/中生代白亜紀	刃部欠損
76	SI10 Q1 床面直上	27	敲磨器	17.3	9.4	5.2	1035.3	斑岩/北上山地/中生代白亜紀	敲痕
77	SI10 Q1 床面直上	27	敲磨器	9.9	9.5	5.3	695.9	花崗斑岩/北上山地/中生代白亜紀	磨痕
78	SI11 Q1 埋土中	27	石鏃	3.3	1.2	0.6	1.8	頁岩/北上山地/中生代	有茎凸基
79	SI11 Q3 埋土中	27	石鏃	3.1	1.2	0.6	1.9	頁岩/北上山地/中生代	無茎平基
80	SI11 Q1 埋土下位	27	石鏃	(1.9)	1.6	0.4	1.0	珪質頁岩/北上山地/中生代	不明、下端欠損
81	SI11 Q1 埋土中	27	スクレ	3.4	3.4	1.1	13.4	頁岩/北上山地/中生代	

No	出土地点・層位	調査 年度	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石質／産地／時代	備考
82	SI11 Q3 埋土中	27	スクレ	3.3	2.4	0.8	5.8	頁岩／北上山地／中生代	
83	SI11 Q3 埋土中	27	石斧	1.2	0.7	0.4	374.8	ヒン岩／北上山地／中生代白亜紀	
84	SI11 Q3 埋土中	27	石斧	1.3	0.8	0.4	519.4	斑礫岩／北上山地／中生代白亜紀	
85	SI12 P1 埋土	29	敲磨器	10.6	9.5	4.8	546.6	アイサイト／北上山地／中生代白亜紀	敲痕
86	SI12 S4	29	敲磨器	14.6	10.9	5.4	1182.2	花崗斑岩／北上山地／中生代白亜紀	磨痕
87	SI12 検出面	29	敲磨器	11.1	7.1	6.0	868.9	斑岩／北上山地／中生代白亜紀	特殊磨石
88	SI12 南西 埋土上位	29	台石	24.7	8.8	3.9	936.9	凝灰質砂岩／北上山地／中生代白亜紀	
89	SI13 南西 埋土上部	29	石鏃	5.2	1.4	0.6	3.8	頁岩／北上山地／中生代	無茎平基
90	SI13 南西 埋土上部	29	石鏃	(4.8)	1.2	0.4	2.3	頁岩／北上山地／中生代	無茎平基
91	SI13 南東 埋土上部	29	石鏃	(3.8)	1.2	0.4	1.6	頁岩／北上山地／中生代	無茎平基
92	SI13 南西 埋土上部	29	石鏃?	2.8	1.2	0.4	1.5	頁岩／北上山地／中生代	無茎平基
93	SI13 南東 埋土上部	29	石鏃	2.1	0.9	0.4	0.6	頁岩／北上山地／中生代	無茎平基
94	SI13 南東 埋土下部	29	石鏃	4.7	2.0	1.1	8.7	頁岩／北上山地／中生代	無茎円基
95	SI13 北西 埋土上部	29	石鏃	(3.4)	1.2	0.6	1.8	頁岩／北上山地／中生代	不明、下端欠損
96	SI13 中東 埋土上部	29	石鏃	(1.9)	1.1	0.4	0.7	頁岩／北上山地／中生代	不明、下端欠損
97	SI13 南東 埋土上部	29	石鏃	(2.9)	1.1	0.5	1.5	石英／北上山地／中生代	下端欠損
98	SI13 中東 埋土上部	29	スクレ	5.1	5.7	1.7	50.3	頁岩／北上山地／中生代	
99	SI13 南西 埋土上部	29	スクレ	8.2	3.4	1.7	40.1	頁岩／北上山地／中生代	
100	SI13 南東 埋土上部	29	スクレ	4.5	1.9	0.9	6.5	頁岩／北上山地／中生代	
101	SI13 埋土上部	29	スクレ	(3.6)	2.4	0.9	8.3	頁岩／北上山地?／中生代	
102	SK27 埋土中	27	石匙	5.2	2.1	0.6	4.9	黒曜石／不明／不明	
103	SK30 埋土中	27	スクレ	4.1	5.3	1.5	32.0	頁岩／北上山地／中生代	
104	SK30 埋土中	27	敲磨器	(5.8)	6.6	6.2	308.2	チャート／北上山地／中生代	敲痕
105	SK36	29	敲磨器	14.6	7.8	3.7	577.5	斑岩／北上山地／中生代白亜紀	特殊磨石
106	SK37 埋土上～中層	29	石鏃?	(1.8)	0.9	0.3	0.5	頁岩／北上山地／中生代	無茎凸基、上端欠損
107	SK39	29	石鏃?	(2.7)	1.3	0.4	1.1	頁岩／北上山地／中生代	無茎平基、上端欠損
108	SK39	29	スクレ	3.9	3.0	1.5	15.3	珪質頁岩／北上山地／中生代	
109	SKT07 埋土中	27	石鏃	3.6	1.0	0.4	1.6	頁岩／北上山地／中生代	無茎平基
110	SKT07 埋土上位	27	石鏃	2.8	1.3	0.4	1.5	頁岩／北上山地／中生代	無茎平基
111	SD01 B区	26	石鏃	4.1	1.5	0.6	3.5	頁岩／北上山地／中生代	有茎平基
112	SD01 B区	26	石鏃	4.6	1.3	0.4	2.0	頁岩／北上山地／中生代	無茎円基
113	SD01 中央部	26	石鏃	3.9	1.2	0.4	1.5	頁岩／北上山地／中生代	無茎平基
114	SD01 D区	26	石鏃	3.5	1.1	0.4	1.5	頁岩／北上山地／中生代	無茎平基
115	SD01 D区	26	石鏃	2.4	1.2	0.4	1.1	頁岩／北上山地／中生代	無茎平基
116	SD01 A区	26	石匙	6.5	2.1	0.7	8.4	頁岩／北上山地／中生代	
117	SD01 D区	26	スクレ	7.7	3.3	1.6	40.7	頁岩／北上山地／中生代	
118	SD01 中央部	26	スクレ	5.7	2.9	1.2	19.7	頁岩／北上山地／中生代	
119	SD01 F区	26	スクレ	7.4	3.6	1.8	39.4	頁岩／北上山地／中生代	
120	SD01 F区	26	スクレ	5.1	2.5	0.8	11.2	頁岩／北上山地／中生代	
121	SD01 検出面	26	敲磨器	14.6	7.0	4.8	659.4	斑岩／北上山地／中生代白亜紀	敲磨痕、特殊磨石
122	SD01 検出面	26	敲磨器	(8.7)	7.2	5.0	412.4	花崗岩／北上山地／中生代白亜紀	敲磨痕、特殊磨石?、 欠損
123	SD01 検出面	26	敲磨器	5.7	5.1	4.3	218.9	斑礫岩／北上山地／中生代白亜紀	敲磨痕

No	出土地点・層位	調査年度	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質/産地/時代	備考
124	SD01 検出面	26	敲磨器	9.7	7.2	4.4	469.1	ヒン岩/北上山地/中生代白亜紀	敲痕
125	SD01 検出面	26	敲磨器	6.5	6.3	6.1	356.2	チャート/北上山地/中生代	敲痕
126	SD01 検出面	26	敲磨器	11.5	5.1	3.7	312.4	チャート/北上山地/中生代	敲痕
127	SD01 A区	26	円盤状石製品	6.0	6.3	1.2	68.8	砂岩/北上山地/中生代	
128	調査区南側 II層	29	石鏃	2.3	1.7	0.5	2.2	頁岩/北上山地/中生代	無茎凸基
129	I A12 c 検出面	27	石鏃	3.0	1.2	0.4	1.7	頁岩/北上山地/中生代	無茎凸基
130	I A12 f 検出面上層	27	石鏃	2.8	1.1	0.6	1.5	頁岩/北上山地/中生代	無茎凸基
131	I A18 h 検出面	27	石鏃	2.4	1.3	0.3	1.1	珪質頁岩/北上山地/中生代	無茎凸基
132	I A12 r 検出面	27	石鏃	3.1	2.2	0.7	4.4	珪質頁岩/北上山地/中生代	無茎凸基
133	調査区北西側 II層	29	石鏃	(2.9)	1.3	0.4	1.4	頁岩/北上山地/中生代	不明、下端欠損
134	調査区北西側 II層	29	石鏃	(3.0)	1.3	0.7	2.5	頁岩/北上山地/中生代	不明、下端欠損
135	I A20 h 検出面上層	27	石鏃	2.0	1.3	0.3	1.0	珪質頁岩/北上山地/中生代	不明、下端欠損
136	I A11 p 検出面	27	尖頭器	6.3	1.1	0.5	3.4	頁岩/北上山地/中生代	
137	I A14 c 検出面	27	石匙	7.2	1.9	0.7	9.3	頁岩/北上山地/中生代	
138	調査区北西側 II層	29	石匙	4.0	2.7	0.7	10.4	頁岩/北上山地/中生代	
139	I A6 e 検出面	27	石匙	4.0	3.8	0.6	7.9	頁岩/北上山地/中生代	
140	I A14 c 検出面	27	石匙	3.7	3.7	0.7	7.4	頁岩/北上山地/中生代	
141	I A12 f 検出面上層	27	石匙	2.4	4.0	0.8	4.7	頁岩/北上山地/中生代	
142	I A11 q 検出面	27	スクレ	7.7	3.2	1.6	37.9	頁岩/北上山地/中生代	
143	I A14 g 検出面上層	27	スクレ	6.4	3.0	1.4	28.1	珪質頁岩/北上山地/中生代	
144	I A11 e 検出面	27	スクレ	5.6	4.0	1.4	23.5	頁岩/北上山地/中生代	
145	I A7 d 検出面上層	27	スクレ	4.9	2.5	0.9	11.2	頁岩/北上山地/中生代	
146	I A16 f 検出面	27	スクレ	6.1	4.2	1.7	34.1	ホルンフェルス/北上山地/中生代	
147	I A20 i 検出面	27	スクレ	2.6	2.0	0.5	3.0	頁岩/北上山地/中生代	
148	I A13 e 検出面	27	スクレ	2.5	4.4	1.2	13.7	頁岩/北上山地/中生代	
149	I A14 g 検出面上層	27	スクレ	2.6	3.7	1.7	13.9	頁岩/北上山地/中生代	
150	I A1 d 検出面	27	スクレ	6.6	5.9	1.6	53.3	頁岩/北上山地/中生代	
151	作業道 V層相当	27	敲磨器	9.8	8.9	5.1	634.3	花崗斑岩/北上山地/中生代白亜紀	敲痕
152	トレンチ VIII層	27	敲磨器	8.1	7.0	6.0	483.0	チャート/北上山地/中生代	敲痕
153	I A1 d 検出面	27	敲磨器	8.2	7.7	7.2	611.3	チャート/北上山地/中生代	敲痕
154	トレンチ VIII層	27	敲磨器	13.0	5.8	4.5	578.8	ヒン岩/北上山地/中生代白亜紀	敲痕
155	トレンチ VIII層	27	敲磨器	8.5	5.3	3.0	244.0	細粒花崗閃緑岩/北上山地/中生代白亜紀	敲痕
156	表土直下	27	敲磨器	(7.0)	6.0	4.0	246.1	細粒花崗閃緑岩/北上山地/中生代白亜紀	特殊磨石、欠損

第6表 錢貨観察表

No	出土地点・層位	調査年度	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
157	SD01 検出面	26	寛永通宝(銅銭)、新寛永、文背	2.5	2.5	0.1	2.9	初鑄1868年(寛文8年)

## VI 自然科学分析

### 放射性炭素年代(AMS測定)

(株)加速器分析研究所

#### 1 測定対象試料

南鹿糠 I 遺跡は、岩手県九戸郡洋野町種市第16・17地割(北緯40°23'35"、東経141°43'00")に所在する。測定対象試料は、平成27年度調査のS I 11出土の炭化物4点(No.1~4)と平成29年度調査のS I 12出土の木炭2点(No.5・6)である(表1)。

なお、測定・報告は各年度ごとに行われているが、本書への記載にあたり、編集者が一部を統合している。

#### 2 測定の意義

試料が出土した竪穴住居跡の年代を明らかにする。

#### 3 化学処理工程

- (1)メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- (2)酸-アルカリ-酸(AAA: Acid Alkali Acid)処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1mol/l (1M)の塩酸(HCl)を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム(NaOH)水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と表1に記載する。
- (3)試料を燃焼させ、二酸化炭素(CO<sub>2</sub>)を発生させる。
- (4)真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5)精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト(C)を生成させる。
- (6)グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

#### 4 測定方法

加速器をベースとした<sup>14</sup>C-AMS専用装置(NEC社製)を使用し、<sup>14</sup>Cの計数、<sup>13</sup>C濃度(<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C)、<sup>14</sup>C濃度(<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>C)の測定を行う。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HOx II)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

#### 5 算出方法

- (1)  $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の<sup>13</sup>C濃度(<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表した値である(表1)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) <sup>14</sup>C年代(Libby Age: yrBP)は、過去の大気中<sup>14</sup>C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(0yrBP)として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用

する(Stuiver and Polach 1977)。 $^{14}\text{C}$ 年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。 $^{14}\text{C}$ 年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、 $^{14}\text{C}$ 年代の誤差( $\pm 1\sigma$ )は、試料の $^{14}\text{C}$ 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

- (3) pMC(percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の $^{14}\text{C}$ 濃度の割合である。pMCが小さい( $^{14}\text{C}$ が少ない)ほど古い年代を示し、pMCが100以上( $^{14}\text{C}$ の量が標準現代炭素と同等以上)の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。
- (4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の $^{14}\text{C}$ 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の $^{14}\text{C}$ 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 $^{14}\text{C}$ 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差( $1\sigma = 68.2\%$ )あるいは2標準偏差( $2\sigma = 95.4\%$ )で表示される。グラフの縦軸が $^{14}\text{C}$ 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない $^{14}\text{C}$ 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13データベース(Reimer et al. 2013)を用い、試料No.1～4にはOxCalv4.2較正プログラム(Bronk Ramsey 2009)、試料No.5・6にはOxCalv4.3較正プログラム(Bronk Ramsey 2009)を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2・3、図1・2に示した。暦年較正年代は、 $^{14}\text{C}$ 年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

## 6 測定結果

- (1) 試料No.1～4の測定結果を表1・2、図1に示す。

試料の $^{14}\text{C}$ 年代は、 $6380 \pm 30\text{yrBP}$ (No.1)から $6310 \pm 30\text{yrBP}$ (No.2)の狭い年代幅にまとまる。暦年較正年代( $1\sigma$ )は、最も古いNo.3が $7412 \sim 7267\text{cal BP}$ の間に2つの範囲、これより新しい他の3点は $7300 \sim 7200\text{cal BP}$ 前後の近接した年代値となっている。4点とも縄文時代早期末葉頃に相当する(小林編2008)。

試料の炭素含有率はすべて50%を超え、化学処理、測定上の問題は認められない。

- (2) 試料5・6の測定結果を表1～3、図1・2に示す。

較正年代は、cal BPとcal BC/ADの2通りで算出したが、以下の説明ではcal BC/ADの値で記載し(表3)、cal BPの値は図表のみ提示した(表2、図1)。試料の $^{14}\text{C}$ 年代はNo.5・6のいずれも $1350 \pm 20\text{yrBP}$ である。暦年較正年代( $1\sigma$ )は、No.5が $653 \sim 674\text{cal AD}$ の範囲、No.6が $654 \sim 675\text{cal AD}$ の範囲で示され、古墳時代終末期頃に相当する(佐原 2005)。2点の試料は同じS I 12の埋土最下層から出土し、ほぼ同年代を示した。

なお、今回測定された試料の年代については、次に記す古木効果を考慮する必要がある。樹木の年輪の放射性炭素年代は、その年輪が成長した年の年代を示す。したがって樹皮直下の最外年輪の年代が、樹木が伐採され死んだ年代を示し、内側の年輪は、最外年輪からの年輪数の分、古い年代値を示すことになる(古木効果)。今回測定された木炭は、いずれも樹皮が残存せず、本来の最外年輪を確認できないことから、これらの木が死んだ年代は測定結果より新しい可能性がある。

る。ただし、同じS I 12の埋土最下層出土の2点がほぼ同年代を示していることは、これらの測定結果がおおむね本来の年代に近いことを示唆するとも考えられる。

試料の炭素含有率はいずれも60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

#### 文献

Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51 (1), 337-360

小林達雄編 2008 総覧縄文土器, 総覧縄文土器刊行委員会, アム・プロモーション

Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 55 (4), 1869-1887

佐原眞 2005 日本考古学・日本歴史上の時代区分, ウェルナー・シュタインハウス監修, 奈良文化財研究所編集, 日本の考古学 上 ドイツ展記念概説, 学生社, 14-19

Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of  $^{14}\text{C}$  data, *Radiocarbon* 19 (3), 355-363

表1 放射性炭素年代測定結果 ( $\delta^{13}\text{C}$ 補正值)

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-151553	No.1	SI11 台石ピット 埋土下位	炭化物	AAA	-25.46 ± 0.26	6,330 ± 30	45.50 ± 0.16
IAAA-151554	No.2	SI11 Q1 壁際 埋土下位	炭化物	AAA	-27.53 ± 0.25	6,310 ± 30	45.57 ± 0.17
IAAA-151555	No.3	SI11 Q2 埋土中位	炭化物	AAA	-30.80 ± 0.22	6,380 ± 30	45.17 ± 0.18
IAAA-151556	No.4	SI11 炉前庭部 埋土下位	炭化物	AAA	-31.27 ± 0.21	6,320 ± 30	45.55 ± 0.19
IAAA-172158	No.5	SI12 C5 埋土最下層	木炭	AAA	-27.78 ± 0.20	1,350 ± 20	84.55 ± 0.25
IAAA-172159	No.6	SI12 C26 埋土最下層	木炭	AAA	-25.55 ± 0.22	1,350 ± 20	84.57 ± 0.25

[IAA 登録番号: No.1 ~ 4 #7606, No.5・6 #8897]

表2 放射性炭素年代測定結果 ( $\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用 $^{14}\text{C}$ 年代、較正年代 cal BP)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 $\sigma$ 暦年代範囲	2 $\sigma$ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-151553	6,330 ± 30	45.46 ± 0.16	6,325 ± 28	7291calBP - 7244calBP (52.9%) 7203calBP - 7179calBP (15.3%)	7313calBP - 7173calBP (95.4%)
IAAA-151554	6,350 ± 30	45.34 ± 0.17	6,313 ± 30	7271calBP - 7240calBP (36.7%) 7216calBP - 7178calBP (31.5%)	7301calBP - 7169calBP (95.4%)
IAAA-151555	6,480 ± 30	44.64 ± 0.17	6,383 ± 31	7412calBP - 7397calBP ( 9.5% ) 7328calBP - 7267calBP (58.7%)	7417calBP - 7350calBP (31.0%) 7340calBP - 7260calBP (64.4%)
IAAA-151556	6,482 ± 30	44.97 ± 0.18	6,316 ± 32	7273calBP - 7238calBP (37.6%) 7219calBP - 7177calBP (30.6%)	7306calBP - 7170calBP (95.4%)
IAAA-172158	1,390 ± 20	84.07 ± 0.24	1,348 ± 23	1297calBP - 1276calBP (68.2%)	1306calBP - 1260calBP (93.4%) 1199calBP - 1190calBP ( 2.0% )
IAAA-172159	1,360 ± 20	84.47 ± 0.24	1,346 ± 23	1297calBP - 1276calBP (68.2%)	1305calBP - 1259calBP (92.5%) 1201calBP - 1189calBP ( 2.9% )

[参考値]

表3 放射性炭素年代測定結果 ( $\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用 $^{14}\text{C}$ 年代、較正年代 cal BC/AD) ※試料No.5・6

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 $\sigma$ 暦年代範囲	2 $\sigma$ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-172158	1,390 ± 20	84.07 ± 0.24	1,348 ± 23	653calAD - 674calAD (68.2%)	644calBP - 690calBP (93.4%) 751calBP - 760calBP ( 2.0% )
IAAA-172159	1,360 ± 20	84.47 ± 0.24	1,346 ± 23	654calAD - 675calAD (68.2%)	645calBP - 692calBP (92.5%) 749calBP - 761calBP ( 2.9% )

[参考値]

図1 暦年較正年代グラフ(cal BP、参考)

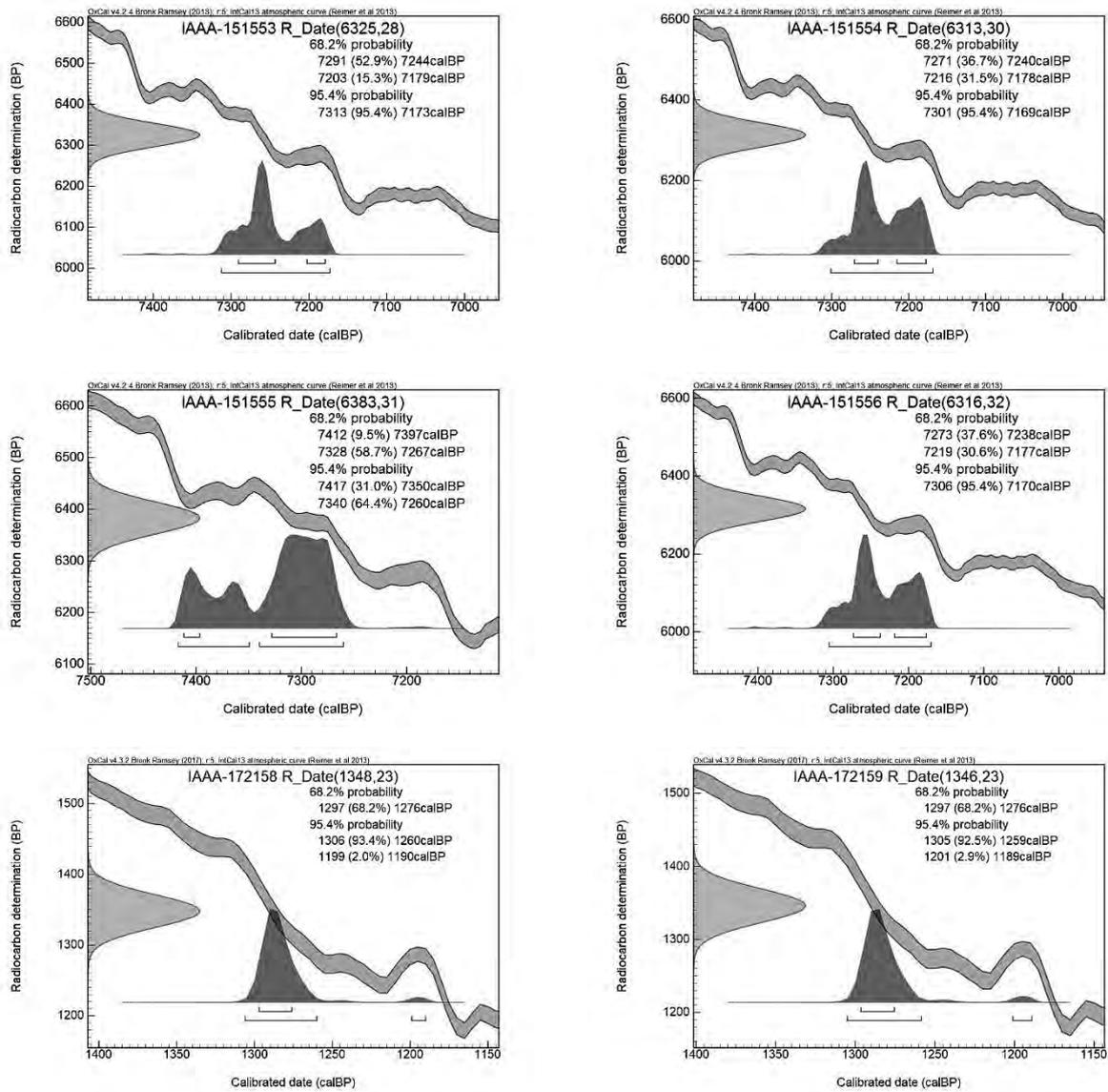
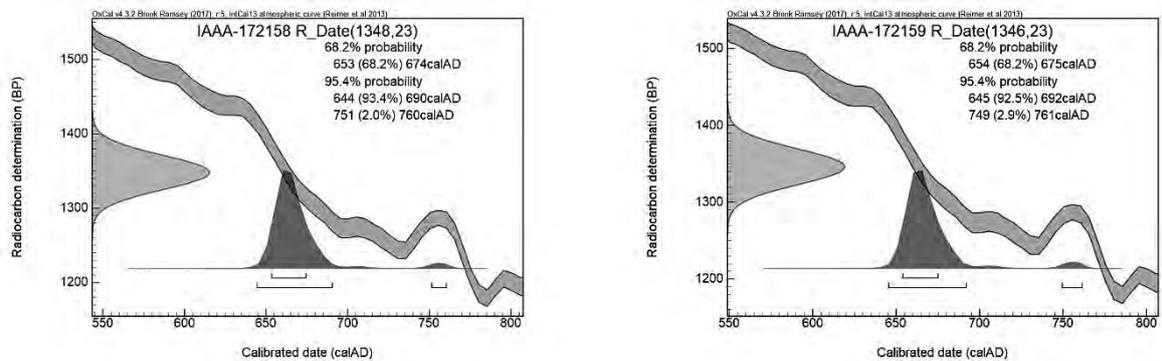


図2 暦年較正年代グラフ(cal AD、参考) ※試料No.5・6



## Ⅶ 総 括

今回の調査は、三陸沿岸道路建設に伴い、平成26・27・29年と3箇年にわたり7,395㎡を対象に調査を実施した。確認された遺構は、竪穴住居跡14棟、土坑30基、陥し穴15基、焼土遺構4基、溝状遺構1条である。出土した遺物は、土器が6箱、石器・石製品が11箱、土製品1点、銭貨9点である。

ここでは総括として、今回の調査で得られた成果を以下の項目にまとめ、若干の考察を行いたい。

＜遺構の分布＞調査区域における遺構の分布状況は、東向きの緩斜面部に多く立地している。特に平成26年度調査区においては、幅10mほどの細長い調査範囲ながら、複数の遺構が重複し、密集している。また、調査区境に掛かる遺構も多いことから、この周辺に広く分布する可能性が高い。一方、尾根の頂部にあたり、比較的平坦な場所が認められる平成27・29年度調査区の遺構密度は低く、土坑や陥し穴が散在する程度である。

＜遺構の時期＞出土遺物から推定される時期は、主に縄文時代早期末葉・前期前葉・中期・後期前葉、弥生時代後期、古墳時代末期であるが、遺構の詳細な時期を特定できるものは少ない。一覧を第7表に記した。

竪穴住居跡では、出土遺物や規模・形態からS I 07・08・10・11・13は縄文時代早期末葉に推定される。この他は特定できる出土遺物がないことから詳細は不明ではあるが、S I 02・04・05・06は地床炉や壁溝・柱穴といった付属施設があることから、同様の時代に納まるものと考えられる。S I 12は焼失住居で、一括出土した土師器から7世紀代が見込まれる。土坑の大半は出土遺物が少なく、形状も様々で、時期や機能が特定できるものは少ない。S K 07・08(・09?)・29・30は定形的なフラスコ状または袋状を呈することから、縄文時代の貯蔵穴と判断されるが、詳細な時期は不明である。S K 19は底面に溝状の施設を持つもので、土壙墓の可能性もある。他遺跡の類例から縄文早期と推測される。S K 05は倒木痕、S K 01は堆積土から近世～近代と比較的新しい時期が想定され、この他は少量の遺物の出土を伴うものもあるが、時期の特定は困難である。陥し穴は遺物を伴うものがほとんどなく、詳細な時期は不明だが、他種遺構との重複はあるものの、陥し穴同士での重複は見られない。また、溝状のものに関しては、長軸方向がある程度まとまっていたり、S K T 05と09、S K T 06と07、S K T 12と13というようなセット関係が見られるものがある。これらのことから、ある一定の時期に計画的に配置された可能性が窺える。その時期は、重複関係などから竪穴住居など集落が営まれた縄文早期末葉より新しい時代が推測される。焼土遺構はいずれもⅧ層上面での焼成である。このことから屋外炉と想定し、いずれも縄文時代とした。溝状遺構は出土遺物から近世～近代と判断される。

＜S I 12出土土師器＞平成29年度調査区の北西側で検出した竪穴住居跡である。炭化材の残存状況や遺物の出土状況から、失火による焼失住居と判断した。当初は、出土した土師器から「非口クロ成形＝奈良時代」と考え調査を終えたが、整理段階で羽柴直人(センター主任文化財専門員)より7～8世紀の九戸地方における特有の土師器である可能性が高いと指摘を受けた。羽柴(1995)は、九戸地方の土師器を5つの群に分類している。1群は馬淵川流域の影響の強いもの、2～4群は頸部に段のない甕、体部に段のない坏が主体を占めるものとし、これらを「九戸型土師器」と総称している。続く5群は周辺地域にも見られるような、頸部や体部に段が付くものへの移行期とし(分類上は途上と記されて

いる)、九戸型の終焉段階に位置付けている。S I 12出土の土師器は廃絶時の状況から一括資料として扱える。大半が甕であり、坏は全く出土していない。長胴甕が多く、14・19・20は頸部が外に大きく屈曲する。15・16・17は口縁～頸部間の幅が狭く、上記のものより屈曲は小さい。16・17は胴部に最大径がある。球胴甕は18の1点のみで、頸部から外側に大きく屈曲する。これらにはいずれも頸部に段は認められない。その他、鉢・碗とした23・24も同様である。器面調整については、外面は口縁部ヨコナデ、胴部ヘラミガキが多く、ハケメやヘラナデ痕跡を残すものは少ない。内面は多様だが、ハケメ調整によるものが多い。以上のことから、九戸型土師器の3～4群に該当すると考えられる。

年代について羽柴(1995)は、目安としながらも、1群を7世紀中葉、2群を7世紀後半、3群を7世紀末～8世紀初、4群を8世紀前半、5群を8世紀後半と示している。S I 12出土土師器は、3～4群相当であるから7世紀末～8世紀前半となるが、焼失時の炭化材2点を<sup>14</sup>C年代測定した結果は、どちらも暦年較正年代(1σ)で7世紀中葉と示された。この結果をどう捉えるかについては、今後の資料の増加を待つしかないが、いずれにせよ、羽柴が執筆した1995年段階では、洋野町(旧種市町・大野村)は発掘調査の少なさもあり、当該土師器の空白地帯でもあった。現在、震災復興に際し、同町内で多くの遺跡の発掘調査が行われており、今後資料の増加が見込まれるであろう。改めて議論される際の空白地帯を埋める一片となることを期待したい。

最後に、今回の調査に際し、ご協力いただいた皆さまに感謝を申し上げます。

第7表 遺構一覧表

遺構名	時 代	遺構名	時 代	遺構名	時 代	遺構名	時 代	遺構名	時 代
S I 01	縄文?	S K 01	近世～近代?	S K 16	縄文?	S K T 01	縄文	S N 01	縄文
S I 02	縄文	S K 02	縄文?	S K 17	縄文?	S K T 02	縄文	S N 02	縄文
S I 03	縄文?	S K 03	縄文?	S K 18	縄文?	S K T 03	縄文	S N 03	縄文
S I 04	縄文	S K 04	縄文?	S K 19	縄文早期?	S K T 04	縄文	S N 04	縄文
S I 05	縄文	S K 05	不明	S K 20	縄文?	S K T 05	縄文	S D 01	近世
S I 06	縄文早期末葉以降	S K 06	縄文?	S K 21	縄文早期末葉	S K T 06	縄文		
S I 07	縄文早期末葉	S K 07	縄文	S K 22	縄文?	S K T 07	縄文		
S I 08	縄文早期末葉?	S K 08	縄文	S K 27	縄文早期末葉?	S K T 08	縄文		
S I 09	縄文	S K 09	縄文?	S K 29	縄文	S K T 09	縄文		
S I 10	縄文早期末葉	S K 10	縄文?	S K 30	縄文	S K T 10	縄文		
S I 11	縄文早期末葉	S K 11	縄文?	S K 36	縄文	S K T 11	縄文		
S I 12	7世紀	S K 12	縄文?	S K 37	縄文	S K T 12	縄文		
S I 13	縄文早期末葉	S K 13	縄文?	S K 38	縄文	S K T 13	縄文		
		S K 14	縄文?	S K 39	縄文	S K T 14	縄文		
		S K 15	縄文?	S K 42	縄文	S K T 15	縄文		

## 引用・参考文献

### 【論文等】

羽柴 直人 1995 「岩手県九戸地方のロクロ使用以前の土師器」『紀要XV』(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター  
熊谷 常正 2008 「縄文条痕文系土器(東北地方)」『総覧 縄文土器』小林達雄編/(株)アム・プロモーション

【報 告 書】 ※「埋蔵文化財センター」は「埋文センター」、「岩手県文化振興事業団」は「岩文振」と略

秋 田 県 教 育 委 員 会 2003 『物見坂IV遺跡』秋田県文化財調査報告書第354集  
洋 野 町 教 育 委 員 会 2013 『平内II遺跡発掘調査報告書』洋野町埋蔵文化財調査報告書第1集  
岩 手 県 教 育 委 員 会 2016 『岩手県内遺跡発掘調査報告書(平成26年度 復興関係)』岩手県文化財調査報告書第146集  
(財)岩手県埋文センター 1996 『ゴッソー遺跡発掘調査報告書』岩文振埋蔵文化財調査報告書第238集  
(財)岩手県埋文センター 2001 『ゴッソー遺跡発掘調査報告書』岩文振埋蔵文化財調査報告書第357集  
(公財)岩手県埋文センター 2013 『芋田沢田IV遺跡・芋田沢田VI遺跡発掘調査報告書』岩文振埋蔵文化財調査報告書第604集  
(公財)岩手県埋文センター 2016 『浜岩泉III遺跡発掘調査報告書』岩文振埋蔵文化財調査報告書第655集  
(公財)岩手県埋文センター 2017 「八森遺跡」『平成28年度発掘調査報告書』岩文振埋蔵文化財調査報告書第676集

# 写真図版



S I 01 全景(SW→)



S I 01 断面(W→)



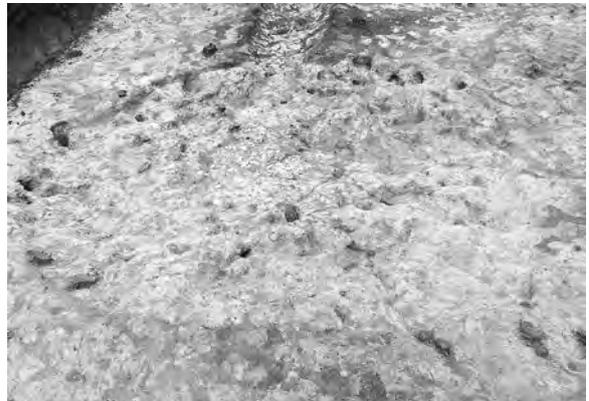
S I 02 全景(S→)



S I 03、SK13・14 全景(SW→)



S I 04、SK20、SKT03 全景(S→)



S I 05 全景(S→)



S I 06・07・08 全景(NW→)



S I 06・07・08 全景(NE→)



S 107 全景(SW→)



S 107 柱穴 完掘(E→)



S 109 全景(SW→)



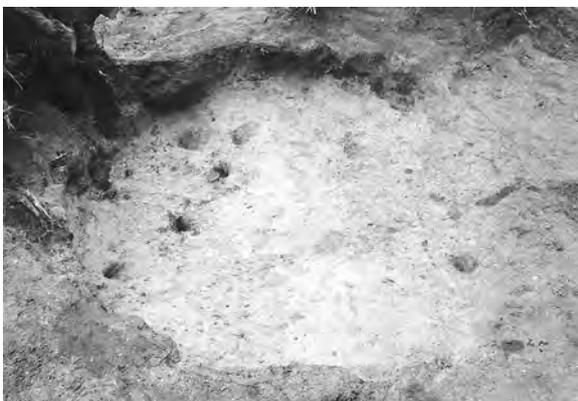
S 109 断面(SE→)



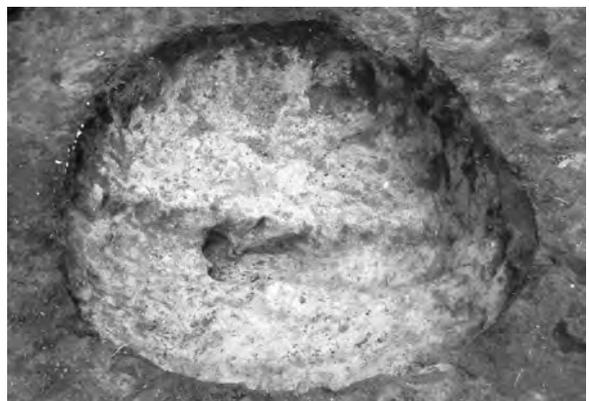
S K07 全景(NE→)



S K08 全景(SE→)



S K09 全景(S→)



S K19 全景(N→)



S K 21 遺物出土(W→)



S D 01 全景(N→)



S K T 01 全景(NE→)



S K T 02 全景(SE→)



S K T 04 全景(SW→)



調査区北部 全景(S→)

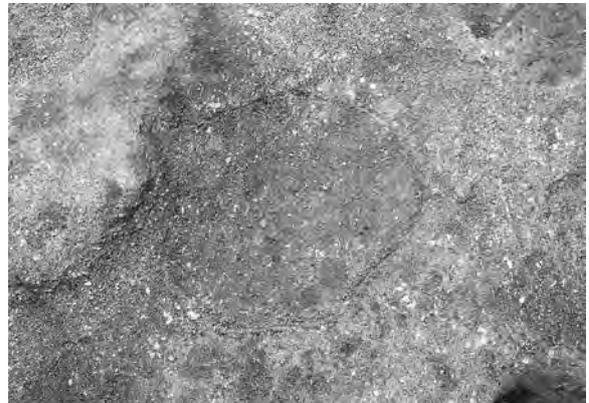
写真図版3 SK21、SD01、SKT01・02・04



S I 10 全景(SE→)



S I 10 断面(SE→)



S I 10 炉1 検出(E→)



S I 10 炉1 断面(E→)



S I 10 炉2 断面(NW→)



S I 11 全景(S→)



S I 10・11 全景(SE→)



S I 11 断面(SE→)



S I 11 炉 断面(E→)



S I 11 土坑1 断面(S→)



S K 27 全景(W→)



S K 27 断面(NW→)



S K 29 全景(E→)



S K 29 断面(SE→)



S K 30 全景(S→)



S K 30 断面(S→)



S K T 05 全景(E→)



S K T 05 断面(E→)



S K T 06 全景(S E→)



S K T 06 断面(N→)



S K T 07 全景(S→)



S K T 07 断面(N→)



S K T 08 全景(E→)



S K T 08 断面(S E→)



S K T 09 全景(N E→)



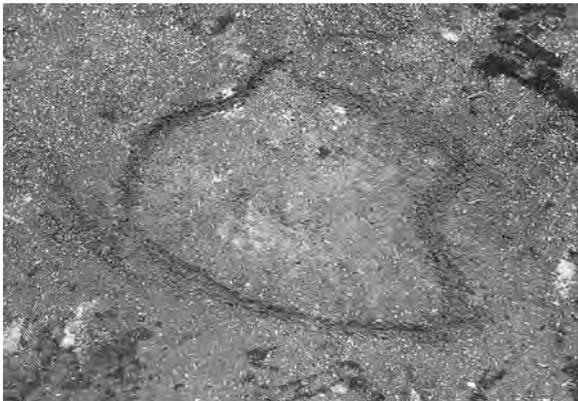
S K T 09 断面(N E→)



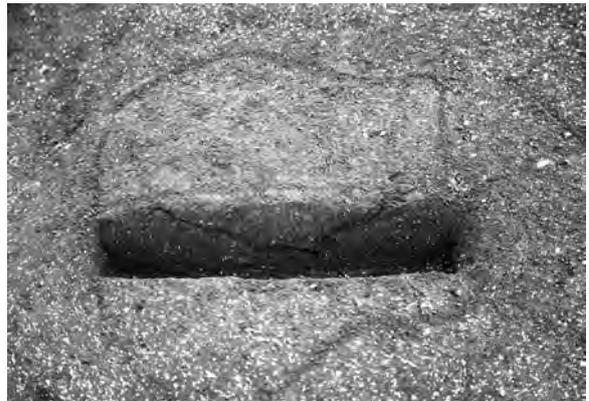
SN01 検出(N→)



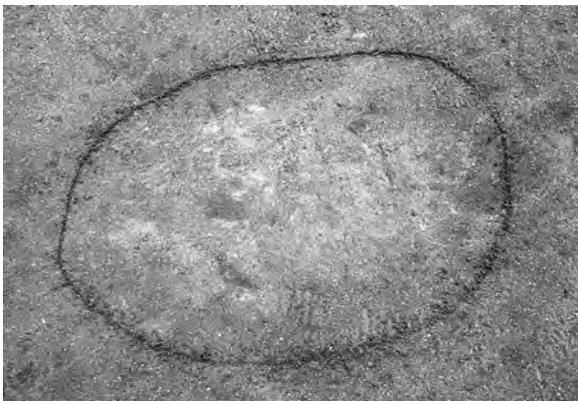
SN01 断面(SE→)



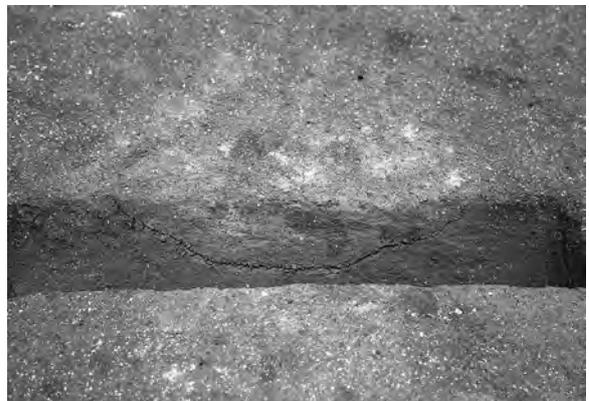
SN02 検出(S→)



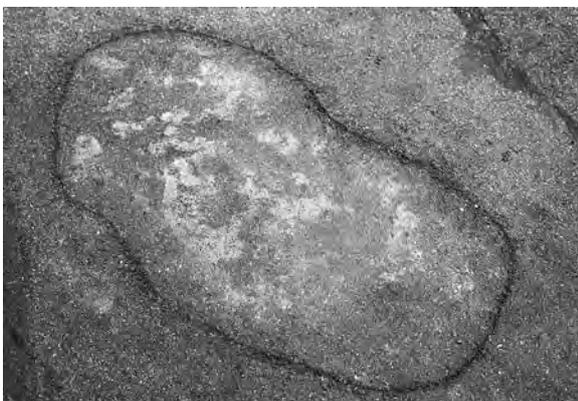
SN02 断面(SE→)



SN03 検出(S→)



SN03 断面(SE→)



SN04 検出(SE→)



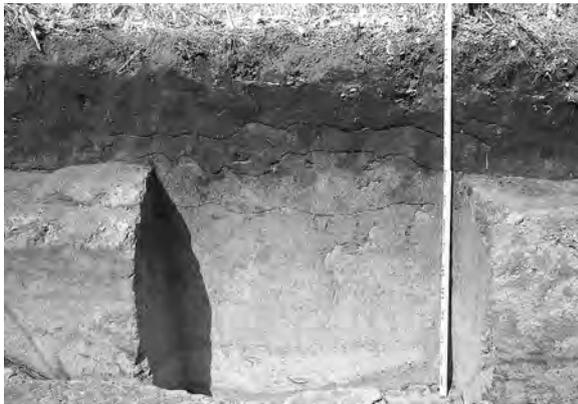
SN04 断面(SE→)



調査前風景



調査前風景(雑物撤去後)



基本土層



基本土層



検出状況



検出状況



作業風景



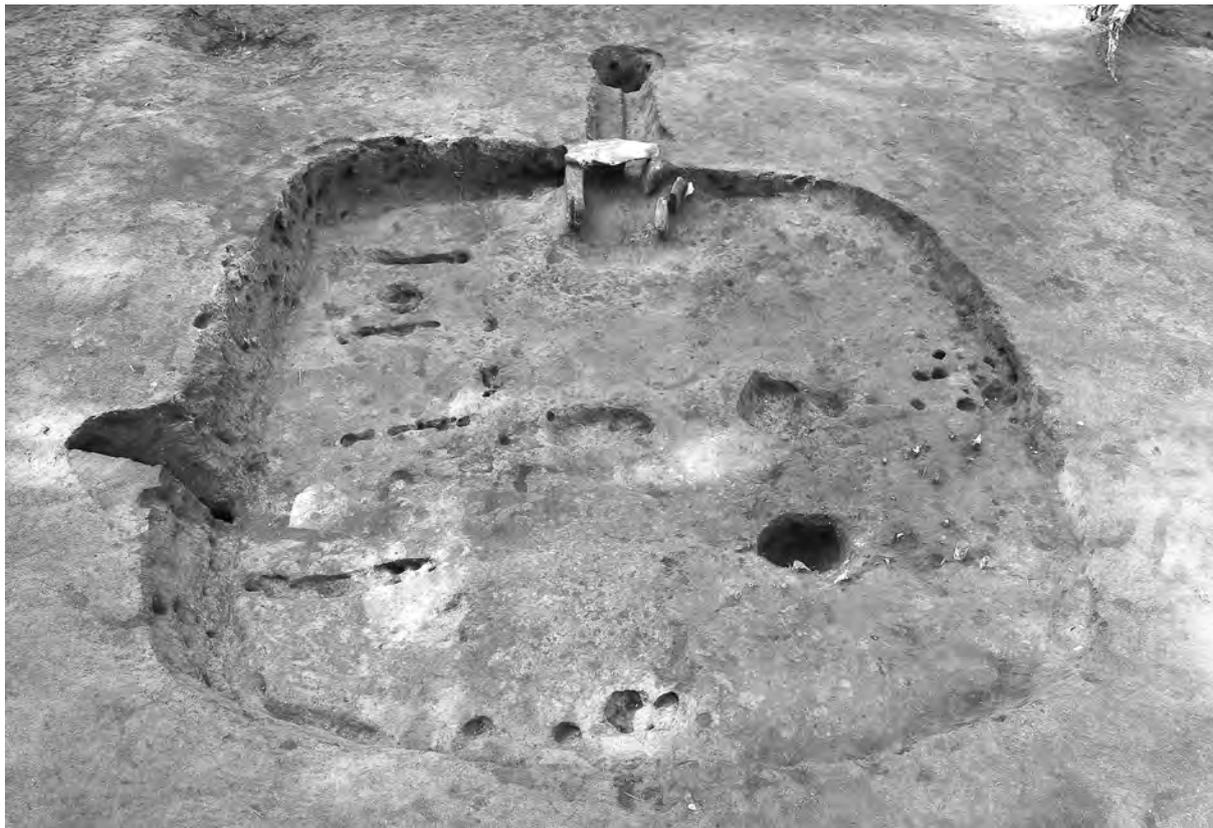
作業風景



調査区遠景 (E→)



調査区全景 (直上→)



S I 12 完掘(S→)



S I 12 断面(E→)



S I 12 断面(S→)



S I 12 遺物出土状況(S→)



S I 12 遺物出土状況(SE→)



S I 12 遺物出土状況(E→)



S I 12 遺物出土状況(S→)



S I 12 遺物出土状況(E→)



S I 12 カマド 完掘(S→)



S I 12 カマド 断面(E→)



S I 12 カマド 断面(E→)



S I 12 貼床除去後(S→)



S I 12 K 1 断面(S→)



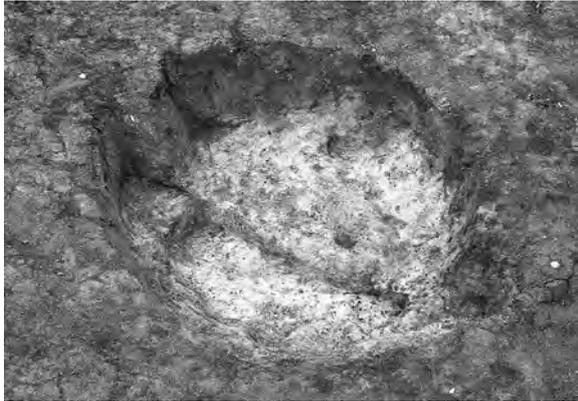
S I 12 調査風景



S I 13 完掘(N→)



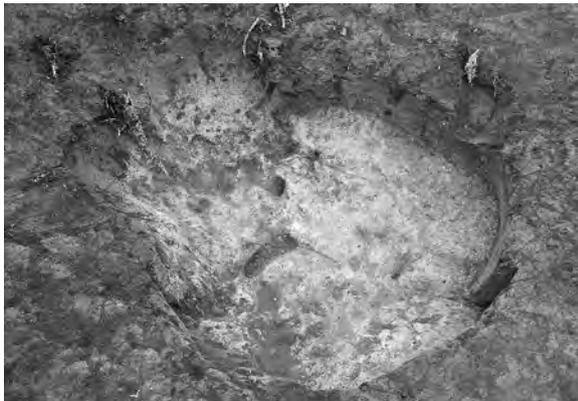
S I 13 断面(N→)



S K 36 完掘(S→)



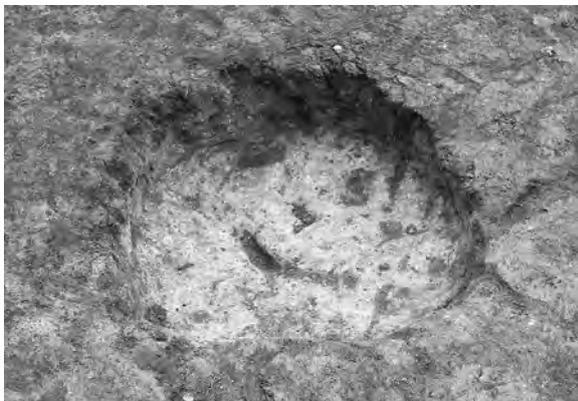
S K 36 断面(S→)



S K 37 完掘(S→)



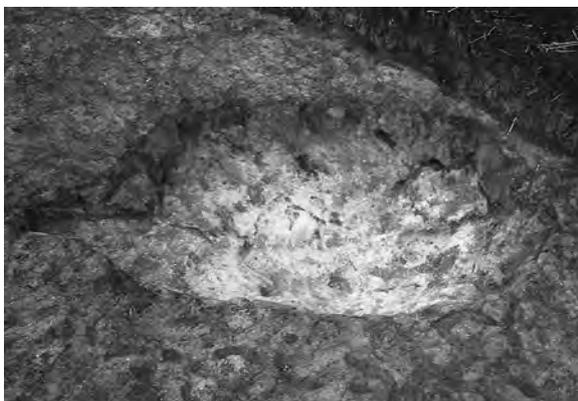
S K 37 断面(S→)



S K 38 完掘(E→)



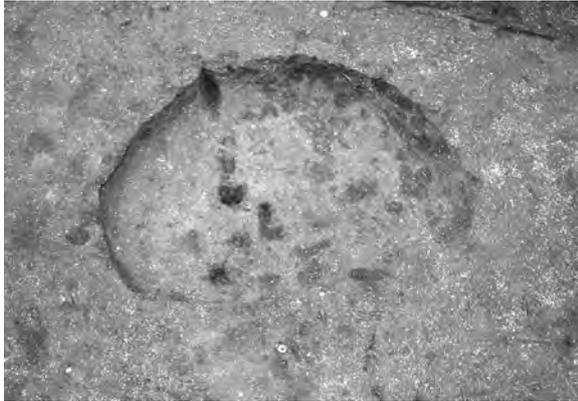
S K 38 断面(SE→)



S K 39 完掘(S→)



S K 39 断面(S→)



SK42 完掘(N→)



SK42 断面(SE→)



SKT10 完掘(SE→)



SKT10 断面(SE→)



SKT11 完掘(SW→)



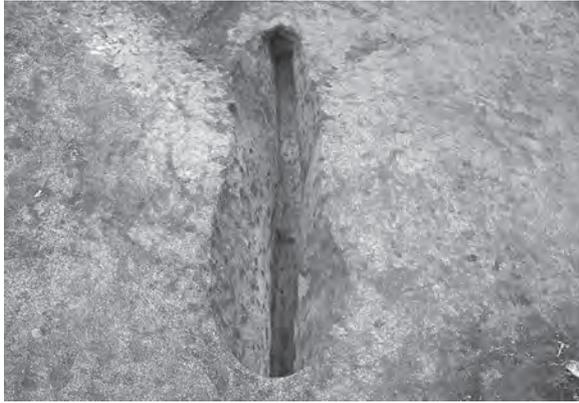
SKT11 断面(NE→)



SKT12 完掘(E→)



SKT12 断面(W→)



SKT13 完掘(E→)



SKT13 断面(W→)



SKT14 完掘(E→)



SKT14 断面(E→)



SKT15 断面(E→)



基本土層



基本土層



作業風景

写真図版17 SKT13~15、基本土層、作業風景



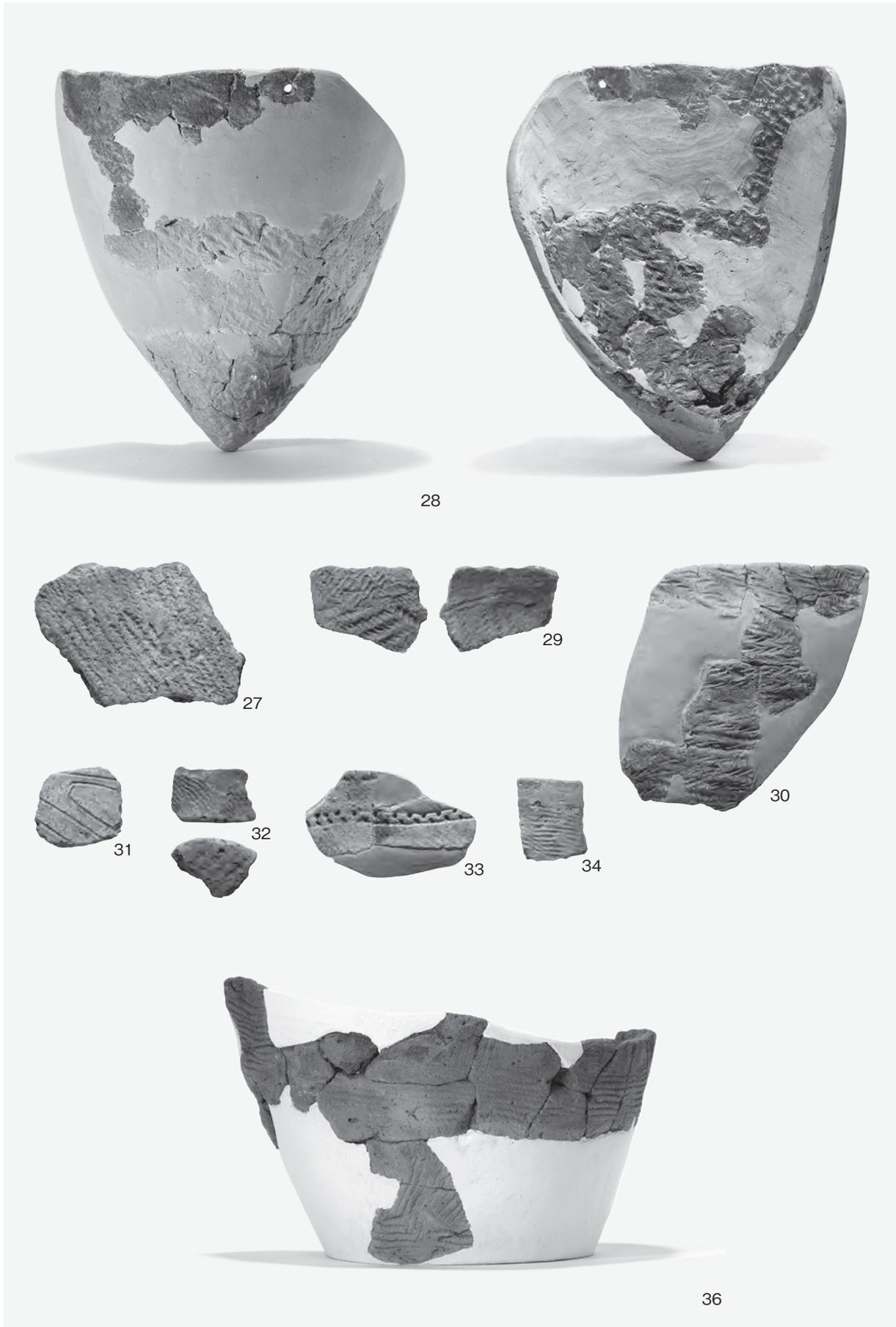
写真図版18 土器1 (S I 07・10)



写真図版19 土器2 (S I 10~12)



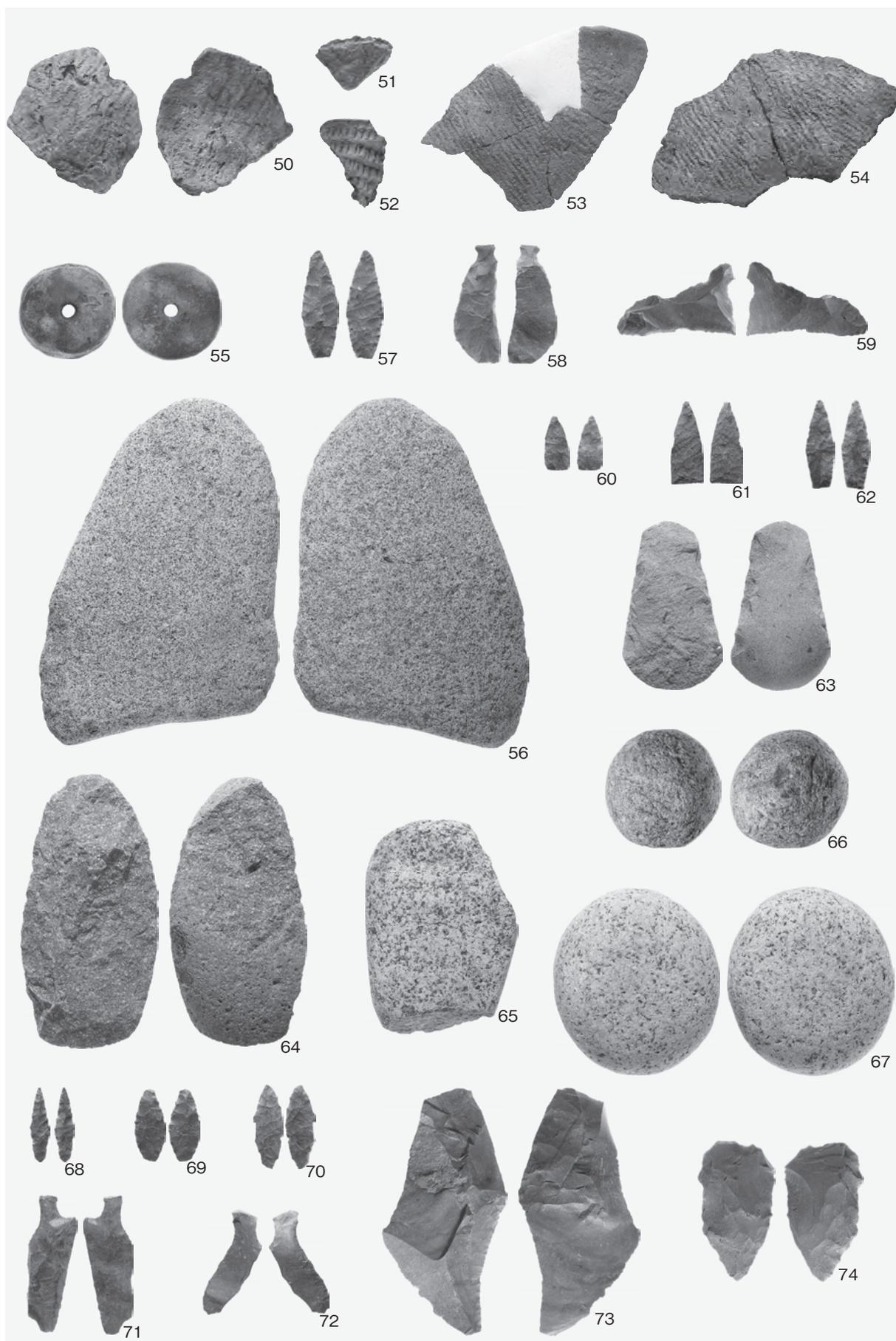
写真図版20 土器3 (S I 12・13)



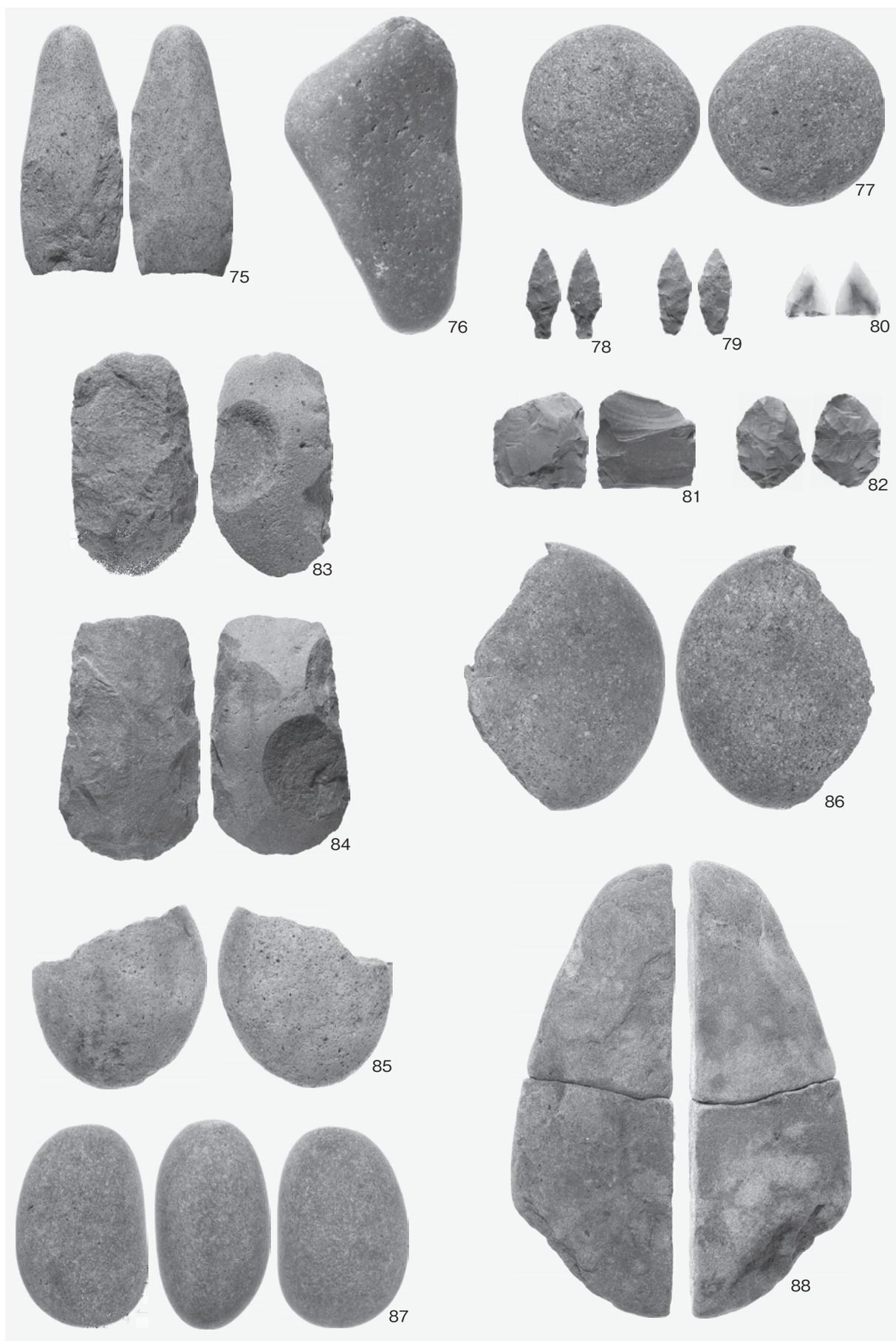
写真図版21 土器4 (SK12・21・27、SD01、遺構外)



写真図版22 土器5 (遺構外)



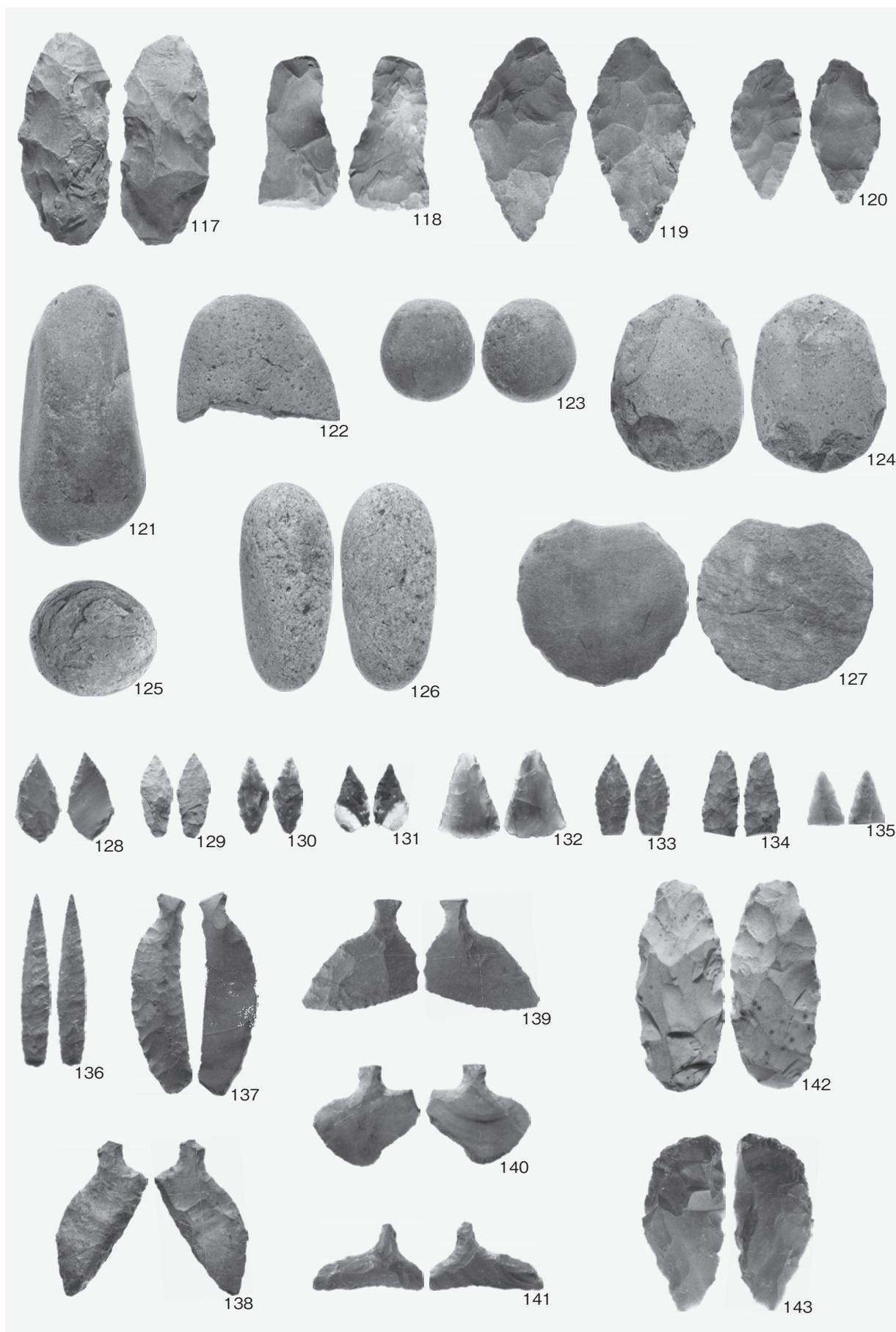
写真図版23 土器6(遺構外)、土製品(S I 12)、石器・石製品1(S I 02・04・07・10)



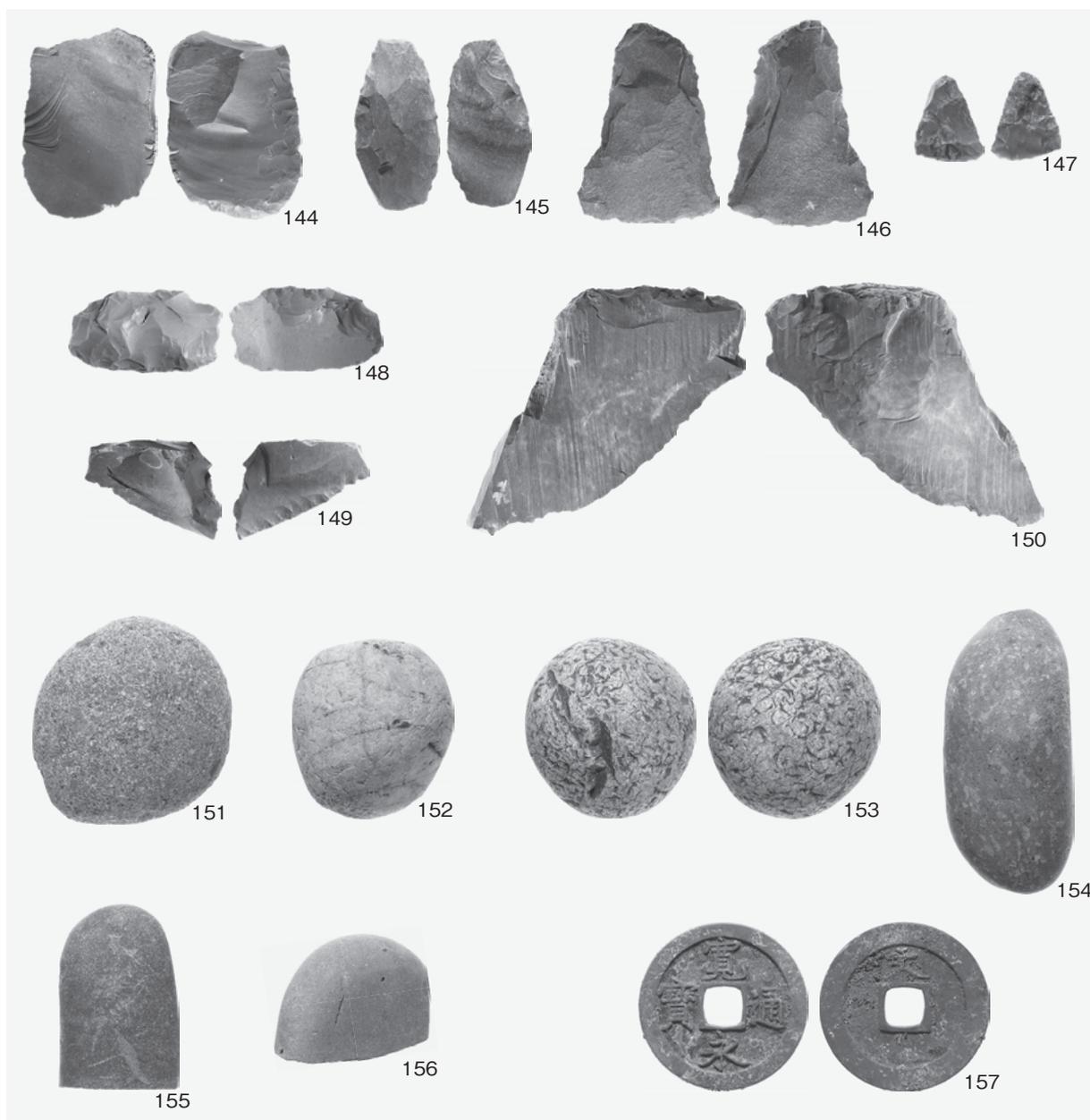
写真図版24 石器・石製品2 (S I 10~12)



写真図版25 石器・石製品3 (S I 13、S K 27・30・36・37・39、S K T 07、S D 01)



写真図版26 石器・石製品4 (SD01、遺構外)



写真図版27 石器・石製品5(遺構外)、銭貨(S D01)

## 報告書抄録

ふりがな	みなみかぬか1いせきはつくつちょうさほうこくしょ							
書名	南鹿糠 I 遺跡発掘調査報告書							
副書名	三陸沿岸道路建設事業関連遺跡発掘調査							
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第697集							
編著者名	小林弘卓・久保賢治・丸杉俊一郎・佐藤奈津季・中島康佑							
編集機関	(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL(019)638-9001							
発行年月日	2019年1月23日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 〃〃	東経 〃〃	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
みなみかぬか1いせき 南鹿糠 I 遺跡	いわてけんくのへぐんひろのちよう 岩手県九戸郡洋野町 なわいちだいちわり 種市第16・17地割	03507	IF58-1333	40度 23分 35秒	141度 42分 00秒	2014.11.04 ~12.26 2015.04.17 ~06.12 2015.09.14 ~09.25 2017.04.07 ~05.22	875㎡ 4,420㎡ 2,100㎡	三陸沿岸道路 建設事業 関連発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
南鹿糠 I 遺跡	集落跡 狩猟場	縄文時代 古墳時代	竪穴住居跡(縄文) 12棟 竪穴住居跡(7C) 1棟 土坑(縄文) 30基 陥し穴(縄文) 15基 焼土遺構(縄文) 4基 溝状遺構(近世) 1条	縄文土器 土師器 土製品 石器・石製品 銭貨	4箱 2箱 1点 7箱 9点			
要約	遺跡は洋野町種市地区の海岸段丘上に立地し、調査区の標高は約49~66m、現況は山林である。平成26・27・29年と3箇年にわたり調査を行った。主に縄文時代早期末葉(赤御堂式相当)の竪穴住居跡や土坑・陥し穴、古墳時代末期にあたる7世紀の焼失した竪穴住居跡が確認された。調査区内での遺構の密度はそれほど高くないが、調査区外へと延びる遺構も多いことから、周辺に遺構の分布が拡大する可能性が高いものと推測される。							

---

---

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第697集

## 南鹿糠 I 遺跡発掘調査報告書

三陸沿岸道路建設事業関連遺跡発掘調査

印刷 平成31年 1月16日

発行 平成31年 1月23日

編集 (公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター  
〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地  
電話 (019)638-9001

発行 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所  
〒027-0029 岩手県宮古市藤の川4番1号  
電話 (0193)71-1711

(公財)岩手県文化振興事業団  
〒020-0023 岩手県盛岡市内丸13番1号  
電話 (019)654-2235

印刷 株式会社五六堂印刷  
〒020-0021 岩手県盛岡市中央通三丁目16-15  
電話 (019)654-5610